

昭和二年十一月二十八日印刷  
昭和二年十二月一日發行

(昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可)

# 勤進帳

富樫左衛門



# 通帳

附 系譜見世書

廿式羊  
廿式轉

本屋原の勤進帳  
方難知

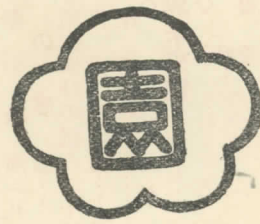


二万  
十七年の先

尾崎士郎  
作



談笑のお食卓！



梅園

お芝居の

幕間

お歸りには

お芝居での御食事は食堂にておかへりには白鷹にて一寸一ぶく江戸すしを

中座食堂

本店  
太左衛門橋北一丁  
電話南六二二七番

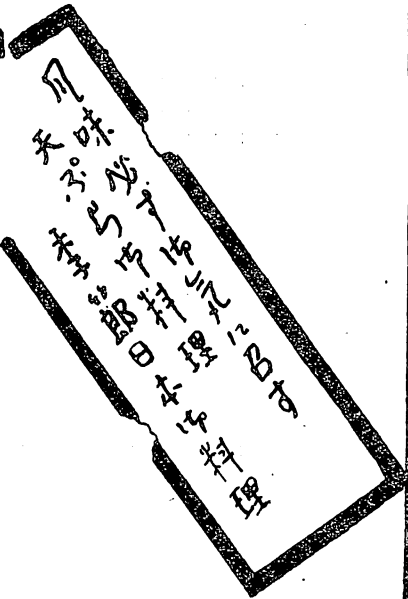


御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を



# 吉屋食堂

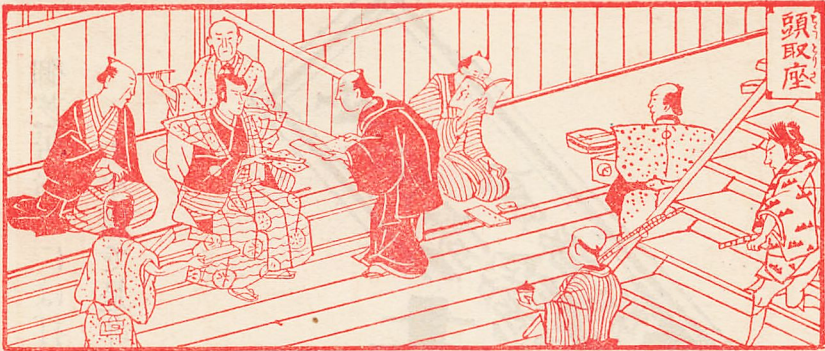


道頓堀戎ばし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町  
京都支店 木屋町ドンブリ橋

頭取座



道頓堀 (顔見世號)

第二年・第十五輯

眞寫繪口

◇「勸進帳」鷹治郎の富樫左衛門、幸四郎の辨慶◇「繪本大功記」梅幸の操、福助の初菊◇「双蝶々曲輪日記」鷹治郎の南方十次兵衛、幸四郎の濡髪長五郎◇「茨木梅幸の茨木童子」幸四郎の渡邊綱◇「藤十郎の戀」の舞臺面、鷹治郎の坂田藤十郎◇「藤十郎の戀」福助の宗清のお婿「保名」林長三郎の阿部保名◇「繪本大功記」鷹治郎の武智十次郎、幸四郎の武智光秀◇「繪本大功記」我童の眞柴久吉、扇雀の加藤正清◇「顔見世氣分の京都南座」一平家蟹「梅幸の玉蟲」尾形光琳秘藏の鏡光琳より妻女多代への讓狀(扇)尾形光琳筆

尾形光琳

南座

松居 松翁 (三)

◇「雙蝶々曲輪日記」(鸚鵡石)..... (三三)

◇「勸進帳」(鸚鵡石)..... (三二)

◇「平家」(芝居ものがたり)..... (二六)

◇「龍」(芝居物語)..... (三〇)

◇「藤十郎の戀」(鸚鵡石)..... (三四)

◇「お國と團女」..... (三八)

◇「歌舞伎競妍」..... (四三)

◇「觀劇といふ習慣」..... (四七)

◇「顔見世所感」..... (四九)

◇「光」..... (五〇)

◇「大正顔見世の總決算」..... (五五)

◇「顔見世漫筆」..... (五五)

◇「引窓から内の息子を」..... (五五)

◇「顔見世」..... (五五)

◇「型物」..... (五五)

◇「勸進帳」の初演の時..... (五五)

◇「顔見世のうた」(十五首)..... (五五)

◇「浪花座」..... (五五)

◇「償金四十萬弗」(芝居小説)..... (五五)

◇「隅田川續俳」(芝居物語)..... (五五)

白井文夫 (六)

河竹富子 (五)

大村嘉代 (五)

高安吸 (五)

堂本寒星 (五)

成瀬無極 (四)

山本修二 (四)

林久華 (三)

島華水 (三)

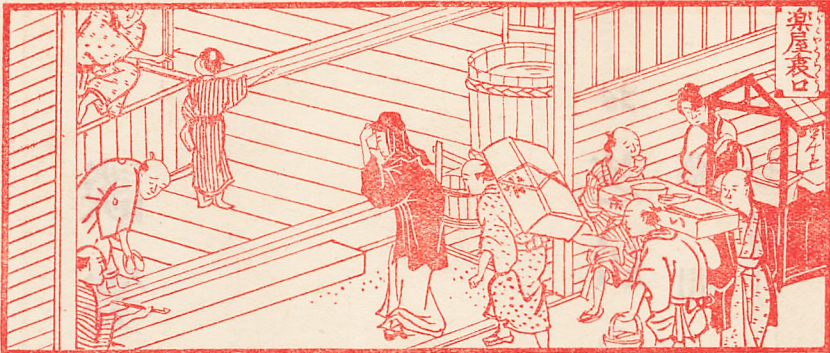
南蘇坊 (三)

しろべいじ (二)

食滿南北さしる (二)

江戸水 (三)





涼屋表口

堀河御所に 源氏（源氏）の礎（礎）（鸚鵡石）  
 田中總一郎（二〇六）

基盤の白黒 演出憶書  
 池津勇太郎（三〇）

價金四十萬弗  
 富田泰彦（三六）

昭和二年劇界の追想  
 吉本寛河（三五）

壽三郎と我童（二月）  
 尾河秀二（二七）

鷹治郎至上主義（二月）  
 鎌谷誠水（二八）

江戸製の竹本劇と大口寮の清元情調  
 新谷誠水（二七）

仁左衛門の涙（四月）  
 西田貞三（二九）

盛原經濟鑑（五月）  
 山極利行（三〇）

六月劇壇の回顧  
 京上貞一（三〇）

喜劇の七月  
 野村治郎三（二九）

伎藝座の公演（八月）  
 高木柳縁（三〇）

九月の感想  
 八木柳縁（三〇）

大膽なる新作揃ひの試み（十月）  
 川尻清譚（二四）

十一月の収穫  
 中村廓治（三〇）

文樂座の一年  
 鳥江鉄也（二〇）

昭和三年劇界未來記  
 樂屋府（三〇）

光秀の漫筆型  
 川尻清譚（二四）

玩辭樓漫筆型  
 中村廓治（三〇）

三代目雀右衛門の死  
 鳥江鉄也（二〇）

喫煙室  
 高橋蓼雨（二八）

赤紐の垂室  
 もとたら（二八）

顔見世川柳座（南北座柿茸落）  
 住田朝郎（二八）

藤十郎の戀の梗概  
 讀者俱樂部

壽三郎初演の忠信（二五）  
 讀者俱樂部

浪花座の總配役（二五）  
 讀者俱樂部

浪花座の總配役（二五）  
 讀者俱樂部

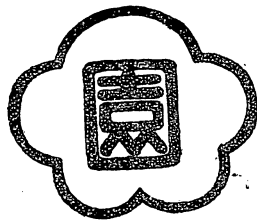
表紙（南木氏著）勸進帳  
 芳豊電

編輯後記  
 朝家郎克生

挿畫カット  
 朝家郎克生



談笑のお食卓！



梅園

お芝居の

幕間

お歸りには

お芝居での御食事は食堂にておかへりには白鷹にて一寸一ぶく江戸すしを

中座食堂

本店  
太左衛門橋北一丁  
電話南六二二七番

# スキナ脂取紙

あぶら

品質の優良は萬人の愛用！

北風寒く、木枯し吹く

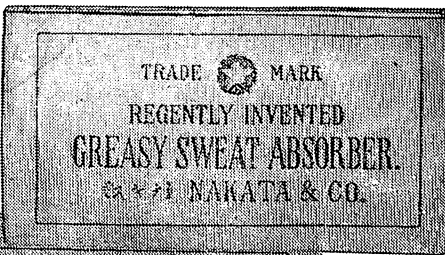
頃こなりました。

皆様皮膚を御大切にして下さい  
そしてアレ止め定評ある……

スキナあぶら取紙を

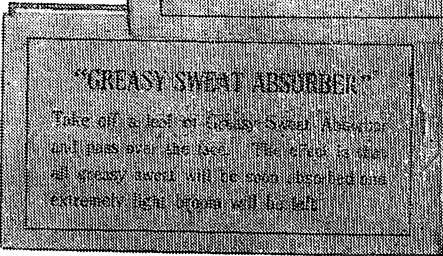
御愛用下さい……………。

道頓堀の各座、及び各地化粧品店に販賣せり  
お買求めの節は『スキナ』と御指定を乞ふ



現品縮圖

スキナあぶら取紙



本 舖  
ス キ ナ 屋 號  
中 田  
大 阪 商 店

# 小道具・小裂 貸衣裳

素人演藝會  
宴會の催物

春秋温習會  
婚禮の衣裳



## 松竹衣裳部

本店

大阪市南區久左衛門町八番地  
電話 南 一八一八番  
四七一一番

東京支店

東京市淺草區並木町十五番地  
電話 淺草 五五九九番

其他一般の衣裳を多少に拘らず御利用下さい  
御來客の御相談に應じ御便利よく取計ます



# 瑚 珊

茶喫と場酒・理科西蘭佛

隣東座天辨堀頓道  
番六五五四南話電

お芝居のお歸には是非お立寄下さい  
人氣俳優の餘技展を開催致して居り  
ます

優秀の技術と迅速が當館の有つ

唯一の誇りです。

御散索の折にぜひ御立寄りを……

高津郵便局東。

# 山崎寫真館

電話南四二四四番

全國鐵道各驛掲出廣告取扱  
京都市營電車々々內廣告取扱  
京津、京阪、嵐山電車  
沿道及車內廣告  
京都、大津全湯屋廣告  
市內掲出廣告及諸看板製作  
廣告ニ關スル裝飾建設請負

京都市三條寺町角

# 實業廣告商事株式會社

電話長中四三二〇番



石版・活版・印刷一式

京都市新烏丸夷川上ル

片岡印刷所

電話上一八五六番

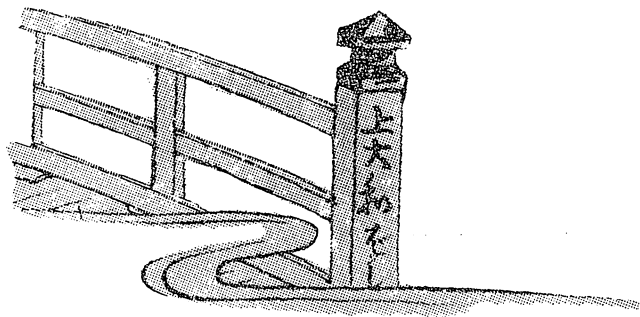
◇  
諸  
印  
刷  
◇

京都木屋町松原南

明  
文  
堂  
印  
刷  
所

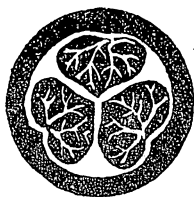
電  
下  
四  
八  
五  
番

# はいろ昆布製造販賣



電話南七四二四  
ミナトヨニシ  
れた

## 三七昆布



大阪市南區大和橋東詰東入

段野商店







中村 鷹治郎の 富樫左衛門  
松本 幸四郎の 辨 慶

「帳 進 勸」

座 南 の 世 見 顔



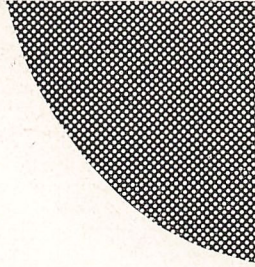
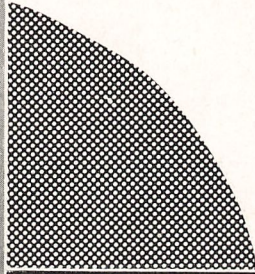


顔見世の南座 一繪本太功記

尾上梅幸の操

中村福助の初菊





顔見世の南座「双蝶々曲輪日記」

中村鴈治郎の南の方十次衛兵  
松本幸四郎の濡髪五郎



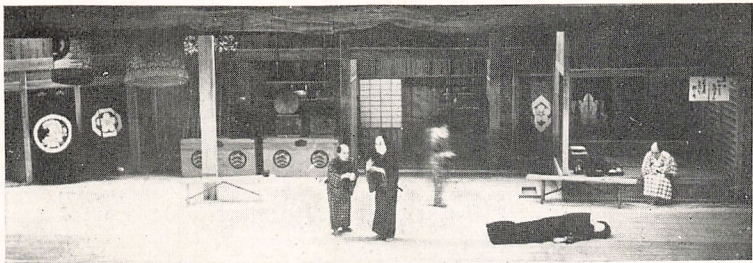


顔見世の南座

「茨木」

尾上梅幸の茨木童子  
松本幸四郎の渡邊綱





顔見世の南座 「藤十郎の戀」の舞臺面  
中村鴈治郎の坂田藤十郎



顔見世の南座  
「藤十郎の戀」と「保名」



梶おの清宗の助福村中

名保部阿の郎三長林

顔見世の南座  
「繪本太功記」尼ヶ崎の場



郎次十智武 の郎治鷹村中  
秀光智武 の郎四幸本松





吉久柴眞の童我岡片  
清正藤加の雀扇村中

座南の世見顔  
場の崎ヶ尼「記功太本繪」





座南都京の分氣世見顔



顔見世の南座「平家麿」

尾上梅幸の玉蟲



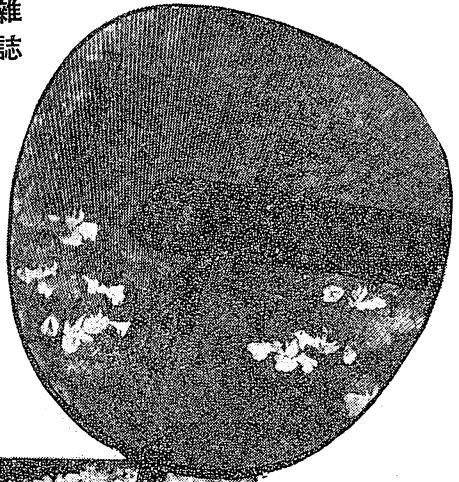


月刊・演劇研究・雑誌

道頓堀

第二年  
第十五輯

顔見世號



(品佐の珠光形尾)



南座 顔見世 興行 上演

# 尾形光琳 二幕

松居松翁

時 元祿十二年……春より初夏  
所 京 都……東山と嵐山

— 登場人物 —

尾形光琳 (光琳の師)  
 尾形乾山 (光琳の弟)  
 中村内藏介 (銀座の寄家)  
 二條綱平公 (攝中將)  
 中山篤親卿 (左權大納言)  
 西三條實教卿 (右衛門督)  
 油小路隆實卿 (前衛門)  
 中川左京權太夫 (諸太夫)  
 觀世左近 (能太夫)  
 喜多七太夫 (能太夫)  
 重助 (難波屋十右衛門頭)  
 市松 (同じく手代)  
 信七 (同じく手代)  
 善吉 (中村内藏介の手代)

八右衛門 (同じく手代)  
 渡邊始興 (光琳の弟子)  
 花見の町人 (花見の町人)  
 花見の男 (花見の男)  
 奴僕 (大勢)  
 およ (大勢)  
 お石 (大勢)  
 おかね (大勢)  
 おづめ (大勢)  
 あづま (大勢)  
 お梅 (大勢)  
 おとせ (大勢)  
 お直 (大勢)  
 お侍 (大勢)  
 二條家の侍 (大勢)  
 樂阿彌の女中 (大勢)  
 お石の女童 (大勢)  
 大原の女 (大勢)  
 花見の女たち (大勢)



# 序幕 東山樂阿彌

## の呷

枝もたわゝに咲き亂れたる櫻の大樹を中  
心にして、上手、下手に、目も絢なる小袖  
幕を春風にめくらし、其中には緋の毛氈を  
敷き詰む、幕の上とその透間よりは櫻の雲  
をすかして、うら／＼霞み込めたる東山  
一帯のねむれるが如き姿見ゆ。

幕の中には京都の富豪難波屋十右衛門の  
女房およし、秤座神善四郎が女房おかね、  
娘おのりと挨拶し居る、樂阿彌の女中たち  
五人、二人に煙草盆、茶菓子などをすゝむ  
(侍等は客の入來る毎に、一々懇勸にもて  
なす)

およしは緋縮子に浴中浴外と金糸銀糸に  
て刺繡したる小袖をつけ、天鷲絨に美しき  
刺繡したる帯を結ぶ。神の娘は小太夫鹿の  
子に友禪が意匠したる小袖は宮川祐信が  
特に意匠したる元祿模様の衣裳をつけたり  
處は京の東山、樂阿彌が構のほとり時はう  
ら／＼かに晴れ渡りし春の午後、鳥の聲、琴

の音、落花しきりなり。

およし 花見、摘草、香花、茶の湯、春の遊  
びのかずも一入多く、さぞお忙がしいこと  
にござりませうに、ようこそお出下されま  
したな。

おかね 其の御挨拶はこなたからこそわけて  
今日は東の石川さまの御内室をおもてなし  
の此お花見に、われ／＼風情までお招き下  
され、此様な難有い事はござりませぬ。  
おのり 況して、わたくしまで、お人数のか  
ずにお加へ下され、西と東の色くらべ、伊  
達薙べの花やかさを目のあたり拜見の出來  
ますのは嬉しい事でござりまする。

およし それ故にこそあなた方においでを願  
ひ、都の花の美しさを、東のお客に見せて  
上げたいわたくしの願ひ、ようこそおいで  
下されましたそれにも見事なは嬢様の  
けふのお小袖、江戸鹿の子を都の好尚にう  
つし直して、京の心を方づよう現はしたこ  
の模様は、ぶしつけながら祇園町の友禪が  
意匠ではござりませぬか。

おかね 三都の風流、唐天竺の好尚までお存  
じのあなたさま、一目に友禪の意匠とお覺

になりましたは、恐れ入る外はござりませ  
ぬ、友禪どの申ますには、伊藤小太夫が  
鹿の子を用ひたは、いさ／＼か江戸の客人に  
御馳走の心を表はす工夫とやら、何に致せ  
あなた方とは比べやうもないわれ／＼風情  
このやうなお席へは晴かましい事でござり  
まする。

およし 何の／＼御親子とり／＼の珍らしい  
お好み、あなた様のは西川祐信が思ひつき  
の模様ではござりませぬか。

おのり 如何してそれを、あなた様には、  
およし 先頃祐信が主人のもとめによつて描  
きました浮世繪に、それによつて似た模様が  
ござりました、祐信にはそれがきつい自慢  
ぢやそうで一度生きた美しい女房にこの模  
様を着せて見たいと縁かへし／＼申して居  
つたとのこと、あなたの花のお姿の飾とな  
つたら祐信もさぞ嬉しい事でござりませう  
おかね その様に仰せられては御挨拶に困り  
まする、あなた様こそ、いつとて御兎略は  
ござりませぬ、一きわ立優つた今日のお  
好み、浴中浴外の名所舊蹟を、描き上げ絶  
ひ上げさせられた其美事さ、此上もない御

縹緖さへ、一段と立まきつて錦の上の花とはこれか、女子のわたくしさへ、うつとりと致しまする。

おのり 下繪はさぞかし、名ある畫工、狩野の筆とは見えますが、唯のすさびでござりませうな。

およし 狩野も只今では江戸のものゝ様にはなりましたが、京にもまだ名人はおります、これは鶴澤深山が心をこめた京の四季畫きあげた畫を其儘に縫ひつゞさせたわらしの趣向、畏くも内裏の御障子に染た繪筆關東の人への自慢の種でござりまする。

おかね ほんに江戸のお客がどのやうな僭上をなされうと、此上の華奢風流はござりませぬ、御うらやましい事でござりまする

およし いや、關東では紀文奈良茂も舌を巻いたといふ石川どの、御内室までどの様な伊達をつくされやうも知れませぬ、それにけふは、淀屋辰五郎どの、御寮人、中村内藏介殿のおかもじもお出である筈のお二人は古今の派手者、さぞ御趣向なことでござりませう。

小袖幕の外にて「淀屋辰五郎さま、御

寮人様お出でにござりまする」といふ男の聲して、派手な扮装したる僕二人小袖幕を掲ぐる、淀屋の妻あづま、これも五彩の色を掲して、西陣の俵屋が織成したる唐織の小袖、淀の川瀬の水車と夜船と描くが如く現せるを纏ふてしづくと入り来る。

およし (立つて迎へ上座にすはらせる) 山崎からは餘程の道のり、お事多い春のこの頃、お氣の毒でござりましたな。

あづま 何の、江戸のお客人の華奢風流を拜見して、手本にしたいわらしの願ひ、いつにもまして今日のお招きには心がせかれとなりませなんだ、して石川さまの御内室は……

およし おつゝお見えでござりませう、御相客がたのお顔が揃ふたら、揃ひながら主人の趣向、席をかへてお寛きを願ひまする

あづま 有難うござりまする、それにしても心にかゝるは江戸のお客人の伊達姿、少しも早く見たいものでござりまするな。

おかね あなた方お二人の、その派手やかなお姿を御覽じたら、江戸のお客人も、けなしい事でござりませう櫻の花も恥かしいやら、お二人の前へは散りませぬな。

あづま ほんに秤座様のお内儀のお口のうまさ。あなたが殿御であつたら女敵付の騒動で世間はさわがしい事でござりませう  
おほゝゝゝゝ。  
おほゝゝゝゝ。

花見幕の外には又もや男の聲にて「大黒さま湯淺さま、後藤さまの御内儀さま、お入りにござりまする」  
僕たちまち、花見幕をたかく掲ぐ、銀座年寄大黒作右衛門の妻お梅同じく戸柳勘定湯淺作兵衛の妻おとせ、同じく勘定後藤庄右衛門の妻お直、いづれも綺麗を盡せし小袖に身を飾りて、打連れて入り来る、およし三人を出迎へ、やがて席定まる。

およし これはようこそお揃ひで、忝けないこととでござりました。

お梅 こなたからこそ、御禮の数々、もう語では申されませぬ、幸ひ今日は花に嵐のうらみもなく、あつらい向きの長閑な陽氣、心も勇んでお向ひする暖道で、お二人と一緒にになり、打連れて参りました。

おとせ わたくしなどは大魚に交つた驚知らず、一人で参るも晴がましく心を痛めて居りましたに、よい鹽梅にお連れが出来て僭



上ながらお迷惑にうかひました。

お直 兩替町からは一筋道、誘ひ合でもしたように、つい打つれて参りました、けふは西と東の伊達くらべ衣裳くらべがあるそうなど、もう都の人の耳に入つたか、暮の外はいかひ群集でござりませう。

およし それもこれもあなた方のお嗜好が常から落中の評判になつてゐる故でござります、此のやうに美しい方々が、花よりもあでやかに、着飾つて一人ならず、三人四人、いくたりも打揃ふておいでなされたら關東隨一の伊達者どもの、さすが都は、花どころと我を折る事でござりませう。

お梅 何んの〜私共は花の山なる枯木も同然、見る目が邪魔にすぎませうが、今日の主人と流屋の御内儀、このお二人はまことに京の誇りでござりまするな。

あづま およしさまは三ヶ津に並びない數寄者、ことに今日のお小袖は、永納か、深山か、京狩野の筆の力をそのまゝに、金糸銀糸に縫ひ上げた御趣向も御趣向ながら、費途に目をかけぬ寛潤のお好みがまた一段、わたくしなどの及ぶ沙汰ではござりませぬ

小袖幕の外にて、人のどよめく物音。

やがて「石川六兵衛様お内儀お入り」といふ聲し、南天の總模様の小袖つけたる、江戸の富豪石川六兵衛の妻、昂然として、小袖幕の前に立つ。

模様、染色、縫ひの技巧として珍らしとは一同の目に映せねど、熟視すれば總身數百點の南天の實はいづれも一粒數千金に値する紅珊瑚珠なり。

流手を競へる一座の婦人たちも、忽ちに自己の光輝を打消されたるを感じたり

およし これは石川さまの御内室、先程はお心入の品々、有難うぞんじまする、お相客の方々お揃ひまでのぶしつけの此席ながら祇園櫻の一本を、あなた様のために取圍んで、今日一日は東山の春の眺めを、他には許さぬが、せめての御馳走設けの席の準備がととのへまするまではこれにて御不承下さりませ。

お初 一刻千金の春の眺めをわたくしのためのお小袖幕、都の人には素氣な御隠しなさるゝとは、向ふてだに、女冥利、これ一つでも江戸から遙々と上りました効があつたと申すもの、況して今日のお相客はいづれも都に歴々のお方々とか、かく申す無重寶

者は江戸は石川六兵衛が家内、何卒御見知り下さりませ。

あづま 自分から、お名乗り致すもおこがましい、およし様からお引合せを、

およし さらば御免なされませ、こなたは東國まで鳴響いたる流屋辰五郎さまのお内室あづまさま、こなたは銀座後藤殿の御内儀、其のお隣りのお二方は同じく大黒さま、湯浅さまのお内儀、これなるは秤座善四郎さまがお内室に娘御、それに中村内藏介さまお内儀を加へてお七人、お見知りおかれて下さりませ。

(一同挨拶する)

おかね それにしても中村さまのお内室は何となきれてござりませう、ちとお手間が取れすぎるやうでござりまするな。

あづま 負け嫌ひの片意地は、東の御方にもおとるまいお石さま、石川さまの御内儀と張合ふてひけとるまいと、化粧やら、つくりやらの時の移るもお忘れと見えませう。

お初 ほんに、あづまさまとお石さまとは、京大阪の二つ星、空に並んだ天津乙女と打仰がれておいでなさるとやら、おまへ様に

お目もじつと噂の眞は知りましたが、お石さまにも早ふお目にかゝりたいたいものでござりまするな。

およし 程ならお見えでござりませうが、あなたが心をこめられた、此お好みのお姿を拜見しては、さすがに伊達者のお石さまも匙を投げるでござりませう。

あづま ほんに、わたしなども、お目にかゝるそれまでは、おのが趣向をそれほどに見下す心もなかつたが、あなた様が其寛潤なお思付には側へも寄られぬ、月と螢、俄かに此身が闊くなつた様に思はれます。

おとせ 玉の衣といふことは、唐人の榮耀榮華と諺などでは聞き知つて居りまするが、珊瑚の珠を總身に飾りつらねた眞實の玉の衣を拜見いたしまするは、今日が初めてでござりまする。

お直 我折れ、明日からは着物の事に一言の贅もいふまい、上には上のあるものを、わたくし風情が衣裳くらべの、伊達くらべのといふ事は湯上りの猿の冠三昧、ほんにお恥かしい事とござりました。

お初 これは皆様かたが遠來の旅のものに花

をもたせうとての御親切と存じまする、眞珠のべ、珊瑚をよつて、それを身體につければとて女一人の花見衣、いくらかゝるものでもござりませぬが、此南天の意匠は近頃江戸で専ら流行る葵川御宣が、肝膽を砕いての工風、若し此小袖に、取りどころがござりましたら、そこが價値かも分りませぬ。

お初一座を睨めまはす様にして昂然たる態度にて云ふ、一同口惜しとは思へ共、最初の一瞬間に全く征服せられておのが小袖に自信をもつて争はんとするもの一人もなし。一座しらみ渡らんとする時、小袖幕の外にて父もや、男の聲「中村内藏介さまの御内儀」と呼ばれて、小袖幕左右に開く時、そこに立てるは、中村内藏介が妻お石、身には黒羽二重に白無垢をかさね、些の飾りをもつけぬ氣高き。後には一座の女房たちにも劣らぬ程の美粧したる小女二人、金銀珊瑚眞珠なども造れる花籠の車をひきて、しづ／＼と入来る。

此大膽にして、しかも全く人の意表に出でたる服装には、一座の女房たち、たい驚異の目を見るばかり、さすが京の女の榮耀と寛潤とを一笑に附し去りたる石川六兵衛の女房もお石が卓越

したる意匠には、其争ひがたきを認めざるを得ざるに至りぬ、稍久しき間の沈黙やがて、けふの主人なる難波屋が女房およしの胸には、京方の勝利といふ、地方的の喜びよりも一個の婦女として敗北の悲しさと、口惜しさとが浮み来れり、およしは稍々腹立しげなる聲にて。

およし これは中村の御内儀さま、大分御ゆるりでござりましたな。

お石 花にうかる、胡蝶の心は、やがてわたしたちの今日此頃の心は、春ののどけさに憧れて、思ひもかけぬ遊夢の義はとりわけ東のお容さまに御託を申し上げます、その御託のしるしではござりませぬど京の匠の業くれをお笑草に御覧に入れたく、これまで牽かせてまゐりました、お納めなされて下さりませ。

小女二人に目配する。

二人お初の前に花車を置く。

お初 これはまた美事なお品、御辭退いたすも何んとやら、有難う頂戴いたしまする、(一禮して花車を熟視す) 都の春を織なした、花と枝とは、どれも……赤いのは珊瑚珠、白いのは眞珠。



おかね 濱の眞砂か、小石の様に籠の底まで敷きつらねた。

おのり 寶の珠も無雜作に、彫り刻んだ美事な細工。

あづま 敷からいふても、大ききまでも、お初さまのお召物より……

お初 えい……

およし (急に語をさしはさみ) やつと皆様がお揃ひになりました、さあ、どうぞ、あつちの設けの席へ。

お石 (心ひそかに愉快げに) わたくしは今

入、さあ御遠來のお客様から……

お初はたゞ茫然として花車を注視す。

花見幕の上手の方にあたりて歌舞狂言の初まる囃子の音す、舞臺はしらせなしに、極めて靜かに下手の方へ廻り行く。

やがて前の場にては下手にありし小袖幕上手の位置を限る時、舞臺は又しらせなしに止る。

舞臺所々に櫻の立木、其の散りかゝる木の間よりは、清水の舞臺や八阪の塔を遠く望める背景、下手は稻荷の社の朱の玉垣もて劃かれたるころ、殆んど舞臺一面に、元祿時代の種々なる階級の老若男女の花見の人を現はす

彼等は花見幕の中なる女房達の衣裳くらべの有様を視ひ見んと袴くを、幕の前には難波屋の手代信七、市松、其他二三人、羽織、袴の姿、派手なる姿したる、前の場の僕たち四五人にて隔て居る。

手代市松 これ〳〵その様に、無體に頭からとなされても、小袖幕の中には、もう誰も居てはござらん。

手代信七 あすこはお待合せの、一時の席ぢや、さあどうぞ去んで下しやんせ〳〵。

此時群集の中よりつと出でたるは、蝙蝠羽織に編笠扮装のいかつき武士、言葉の様子にては關東侍か、鎌髮奴の一僕を携へたり。

花見武士 こゝまでは天下の往還、退くも、進むもそちたちの殺到はつかもねえ、見られて困るべえもんなら、往還ばたで人目をたてる、自體素町人の衾の癖として、綾羅錦緞金銀珠寶に身を飾つて、衣裳くらべの伊達くらべのと、天和貞享の御趣意にも相悖り、怪しからん事ぢや、仕詰によつては所司代松平紀伊守殿に訴訟して、屹度曲事を相行うぞ。

群集は富豪に對する嫉妬と憎悪とより

此武士の語に痛快を感じ、聲を揃へて手代等を嘲笑す。  
桔梗笠を被りし町人一人つゞいて前に現はる。

花見町人 これはお武家様のおつしやる通りぢや、當節は金銀二朱金と、所爲でもあるか、金持ならは夜も日もあけず、天道さまが依估損負なしに、お笑かせなされた春の花も、眺めのいゝところは金持ちたちに紐を張られて、こちとらには遠く眺める高峯の花ぢや、切めて今日のやうな時、其我儘な金持の街妻たちを思ふさま眺めてやらぬと、こちとらの胸が癒ぬわい、さあ事のついでに、その小袖幕をかなぐり棄て、浪華の歌舞伎とやらも見物させて貰ひたいものぢや。

群集一同 それがいい〳〵。

手代市松 これ、そのやうな理不盡な、近ふよつたら柄杓の水でも拜ませうぞ。

手代信七 お上御用を勤むる三ヶ津に隠れのない難波屋さまの備しぢや、悪がきして後悔せまい。

花見武士 事によつたら、わしが一人で對談する、さあ行つて見べえ〳〵。

一同小袖幕の方へ慕進する時、番頭重助、胡麻鹽袴羽織にて出で来り、一同を和め手代たちを叱りなどし。

重助 これは近頃でない、手代共の不出かし今の若いものは、世話が焼けてなりませぬが何を云ふにも今日は關東からの御客のもてなし客も主人も女ばかり、粗そらがあつたら、此の番頭の仕損い、お武家なら腹切道具といふ處、そこはこの胡麻鹽袴に免ぜられて、お託のしるしはこの東山の燈明庵に、かねて準備がしてござりまする、なるお口なら、伊丹、池田、山本、清水、小濱南都の名が、菘被の四斗樽の鏡は抜いてござります、甘いもののお好きな方々には落雁、羊羹、小輪、松風、小川通の玉屋からは、近頃流行る臘燭頭も取寄せてござります、夕暮の風にくさめの出ぬうち、この番頭が御案内いたしませう、さあ、早うお出でなされませ、これ市松、信七、そなたちは、樂阿彌の勝手へいて、東のお客人のおもてなしに粗略あるまい、さあ御一同様燈明庵が夕櫻の下で御相伴を願ひます。

重助は先に立つて、下手へ行く、一同煙にまかれてたゞ顔を見合せつゝ跟き

行く、手代たちはあとを見送つて。

市松 燈明庵であれだけの人数の振舞したらどう安う積つても何賃目が費用であらう、番頭どんは前からその様な、用意をして居たのであらうかの。

信七 ついぞ開きはせぬが、目から鼻へ抜ける大佛のやうに腹の大きい機轉のきいた番頭どん、先刻の人達の様子から、これや、危いと見て取つて、急に趣向を立てたも知れぬて。

市松 吉原の大門を打つたといふ紀文のやうな太つ腹ほどではなくとも、江戸のお客人へのもてなしにはこれも又一興かい、それにつけても欲しいのは金ぢやな

信七 事あたらしそうに欲しがつたとどうなるものぞ、女と金は相互には、手にも取られぬ高嶺の花ぢや。

市松 せめてもの腹癒せに、餘り酒でも御馳走になつて、樂阿彌が女中たちでも轉がうしやうかい。

信七 そこらが、われらの本役でもあらうかい、さあいかのか。

市松 いのう、さあ、みんな来い。

一行小袖幕のかなたへ立去る、下手より中村内蔵介、玉子色の着附羽織、一本差、手代善吉を引連れ出で来り小袖幕の裡をのぞき。

内蔵介 この頃、今宮の來山に逢ふた時、自慢で見せられた句に「見かへれば羨し日暮の山櫻」と云ふのがあつたが、丁度この小袖幕の中の心地ぢや、敷きすてた毛氈の上には、落花がひとり主人顔で誰が置き忘れたか銀扇の一つ残つてあるのも風情ぢや、それにしても今日の伊達くらべでは、誰がうち評判がよかつたか、萬事は光琳が差略黒羽二重の白かさね、金銀五色のけばくしいあたりの趣向を消滅するは最原竟とは思ひながら、さて心にかゝるは今日の首尾ぢや、早う、お石に逢ふて其の様子を聞きたいものぢや。

お石 ほろよりの體にて、花見幕をくいつて来る。

お石 おう、旦那どの、お見えなされましたか。

内蔵介 今日の首尾の心元なさに、ちと早いとは思つたが、夕暮れの櫻をながめながら小袖幕の外までうか〜と来てしもふた、

してこの小袖の評判は、

お石 されば、一刻も早う聞いて戴きたいものと、わたしも歌舞伎狂言の見物の間をば

はづして、こゝまで出てまゐりました。金銀の縫ひ、眞珠珊瑚ちりばめた、伊達姿、

探山、祐信、師宣、名人の描いた繪をそのまゝの、工風を凝らした趣向の数々はあり

ながら、それらの意匠を残らず、下に見く

だして、たとへば花の山なる一つ松、世の春も知らぬやうなる、此の氣高い趣向には

あの負け嫌ひな、今日の主人も、洗屋の女房も、皆、我を折つたらしい顔つきでござ

りました。況してや珊瑚の珠を、この世で一番尊いものやうに身體中に縫ひとつた

江戸のお客はあの黒車に氣を吞まれ、何の飾りもない此の黒小袖に、珊瑚の色も纏せ

てしまい、顔ばかり染めて居られました。内藏介 左様ならはならぬ筈ぢや、あゝそ

れで、われらも安堵した。お石 それも、これも、あなたの衝風が、

すぐれたゆめぢや、今までは勘算にばかり心するどく、風流文事に疎いお方と――許

して下さりませ――心の底では、いつも羨

んじて居りましたが西と東の兩狩野や、江戸で名高い一蝶も頭の上らぬ今日のお手柄わたしは心から嬉しう思ひます。

内藏介 いや、左様いはれては、内藏介却つて恥ぢ入る、他の手柄をばわがもの顔にも

心苦しう思ふ故、誠を打ちあけて云ふならこれはわしの工風ではないのぢや。

お石 して、この冬趣向をお考へなされたは内藏介 尾形光琳ぢや。

お石 (はげしく驚いて) えつ。内藏介 いや、そのやうに驚くことはない、

そなたがわしの手活の花となるまでけ、あの島原で光琳と深い仲であつたことは、隠

れもない世間の取沙汰、そなたからも委しく聞いた、しかし、光琳もその後はそなた

を、とんと思ひ切つて女房もあれば妾もある、子供も二人三人設けたとやら、お互ひ

によい年をして、昔の嫉妬を胸にもつて居るにもあたるまい、聞けばあの男もよい腕

はもちながら、いつも身代は左り前、思ふまゝに筆取暇もないと聞いた故、出来るものなら、この内藏介が諸賄ひを取仕切つて

もやりたいと、實はこの度の趣向を幸ひに

まあやつと懇意を結んだのぢや。お石 そんなにして、片意地なあのお方が

ようまあ承知なされたな。内藏介 年齢は人の心を丸うする、それに當

節は何事も金が力ぢや、浮世を外の齷工ぢやとて、露を噴ふては筆は取れぬ、空腹な

い手でなければ、筆の先にも力が入らぬわあは、ハ、ハ、ハ。

お石 それでも、わたしは、あの人に、今更逢ふのが後めたらうござりまする。

内藏介 昔は昔、今は今、將軍家お目見得も致す銀座年寄中村内藏介の女房ぢや、誰に

逢ふたとて顔背けべきわけはない、向ふは筆一本が身代の裸書工の尾形光琳、有福な

われ仲間が吊負にせずば、明日の米買ふ料さへ手に入らぬ身の上ぢや昔の事などは口

にも出すにはあたらぬ、氣位を高うもつて逢ふてやるがよい。

お石 それぢやと云ふて……内藏介 はて、その様な氣弱い事は三ヶ津

隨一の伊達者、中村内藏介の女房とは得云はれぬぞ、下手奥を見て、やつ、噂をすれ

ば、影ならぬ本尊佛、あれ光琳が、こなた

（来る。）

お石 えつ（驚いて逃げんとする）

内蔵介（それを引きとめて）はて、そのやうにあたふたしては、内蔵介の威光にかゝはる、こゝで行き逢ふが幸ひ、そなたもよい程に此境を外して一方で光琳を馳走せう今日の禮には黄金千兩の纏頭、不足ではよもあるまい。

お石 お金の高は兎も角も、よもあの人がかたくしなどゝ……

内蔵介 まあ、よい、萬事はわしに委せて置け（また下手奥を見て）南無三光琳めそれと虫がしらせてか、逃げおつたぞ、（善吉を顧みて）光琳をこゝへつれて參れ。

善吉 畏りました。

善吉は下手奥へ退場。

内蔵介 こりや、事が面白うなつて来たぞ。

暮の鐘、落花、お石は櫻の根がたに思ひ入つてゐる居る、光琳は四十二歳、色變りの銅服様の羽織を着、一本差、善吉に手を取られて下手より出で来る

光琳 われら、心急ぎにて、歸宅の道すがらどうぞ、お放し下されへ。

内蔵介 いや、これは光琳どの、折柄お急ぎ

のお足をとめて恐縮々々、早速ながら申村内蔵介改めてお禮申したい儀がござつたかねて貴公の御工風を願つた花見小袖、趣向のないが大きな趣向で、淀屋、難波屋の女房たちに我を折らせたは勿論、江戸の石川が女房も舌を巻いたと申す事、誠に貴公の御働き、是れと申すも貴公は東福門院吳服取雁金屋の御二男、つい普通の書工には及びもない事と、われら此上の喜悅はござらぬ。これ、これ、お石、そちよりも御禮を申せ、御禮を……

光琳とお石とは互ひに黙禮せしみにて、顔も上得ず、稍久しき沈黙。

内蔵介（光琳に向ひ）其頃の二人の交際われら悉く存じてはをれど、それは互に過ぎ去つた夢のあと、醒めての後までも思ひ出はござるまい、只今も申す通り、この度のお働きに對しては、われらお禮もいたしたい、わけて家内よりは軍師と仰いだ貴公に勝軍の御報告もせずばなるまい、お手間は取らせぬ、祇園町は一方にて一酌差上やうと存ずる、是非に御相伴が願ひたい。

光琳 折角ながら、われら今日は一門本阿彌が催しの茶會に招かれ、只今歸宅の折柄、

ふと思ひついた、屏風の趣向、今夜は夜もすがら繪具に心は矢竹ぢや、このやうな感興とりがしては又と得がたい、お内方の花見小袖は、われらに何の工風も趣向も無かつた、まづれ當り、お禮のなんのとは却つて取ち入る、折もござつたら又重ねて……

光琳云ひ棄て、立ち去らんとす、内蔵介、慌て、其手をひかへ。

内蔵介 これはまた風流を生命とする、貴公にも似合はぬ御言葉、唐人は燭をとつて夜も遊ぶといふ春のこの頃、繪筆敲つて苦い顔せらるゝ時は、これから先にも少くない今日は枉げて御付合ひ下され（お石向ふ）これお石、そちも何故にお止め申さぬ。お石（低聲にて）折角あの様に申します故……

内蔵介 家内もあの様に申し居る、さ、是非に。

光琳 如何でもお許しは、なされませぬか。内蔵介 なかゝの事（安宅の富樫の口調にて云ふ）

光琳 是れは何とも困りましたな。此時下手内蔵介の手代、八右衛門、急

ぎ入り来る。

八右衛門 旦那様、これにお出でござりましたか。

内蔵介 お、八右衛門、何ぞ急用でも出来たのか。

八右衛門 奥川半田銀山より、松平宮内少輔様、お使ひの急飛脚が参りました。

内蔵介 さては、此頃より難しい話のあつた灰吹の事についてであらう、こりや打棄てては置かれぬ、わしは一走り自家まで行つて来る、お石、珍客はしかとそなたに預けたぞ、通したら切腹ものぢやぞ。  
思ひながら云ふ。

お石 それでも、わたしはまだ、樂阿彌に、光琳 われら一人のために八方への御迷惑、今日はいつそ御免を蒙り……

内蔵介 などと遁げやうとて、逃がしはせぬまづ八右衛門は、われ等と途中まで一緒にして、一方の門口から花車を呼び出し「内蔵介様、お客ぢや座敷三つ四つ開けておけ」と申し付けへ。

八右衛門 へえ、内蔵介 善吉はお客人のお伴をして、一力へ

行くのぢや、そしてよい程に樂阿彌へ出かけて、御新造様に急用お出迎へにまゐつたと左様云ふたがよい。

光琳 しかし……

内蔵介 悪い様には、はからはぬ、われらへ御委せなされ、委細は後程、さらば、御免下され。

八右衛門を連れて内蔵介、下手へ去る日漸く暗く花落しきりなり。稍久しき沈黙、母屋の方には法師の奏づる、上方唄、人の心をそよるが如く静かに聞ゆ。

浮寝の床に、こと問ふは、枕にかゝる涙なり。

お石 じつと聞き居りしが、やがて手代の善吉に向ひ、

お石 わしは先刻から胸先が、つかえてならぬ、善吉、近いあたり薬種屋があつたら合薬の紫雪か、外郎櫻花散、でも大事な一走りいて買つて来て下され。  
金を渡して胸を押へ。

善吉 きつう、お痛みなされますなら、お出入の玄達さまか、道三さまでも、お迎へ申

して参りませうか。

お石 なに、それほどでもない、薬を飲んだら治るであらう、早う買つて来て下され。

善吉 それではお客様、御迷惑でも、暫時の間、御介抱を願ひまする。

光琳 これはまた迷惑な……  
お石 早う行かぬか。  
善吉 畏りました。

善吉 立ち去る、光琳は寄るにも、寄られずたゞ立ち盡す、お石は尙胸を押へ苦しげに跪き居る。

せめては夢になりとも、まどろめば、短夜に山ほととぎす音にないて、はや夜が明けた。

光琳はこの唄の唱歌、わが身につまされて、われにもあらず聲のする方にすむ。

鐘の音。  
落花、その間に舞臺はもとの小袖幕の中の光景にもどる。

光琳はこの時全く一種の空想にとらへられてお石がわが前に在るをさへ忘れて、小袖幕の中に入り来り、尙唱歌に耳を澄す、お石あとより追ひ来りて、光琳の袖にすがる。

お石 市さま、あなたはまだ、此のわたしが  
それ程までに憎いのでござりますか。

光琳 (ありし昔に憶るゝ様に) 市様……市  
様……あゝわしも一度は市様と云はれた事  
があつた、戀しい人の唇から市さまと呼  
ばれた事もあつた、しかし、その懐かしい市  
丞といふ名は、戀路の闇に踏み迷ふてゐた  
若い頃の夢の迹ぢや、そのやうな、美しい  
夜は、もう明け放れた。

お石に取られた袖をふり放す。

しんぞ、つらいよ、こがるゝ、浮身の  
消えもせで、さても命は永らへて晝はひ  
ねもす泣きくらし、夜は夜床にふし沈む  
お石 未だに残る胸の痞へも、あの時の悲し  
さが、わたしの心に喰ひこんで、消える時  
のないためぢや、いつそ、あの時あのまま  
に、惜しくもない魂の緒が絶えて昇たら、  
悲しさも、苦しさも、一緒に絶えて屏たて  
あらう。

光琳 併し其の生命がなうなつたら、今日の  
出世は出来はせまい、三ヶ津切つての榮耀  
榮華に、三千世界の女たちを、けなりがら  
せる御身の上、お目出度いこととござりま

する。

皮肉に云ふ。

お石 十年経つた今日になつても、その邪慳  
なお心は、まだ直らぬか、しかし、踏まれ  
ても蹴られても尙一度、あのやうな春に逢  
ふて見たい。

槇の戸を打つ村雨や、梢にそよぐ松風や  
……………

お石 雨にも、風にもあなたの事は今でも心  
は去りませぬ、あなたがいつか御自分の影  
法師を障子にうつし書き残されし姿繪は、  
これこのやうに、今でも持つて居ります  
お石は腕守りの中より、光琳の影繪の  
姿を出して見せる。

いと涙に目がくれて、壁にそむける燈  
火の、影かすかなる曉の鐘の聲。

光琳 (懐舊の念にたえざる如く) おいてく  
れ、そのやうな、たらし文句、そなたこそ  
十年前の大夫の心がまだ失せぬか、われ等  
が兄の藤三郎殿が、若い時からの傾城狂ひ  
それを氣に病み、勘當までせられた父上の  
心の裡が、いたはしいので三十越しても紅  
白粉に遠ざかつてゐた此の光琳も、そなた

の色香に迷ふて後は、兄にも輪をかけた道  
樂三昧、父上が心をこめて譲られた身代も  
わづか一年たつたか、ぬに、大半島原の肥  
料にして、さて裸一貫、筆一本の浅ましい  
身となつた時、そなたは私を何んとした、  
そなたは自分を何んとした。

お石 わたしがあのやうになるに就いては其  
時、あなたに相談した、あなたも承知をさ  
れた筈ぢや。

光琳 左様ぢや、承知をせねばならぬ様な相  
談をかけたられたぢや。

お石 併し、あの時は 父親は死ぬ、母は大  
病、親方は邪慳なり、他に如何せう道もな  
かつた。其事はあなたもよく、御存じの筈  
であつた。

光琳 左様ぢや、それ故に、わしは内藏介に  
負けたのぢや、わしの心と腕とにひそんで  
ゐた、『繪』といふものが、内藏介が懐に  
叩つてゐる。黄金といふものに負けたのぢ  
や、しかし、しかし、その黄金といふ強い  
力を、自由にするそなた達夫婦も、とう／＼  
貧乏者の心に湛む『繪』と云ふものに頭を  
下げた時が来た、はゝは………  
ト、ヒステリックに笑ふ。

お石 そんなら、あなたは、その時の復讐をしようためにこの小袖の趣向をして下されたのか。

光琳 いや、わしはそなたのためには何一つ風もせぬ、趣向もせぬ、一旦そなたに棄てられた「繪」といふもので、どうしてそなたを飾りやう。黒の小袖で出るといふたは、昔の戀を墨染の法衣で包む、わしの意地ぢや。

お石 (思はず泣き伏して) それ程強い憎しみが、まだ貴方のお心に消えずにゐたのでござりましたか。左様とも知らず良人には心で詫を云ひ乍ら、いまだにあなたを思ふてゐた、私はそれが口惜しい。

光琳 お、憎い、あの時のことを思ひ出す度、修羅がもえる、わしはこのやうにそなたを憎んでゐるが、それでもそなたは忘れられぬ、もしわしに「繪」といふものがないかつたら、わしは疾うに氣が狂ふて、淵川に身をすてゝ居るであらう。

お石 いや、それは嘘ぢや、あれからあなたは程もなく、御家内をお迎へなされた、他には家へも呼び入れられぬお子さまさへ

出来たさうな、聞けば近頃はお家の中にもお妾があるとの事、それ程までに移り氣なあなたが、身も心もはなれてゐる私を思ふなど、云ふのは、それはみんな詐りぢや、わたしを苦しめやうための、こしらへ事ぢや。

光琳 いや、それがそなたに對する、此のわしの執着ぢや。

お石 えつ。  
とかく、かなはぬ世の中にあつと思はじとは思へ、とは思へども、又すてがたき光琳 彼の女にいくたり逢ふても、そなたで賀えた初戀の、あの樂しみはもう得られぬそれ故此頃は妻子のことも色戀も、ふつとばかりに思ひ切り、鞍馬口に庵を結び、繪にのみ心を傾けて、筆の外には親友もなかつたに、内藏介より小袖の相談をせられてからは、又立ちさわぐ心の煩惱、想もま

とまらず、筆もつ腕に力なく、そなたのこのみ思ひつゞけて近頃は繪の神にさへ見離された、けふも本阿彌の茶の會とはまつかな詐り、そなたの姿を小袖幕の透間からものぞいて見たいばつかりに、拔殻のや

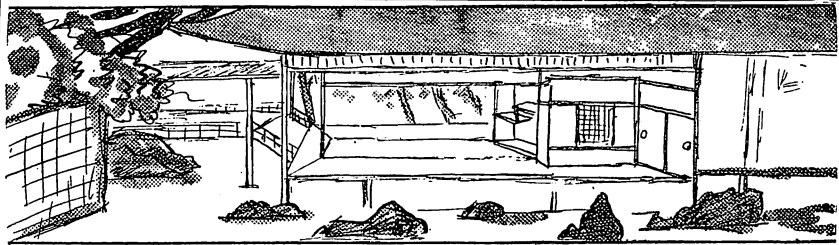
うな身體をこゝまでは運んで来たのぢや。すざし別れに逢瀬といひし言の葉を忘れまい。

お石 (烈しく感動して) あ、わたしのやうな思ふかしい女は、またと二人此世にあらうか、背いた殿御の心の誠を、十年經つて初めて知つた。  
毛氈の上なる銀扇を拾ひあげ微塵に引きさく。

この世はさておき後の世もかうさて、な、逢ひ見ての後の心にくらぶれば、かほど物をば思はじものを。昔し戀しや、今の身は。

光琳 併しそれはもうおせい(氣を取りなほして)何事も定まる運ぢや、わしは再び、「繪」にかへらう、そなたは夫に歸るがよい光琳立ち去らんとする。お石これをとめる、小袖幕の簾に聲聞ゆ。

兩人思はず離る、幕をかかげて先刻の手代善吉と、光琳の弟子渡邊始興文箱をもつて入來る。  
光琳 お、始興、如何にしてこゝへは、始興 只今、今出川の二條家より火急の御使



でござりましたが、東山と云ふのみにて御行光も定かならず、探しあぐんでをりましたにこの御人に御目にかゝり、御案内を願ひました、(手紙をさし出す)

光琳 それは御苦勞であつた(手紙を開いて見る)こりや、われらを法橋に御仕官の御内意ぢや。

始興 なに、御師匠さまが法橋に……

お石 その御出世を見るにつけても……

光琳 これも偏に二條公の御推舉による處、これより直ぐに今出川の御殿にまゐり御禮を申上げる事としゃう、始興も共に参るがよい。

始興 畏まりました。

兩人小袖幕の外に出でんとす、善吉は光琳を引止め。

善吉 あなたは一方のお約束をお忘れになりましたか。

光琳 御覽の通りの俄かの急用、今晩は御辭退申す、委しくは御内儀より御聞き下され

光琳は云ひ放つて始興と共に小袖幕の外に出づ。

お石 (思はず後を追ふて) 市さま、しばらく……

善吉 (訝かしげに) 市さまとは……

お石 (おどろきながら、云ひ消すやうに) いえ、云ひつけた薬は何んとしやつたり?

善吉 おゝ大事の御用を忘れかけた、御申付けの紫雪を、とよのへて参りましたが、して御氣分は、如何でござりまする(薬を渡す)

お石 おゝ少しは治まつたやうなれど、今の話でまた胸が……

善吉 えつ。

此時奥にて女の聲す。

女の聲一 中村さまの御察人さま。

同二 お石さま。

同三 お石さま。

お石 わたしを探れて居られるそうな、はい、たい今、それへ参りまする。

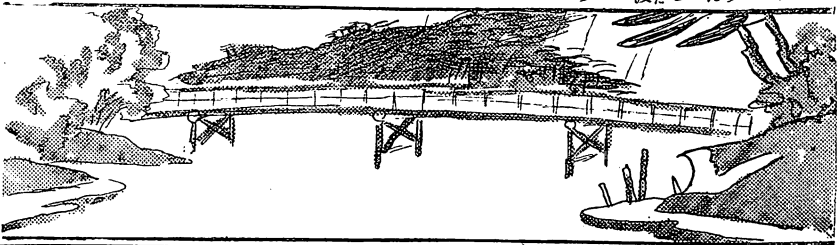
お石は上手の小袖幕をくゞりて奥に入る、善吉不審氣にその方を見送る。

幕

第貳幕 嵐山二條

關白別業

大井河に臨める風流なる座敷 正面は上





手下手に打曲げたる欄干其向ふは川水川を隔て、若葉の緑濃かなる嵐山に對す初夏の雨煙るが如く若葉に注ぐ、上手は杉戸にて能舞臺に通じ、下手は襖にて他の室に通ずる心。

上手の方にては今しも「江口」の切にて、シテを勤むる光琳の「賞相無齋の大海に、五塵六欲の風は吹かれども」の謠ひの聲聞ゆ。

「江口」の囃子終り近くなりし時、二條家の侍女一人、旅姿の乾山を伴ひ下手より入り来る。

侍女 光琳どのには、只今舞臺でござりまするが、樂屋へおはいりなされましたら直ぐにお知らせ申しまする。

乾山 何分よろしく願ひまする。

侍女 しばらくお待ち下さりませ。

襦をしかせ煙草盆を直して立去る、乾山は立つて柱にかゝり、後の景色に眺め入る。

乾山 引き入れらるゝやうな穢かな眺ぢやさすがに玉城、江戸には思ひもよらぬ景色じや、が、このやうな静かな、角のない景色にばかり包まれて居ると、人の心は仄うな

る、腐つてしまふ、兄貫などは心も腕も腐りかけたらしい。

侍女茶を運ぶ来る。

侍女 お茶一つ召上りませ。

乾山座に復す。

乾山 お稽ひ下さるな。

侍女 光琳どのに申上げましたれば、直さまそれへ御出でなまるとの事にござりまする。

乾山 いろ／＼お手数でござつた。

侍女一禮して下手へ去る、上手より光琳「江口」のシテの姿をしたまゝにて出で来る。

光琳 おゝ弟か、まだ四五日は間のある事と思ふたに、存外に早ふ上られたな。道中何の別條もなく……

乾山 有難うござる、上野の御門主より急の御用を承り、俄かに出立致す事と相成つた。何は兎に角此度の法橋御仕官、兄上の御技術としてはさうなければならぬ事ながら、先づもつて祝賀至極、江戸表にても同好の間にはとり／＼の評判でござる。

光琳 その折は早速の祝物、忝うござつた

ことには彼の大森の海苔といふもの、父上御存生の頃はじめて作り出されたと聞いておつたに製法一段と上手になつて、その香と云ひ、味といひわけてもあの色、あればつまりは京大阪には知らぬ珍物、まことに忝うござつた。

乾山 いや、お禮ほどのものでもござらぬが成程兄上には好かれそうな淡泊な物ぢや、時に、上落早々山里町の方へ參上致したところ、姉上様より二條公御下屋敷と承り推參も如何とは存じたが、急々お目にかゝりたい事があつて、かくは旅裝束もよりあへず、御邪魔にまゐつたがお目にかゝれて重疊でござつた。

光琳 禁裡に召されたらいざ知らず、權平歸着とあるに何さしおいても逢はずに居られうか、してその用事といふは如何か、上野の御門主より如何様な、御用仰せつかつた身不肖なれども今日は法橋光琳、この細腕にかなふ事なら、何なりと助力せうぞ。

乾山 思召は忝けないが、上野の宮様御用はわたくし一人にても事足りること、實はお聞きおよびでもござつたら、昨年八月東叡

山の諸堂落慶入佛式も相濟んで、王城の鎮  
護觀山をそのまゝに東の都に移した姿御門  
主にも此上なき御満足、何事も心のまゝな  
る世の中に、情けなきは此春滿山の櫻に來  
鳴ける鶯、音に詠りありて聲爽かならず、  
寢ざめの窓に經讀む聲もいたづらに都の空  
を慰しと思ふばかりあはれ京の鶯を數百羽  
を捉へ來よ吳竹の根岸の里に放ち給つて來  
る春毎に都の氣分を味はんと御門主の御説  
今手に入れでは來春の間に合はずと、それ  
故先頭叔父御宗中殿にお願ひ致した消息よ  
りも取急いで上京の事と相成りました。

光琳 旗本の町奴のと、殺伐なるが江戸の今  
日の有様と聞き及んだにも似もやらす、風  
流な其企て、乾山、わしも江戸が見たうな  
つた。

乾山 (思はず膝を進め) 兄上、それは事實  
でござりますか。

光琳 されば、富士の姿、田子の浦、業平が  
歌を残した隅田河原の景色も見たく、武藏  
野に生ふる秋の草々、逃水とやらも一度は  
繪にしても見たいと思ふが、併し今年は厄  
年、幸ひに今のところでは法橋の仕官など

厄勝の氣味もあれど、まだ何とやら氣が進  
まぬ、併し二三年が中には、是非とも下る  
事にしよふぞ。

乾山 併しわれらの考へでは、今こそ兄上が  
京を離るべき大事の時期と存じまするが。

光琳 何と。

乾山 かゝる姿にて推參致したも、實は其儀を  
申し入れたためでござつた、兄上あなた  
は此頃金のために繪を作る、繪職人となり  
下られたよ。

光琳 (むつとして) 権平、そちは亡き父上  
の秘藏の末子、残るわれとは趣味を等しく  
風流三昧に世を送れば人も羨むばかり、睦  
まじく話し居れど、かりそめにもわしは兄  
ぢや、他のことは免もかく、わが繪につい  
ての批判とは片腹痛いわ。

乾山 それなれば兄上は何故金持どもの禮元  
につき、中村内藏介が女房風情の着物の趣  
向に心をお碎きなされませしたぞ。

光琳 そなたはあの話をもう耳にしたか。  
乾山 石川六兵衛が妻の立歸つての人への話  
内藏介の妻女には負けなんだが、光琳の繪  
にはしてやられたと涙を浮べて悔んだとや

らあの内藏介の女房こそは兄上の「繪」と  
いふものを潰すも同然、如何なる權威にも  
黄金の力にも、首うなだれぬところにこそ  
講工の價値はあるものを、兄上はそれほど  
金が欲しいなられたか。

光琳 (微笑を含み) そなたなればこそ、そ  
れ程にまでに、此兄が身を思ひ呉るゝ、今  
の一旦の怒りは許してくれえ、が、それは  
そちの思ひがちがひぢや、成程、あの女はそ  
ちの云ふ通り、わしをすてた女ぢや、わし  
の『繪』を黄金に見換へた女ぢや、それ故  
にわしは、の女のためには、わしの『繪』  
の心はつかはなんだ『繪』の筆も染めなん  
だ、黒羽二重の白重ね、たゞそれだけの趣  
向のない趣向を致へてやつたのぢやが、そ  
れが當つて一座の花紅葉が色を失つたは時  
の表裏ぢや、わしの知つた事ぢやない。

乾山 成程さう聞けば兄上には有りそうな事  
ぢや、が、使ひもせぬ心の禮動かしもせぬ  
繪筆の料に、何故千兩の金を受け取られた  
光琳 は、は、は、は、抜かぬ太刀の功名、われ  
は心を痛めぬど、先がそれにて調寶すれば  
千兩とて高うはあるまい。

乾山 いや、それはかいなでの御工のいふ事ぢや、大叔父本阿彌光悦どののはたつた二兩で求めた刀を磨きにかけて、天晴れ名刀と知つた時、おのが鑑定で倉忽を詫び、二百五十兩の折紙をつけて返されたとは父上の寢物語りに兄上も能う聞かれた筈、また叔父の宗甫どのは大猷院さま御上落のお土産に一簇四軒は一家この様に頂戴すべきいわれは無いと、其中九枚は所司代まで返上したといふ話もある、清廉はわが家の家訓「一心正直」には、父上が譏状へ記された大事の文句ぢや、聞けば中村内藏介の番頭重助が持参せし慶長小判、一應の辭退もなく喜んでお受けあり、その後も座右を離さずしばらくは絹も紙も見かへらず、そればかり眺めくらし居られたとやら兄上には千兩の金がそれ程に貴いか、去年通用差止めと相成つた金性のよい慶長判、使ふも惜いと珍重されてか、それが即ち書かぬ繪を黄金にかへた職人氣質ぢや、直の畫工の風上にも置かれぬなされ方ぢや。

光琳（苦笑して）また、うちの山の神めが焚きつけ居つたな、まことに悪妻は六十年

の不作ぢや、乾山、そちの兄嫁は畢竟畫工の妻ではない、あれこそ商人か職人の女房になるべき奴であつた、あの女の心のどの隅にも、給もなければ風雅もない、それ故にわしの心はとんと呑み込めぬのぢや、成程千兩といふ額はわしの今の身分では決して少ない金ではない、が、金の貴きは相手にもより、場合にもよる、なまじあの金を納めなんだから光琳は千年経つた今日まで、まだ昔の女に未練があつて、それ故貧乏意地を立てるなど、世間の口も煩さい故、受けるには受けて見たが、さてその使ひ道には大きに困つた、千兩箱を前に置いて、太息を吐いたも嘘ではない、が、よう／＼思ひついたは今日のお能ぢや、幸ひ二條綱平公、わしの法橋住官の祝ひの心も兼ね、此お下邸の舞開きをせられうとある、かねて入懇下さる、油小路、西三條、中山の卿も裝束つけて舞はうと仰せある、一代の響れ此時と、さてこそ彼の小判を延滞とし、鏡板に繪の具を盛り上げた光琳が丹青、乾山、そちには是非褒めてもらひたい、が、それでも使ひ切れぬ厄介なああの黄金、これ

こそ光琳が一代の趣向、やがて後程中入の時がまゐれば分明する、いくら氣の早い江戸氣性とて、乾山、感化かたがチト早過ぎる、まあ郷に入つては郷にしたがふぢやもとのんびりした京の心になつてお能でも見物するがよい。

乾山 成程兄上は兄上だけ、弟にはわからぬ所存もありそうぢや、それ聞いてわしは少しは安堵した、が東下りには是非お勧め申したい、景色は富士をのぞいたら、京の南都に及ばうところは一つも無いが、江戸は人間面白ところじや。

光琳 人間……併しわしが逢ひたいと思ふた芭蕉は一昨年死んだ、團十郎も元字金で五百兩の繪銀に自慢の鼻を齧らす様では、わしが思ふた様でもあるまい、人間は俗ぢやといふが狩野の畑から出たにしては珍らしい英一蝶、あれには逢ひたいと思ふたが流罪ではその望みもかなわぬ、師直長春の浮世繪はまだ見ぬが、こちらの祐信で察しがつかふ、今の江戸には大して逢ふて見たと思ふ人物もなかりそうぢや。

乾山 いやわしの云ふ人物は誰彼と名ざゝる

人物のみを云ふのではない、一體に江戸は生きた人間の居る處ぢや、鬼湖解由どのが大目付となられてからは、幡隨院の流れを汲む町奴の跡は絶えたが、旗本にはまだ骨の堅い輩が多い、殊に嬉しいは女ぢや、江戸には金と繪とをつりがえにする様な女ばかりではない、錢勘定に一生を送る女ばかりではない、眠つた様な懶い顔をした女ばかりではない、つい此頃も思ふた事ぢやが兄上の花鳥風月を見る目こそは日本一ぢやそれをさながらに描く筆も日本一ぢや、これからは人間をも見てもらひたい、それには江戸へ行かねば無益ぢや、生きた人間は江戸に居る、兄上、わしと一所に江戸へ行かう。

此時上手の方にて「源氏供養の」能の終りし心にて、諸の聲切れる、やがて侍女、ちだ走り出で、そこ、褥を敷く、上手より二條綱平公、中山篤親卿、西三條實教卿、油小路隆眞卿、二條家の諸太夫中川左京權太夫、觀世左近喜太七太夫など出で來り、よき處に住ふ綱平公 おゝ光琳が舍弟乾山ぢやな、乾山い

乾山 東叡山御門主の内命を蒙り、今日上洛致してござりまするが兄光琳へ火急の用事出來御殿の推參致しましたに、かゝる失禮の體を御目に止り畏れ入つてござりまする網平公 磨は武家と違ふて、格式よばゝりはいから嫌ひぢや、殊更今日は無禮講ぢや、その心配には及ばぬ、一座の人たち大半は乾山御馴染と存ずる、知らぬ人には磨が細合そう、光琳が舍弟乾山深省と申して陶器の名人ぢや。

西三條 如何ぢや、江戸は面白い。

乾山 住めば都さして變りはござりませぬが空風と火事の多いには困りまする。

中山 昨年も兩三度大火があつたそうぢやな朝廷に對して尊敬の足らぬ中は、天も江戸には滅多幸ひを下す事では無いわ。

油小路 中山どのが例の慷慨沙汰、壁に耳ある世の中ぢや、もう其の様な話は止しになされえ。

中山 乾山どのには兄上の「江口」を御覽にならで残念な事であつた。

綱平公 併し目の果報は薄くとも口果報の多い男ぢや、乾山、そちの兄は大金を持ちつ

かふて、今日はわれらにも馳走をするといふ約束ぢや、光琳、如何ぢや、そろゝ馳走にならうではないか。

光琳 畏りました、(侍女たちに向ひ)準備がよくばこれへ御持入れ下され。

侍女たち相顧みて笑ひを殺して下手へ立去る。

觀世 光琳どのが御趣向とあればさぞ面白い事とござらう。

喜多 早ふ賞讃致したいものぢや。

侍女たち、竹の皮つゞみの辨當を廣蓋の上に乘せ持ち來りそれを白木に彩色の折敷にのせて、各々の前におく、他の侍女たちは一同に酒をすゝむ。

光琳 愈未ながら光琳が趣向の辨當、召上り下さりませ。

綱平公 (采れて竹の皮色みを開きもやらず) 光琳、これがそちの趣向の辨當か。

西三條 如何なる珍味が入り居るか知らぬが竹の皮つゞみとは、下賤のものが扱ゆる、割籠がはり、こりや不思議な物好ぢやな。中山 (皮を開いて) いや、趣向々々、表は愈未な竹の皮ながら、裏は一面の伸金、茸も松も光琳尙繪は「江口」の心を見せた

のぢやな。

油小路 さすがは光琳、心憎き風流感じ入るの外はない。

光琳 (侍女たちに向ひ) 綱平公を始め御一同様召上りなされましたら、見苦しい竹の皮は、川瀬へおすて下さりませ。

侍女一 あの、この様なお美事なものを。

綱平公 成程そこが法橋光琳の貴いところぢや。

侍女二 併しこの辨當は今日のお客さまたはいふも更なり、われ〜風情に至るまで残らずお配りなされたので御座ります。

中山 光琳どの、數百人に餘る人數の辨當、まさか一同へは此仲金を？

光琳 (微笑を含み) 風流に貴賤なし、この光琳の任官をおよるこび下さる方々へ光琳がほんの寸志、但し黄金は些細な事竹の皮と仲金とを貼り合せたゞけがわたくしの自慢の細工でござります。

綱平公 この竹の皮一枚たりとも持歸るものあつては光琳が風雅の心になわぬ、女ども、敷をしらべて大井の川底へ沈めてしまへ。

侍女たち 畏まりました。

侍女一人下手へ立去る。

光琳 拙き趣向も皆さまの思召にかなひ光琳面目を施しました、それにつけても此光琳此上の修業も致したく、弟が勧めにしたがひ、しばらく江戸表へ立ち越え、心も腹も養ひたる存じます、乾山が用事済み次第早速下向の所在決着、略儀ながら此席にて御暇乞を致します。

綱平公 なに、そちは江戸へ下る？

中山 江戸は人間も殺伐、處も邊鄙ぢや、あの様な處へまゐつたとて、何の修行になるものぞ。

光琳 花鳥風月無常、人間百般の事ども一つとして、わが師匠でないものはござりませぬ、變つた土地、變つた人間、それも修業の種と存じます故、東下りを決心致したのでござります。

中山 修業の事は磨には分らぬが、東夷にそちの繪を見せてやるも、大きな功德であらうも知れぬわ。

綱平公 そちが居らぬやうになつては、京も一段と淋しうなるのう、が、此綱平は其中にては幸福なものぢや、そちが一代の大作たるあの鏡板の松を友とし、しばらくは、

また舞臺に親むのぢや。

光琳 その御語こそわたくしの心には常住の答、數年が程にはあれにもまさる大作を仕上げ、それをば土産に御目通り致すござりませう。

綱平公 お、磨もそれを樂みにそちの歸洛を待つて居るぞ。

光琳 辱う存じます。

侍女一、下手より入来る。

侍女一 上の御都合次第、次なる番組にとりかゝりたしの事にござります。

綱平公 お、初めえと申せ。

侍女一 は、あ。

綱平公 侍女一、下手より去る。

綱平公 この度の番組は「杜若」ぢやな。

光琳 御意にござります。

綱平公 シテは誰ぢや。

觀世 シテは木村主膳、ワキは日吉權之太夫にござります。

綱平公 乾山、この度の能はそれほどの物でもないが、そちが兄の筆を揮つた鏡板は天下無類ぢや、兎も角も見物の相伴せえ。

乾山 有難う存じます。

一同起ち上る。

「杜若」演奏の囃子上手に聞ゆ。

幕

同じく返し

### 渡月橋上

微かなる雨音と蛙の聲にて暮明く。

上手は若葉に埋もれたる岨路、前の方は

たわに咲ける山吹の黄金の花を浸せる川

岸、そこより一橋長く下手に延びて木立の

中に入る、橋の彼方は大井河の上流をのぞ

みたる心にて、たちまちにして急湍、たち

まちにして深淵、雪の如き瀬と、油の如き

流れとを交錯したる河水を挟んで、雨に濕

へる兩岸の若葉は縁滴らんばかり。

橋の中央に後向に、中村内蔵介の妻お

石、合羽姿、傘をもちて佇み居る、上

手より大原女三人、下手より船夫二人

出で来り無言ながらお石を見て怪しむ

心にて上下を去る。

お石（前の方を向きかへり）『梅が枝』の囃

子もしまひになつた、市さまはまだ御歸り

にはならぬのか、あの東山の花見の時から

わたしの心にはまた昔の戀が湧え返つた。

どこやらに心を叱つても、私は市様が戀し

うてならぬ、今日も嵯峨の母上を見舞とこ

しらへ、供の者は嵯峨へのこして、こゝま

では来て見たが、さすが打つけに二條さま

の御殿へもうかざはれず、往來の人に顔を

見られながら、もう半晌あまりも立ち盡し

た、今日もお顔が見られななんだら、わたし

の胸は破れてしまはう、もう夕鴉は時に急

ぐ、船夫だちも水棹を肩に兩へ上つた、市

さまは何故かう遅い。

此時雨晴る、上手に足音、お石はそれ

と見て上手岸頭の柳の蔭に隠る、乾山

と光琳は話しながら出で来る、乾山は

は旅合羽を着けし前幕の姿、光琳は合

羽に足駄、兩刀を佩き傘を手にして出

て来る。

乾山（笠を頭上より外して見る）こりやい

い鹽梅に雨が上りましたな、若楓、山吹、

淀める水、いづれも兄上が御得意の繪の材

料ばかりでござりますな。

光琳（いつ見ても新しいは自然の眺めぢや

そこへ行く人間は、そなたのいふ通り變

化が無うては面白くない、醒めた人、生き

た人、今度の江戸下向は面白い事であらう

お石聲を聞いて、つと柳のかけより身

お石 市さま………

を現す。

光琳 やつ、お石どのか、如何して此處へは

云ひよつて乾山を顧みる、乾山は光琳

に目も替飛す。

光琳うなづく。

乾山はいそぎ橋を渡つて下手へ行く。

お石 市さま、市さま、あなたは光琳と名を

かへられても、法橋に任官せられても、わ

たしには矢張りもとの市さまぢや、あの東

山の花見の日から、わたしの胸は蘇へつた

此あなたは、矢張りもとの市さまぢや、天

下に名高い勘工、法橋光琳は、わたしの戀

人では無い、世間に名をこそ知らねど、心

と腕に名書を潜めて居た其頃の市さまが、

十年経つた今日でも、矢張り戀しい人ぢや

「繪」といふもの、價値を知らず、黄金の力

に打負けた不甲斐ない素人のお石はとうに

死んだ、もとの大夫の左門と思ふて、市さ

ま、たゞ一度許すといふ語を聞かせて下さ

りませ。

光琳 この橋の下を越く水は、再びもとの流

るゝ水ではない、今日の光琳は市丞時代の

わけではない、この程東山で、恨みつらみ



をいふた、光琳でもない、いや、つい今しがた「江口」を舞ふた光琳ですらないのぢや、今の光琳はこれまでの一切煩惱の羈を絶ち繪畫の妙諦に勇猛精進の本願を立てたその彼岸こそは關東の山河草木、新たに興る江戸の繁華の根源を探つて日の本に背しから傳る倭繪を作り上る光琳の覺悟ぢや、今ははや戀も無常も眼前の一塵、妻にも子にも暫時の執着を絶つて、丹青の技の外には心は閉ぢる、かくて光琳一度都を去らばそなたが迷ひの雲霧もおのづと舞れ、内蔵介どのに對する操の鏡、やがて光りを増すであらう、徒らに過古を追ふ時は、われも亦過去の人ぢや、お石どの、お互ひに新しい人に生れかはり、新しき希望に生きやうではないか。

此時雲間より三日の月現はる、お石涙にむせぶ。  
光琳（立上り）空も晴れた、月も上つた若葉の匂ひは身に浸みる。

光琳徐かに橋を渡つて去るお石身を起し、茫然として其後姿を見つむ、水の音、時鳥の聲。

幕

## 光琳の古蹟探訪記

南座の卯年「顔見世」では畫の部に松居松翁氏の新作「尾形光琳」が上演される。そこでこれを機として「光琳に關する展覽會」を同座で開くこととなり、光琳の家系、人物、墳墓などを調べて見た。

先づ尾形家の家系を見ると、その遠祖は豊祿の住人緒方三郎維義で、維義は人も知る九州一の弓矢取「源平盛衰記」や「平家物語」には太宰府落の平家の軍を三萬餘騎の勢で追ひ散らした猛者であると傳えてゐる。

光琳はその末孫宗謙の子で、乾山はその弟である。宗謙は東福門院の吳服所を勤め、雁金屋の暖簾を懸けて、京都西陣中立賣に住し萬治元年光琳を生んだ。

光琳の一生は元祿を中心として、その前後の三期に分つのが、最も妥當とされてゐる、元祿以前即ち雁金屋市丞時代は、彼れの準備修養時代で、父を失ひ遺産の分配を受け、一轉機に逢會してゐる。

元祿期は尾形光琳時代で、父の豊富な遺産を蕩盡し、始めて繪師として起つた藝術上の最盛時代で。

光琳の繪圖の特色は獨創的であつて、光悦宗達に學んで一家を成した、その代表作は殆ど全部（寫眞ではあるが）今度の展覽會に並べられる。

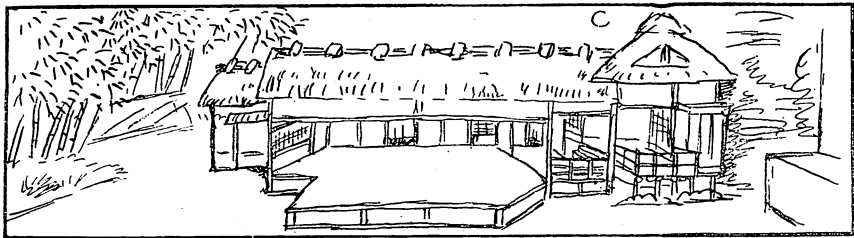
尙光琳の末は現に淀町字木津に住する小西藤次氏で、同家には「義滿公御教書」の寫を始め、家系、遺書、遺品等が數十點保存されてゐる、これらの大部分の複寫は同氏の厚意に依つて是亦觀覽することとなつてゐる。

彼は元祿十四年に法橋に任ぜられ、寶永元年に京の家屋敷を賣つて江戸に下つた。

元祿以後は小形光琳時代で益々旺盛な晩年の活動を續け、幾多の代表作を出してゐる、そして享保元年四月六日五十九歳で歿したのである。

私が西陣小川頭の妙顯寺内泉妙院に居生行圓師を訪ね、同師の案内で、光琳の墳墓を展したの顔見世の近づく十一月十八日であつたが、墓地は妙顯寺本堂の東方に當る數坪の地に在つて、布置の妙を極めた高雅な好みが如何にも畫家の墳墓を適はしく見られた。

墓碑には表に「長江軒青々光琳墓」となり、右側に没年、北側に文政二年十一月「雨華傘抱一建之」とあつて、有繋に酒井抱一の建てたものだと頷かせる。（堂木寒星記）



南座顔見世興行上演

玩辭樓双蝶曲輪日記

(鸚鵡石)

濡髪の長五郎 幸四郎  
 母 お幸 蓮女  
 女房 お早 梅幸  
 南方十次兵衛 鷹治郎

長五郎 アノ申し母者人、妾をかへて細にかゝらば、よく命が惜しさ故といはれるのも残念至極、侍を殺した時、直に相果てやうとは存じましたが、死なれぬ義理にて生き長らへ一日くと送る内親の事が身に泌みて、今一度お顔が拜みたきにお暇乞ひに参りまして、返つて恩をかけます、矢張り此のまゝ、與兵衛殿へお渡しなされて下さりませ。

お幸 スリヤどういふても細かゝる心ぢやなア。

長五郎 覺悟は致して居りますわい。

お幸 よいわ、勝手にしほれ。(剃刀にて死なうとする)。

長五郎 ア、めつさうな。

お早 そうでござんす、コレ長五郎さんお袋様の仰有る通り、元服をさしやんせぬと私も共に死にますぞへ。

長五郎 ア、コレ、早まるまいぞ。

お幸 但しはわしから先きへ死なうか。

長五郎 ア、コレ待つた。

お幸 そんなら落ちてくれるか。

長五郎 サア、落ちやんす。

お早 元服さんすか。

長五郎 剃りやんす。

お幸 アノほんまに落ちてたまるか。

長五郎 落ちやんす。

お幸 オ、出かしやつた。それでこそ母が子なれ。

お早 よう聞き入れて下さんなしたなア。

お幸 ドレ、刺つてやりませう。

涙に袂濡髪が、剃るべき髪は剃りもせで、祝ふて落す前髪を涙で先で剃り落す、老のこぶしの定まらず、わな／＼振ふて、刃先がぎつくり、

お早 ア、申し、二夕所までお額に疵が

お幸 ひよんな事を仕りました。

幸は血どめと硯の墨、べつたり附けて額打ちながめ、

お幸 (繪姿を見比べ) 大方これで人相が變つたが、肝心の見知りが高頬のほくら、是こそは翁御の譲り、紀念と思へばこれ嫁女、どうも剃り憎い、こなた剃り落して下されお早 私じやとて、むごたらしい、それがど

うまア、刺られませうお許しなされて下さりませ。

お幸 ア、思へば親のかたみまで刺り落すやうになりおつたか、えう心がらとは云ひながら、

可愛いものやと取り付いて、わつとばかりに泣きしづむ、兼ねて覺悟の長五郎思ひ設けてドツカと座し。

長五郎 サア此上は母者人、お前のお手で細かけて與兵衛殿へお渡し下され。

お幸 ナント。

長五郎 重々厚き與兵衛殿の親切は骨身にこたへ、に通り参り過分忝なさに母の歎きも御意見も不孝の罪も思はれず、片輪ながら可愛いと、義理も法も辨まへなく助けたいくと、母人の御慈悲心、暫らくはお心休めと詞に隨ひ元服まで致したれど、一人ならず二人ならず四人までも殺した科人助かる筋はござりませぬ、なまなかな者の手に掛らうより、かたみと思ひ母者人、泣かずとも細をかけ與兵衛殿へ手渡してよふ御禮を仰しやれやヤヤ、コレさうでなうては未來にござる十次兵衛殿へお前は義理が

済みますまいがな。

お幸 ア、誤まつた長五郎、よう云ふてくれたなア、いか様、思へばわしは大きな義理知らず、誠を云へば我子を捨て、も猫糞に手柄さすが人間畜生の皮かぶり、猫が子を喰はえ歩く様に隠し遂げやうとしたは何事、とても逃れぬ天の網、一世の縁のしほり細、お早細引を取つたも。

お早 いえ、それでは連れ合ひの心を無になされると云ふもの、唐天竺へござつても、此世にさへござれば又逢はれる事もある、何かなしに落しまして下さんせ。

お幸 イヤ、一旦かばうたは恩愛、今又細かけ渡すのは、生さぬ仲の義理、晝はかばい、夜は細かけ、晝夜とわける糞子、本の子、慈愛も立ち義理も立つ、草葉の蔭の親御への云ひわけ、サア覺悟はよいか。

長五郎 待ち兼ねて居りますわい。

お早を取て突き退け、手を合はすれば、母親は幸ひ有合ふ窓の繩、追取つて小手しほり、暗き思ひの聲はり上げ、濡髪の長五郎を召取つたぞ、十次兵衛

は居やらぬか、受取つて手柄にめされ。

と呼ぶ聲きこえて與兵衛は内に入り

與兵衛 お手柄、そうならうては叶はぬ所とても逃れぬ科人、受取つて御前へ引く、女房、モウ何時ぢや。

お早 サアモウ、夜半にもなりませうか。與兵衛 たわけ者めが、七ツ半を最前開いた時刻、延る役目が上る細先知れぬ窓の引繩、三尺残して斬るが右側。

さらりと抜いてしほり細ばつさり切ればぐわらくさし込む月に無南三夜が明けた、身共の役目は夜のうちばかり、明ければ即ち放生會生けるを放す所の法、恩に着ずとも勝手にいきやれ。(九つの本釣)

長五郎 ヤア、ありやモウ九つ。

與兵衛 イヤ、明け六つ。

長五郎 残る三つは。

與兵衛 母への進上。

長五郎 重なる御恩は。

與兵衛 アイヤ、それも云はずに去らば

別れてこそは………(幕)

# 勸進帳

(鶉 鴉 石)

一、富樫左衛門 鷹 治 郎  
 一、武藏坊辨慶 幸 四 郎

富樫 ハツ、近頃殊勝の御覺悟先に承給はり候へば、南都東大寺の勸進帳と仰せありしが、定めて勸進帳の御所持なきことあらじ、勸進帳遊ばされ候へ、是にて聴聞申するにて候

辨慶 何と勸進帳を諷めと候也

富 如何にも心得申して候

元より勸進帳あらばこそ笈の中より往來の巻物一卷取出し勸進帳と名づけつゝ、高らかにこそ讀上られ、

辨 夫れつら〜おもんみれば、大恩教主の秋の月は涅槃の雲にかくれ生死長夜の夢驚かすべき人もなし、爰に中頃の帝がおはします御名を聖武皇帝と申し奉り最愛の婦人に別れ戀慕の情止み難く涕泣の御涙乾く時なし、故に主従の爲、慮遮那佛を建立仕給ふ然るに去

壽永の頃燃えて終ぬ、斯程の靈場絶えなん事を歎き、俊乗切澄源勸命を蒙つて無常の宮門に涙を落し上下

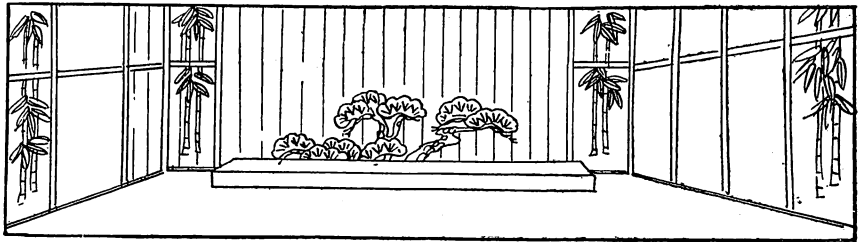
の親族を進めて斯の靈場を再建せんと諸國に勸進す、一紙半鈔奉財の輩は現世にては無比の樂にほこり、來世にては數千連華の上に座せん、歸命稽首、敬白。

天も響けと讀上げた

富 如何に候、勸進帳聴聞の上は疑ひあるべからず、さりながら事のついでに問ひ申さん、世に佛徒の姿様々あり、中に山伏はいかめしき姿にて佛門修業いぶかしけれ、これにも謂あるや如何に

辨 其の由來いと易し、夫修験の法といつば胎藏、金剛の兩部を旨とし、峻山惡所を踏開き世に書をなす惡獸毒蛇を退治して現世愛民の慈悲愍をたれ或は難業苦行の功を積み惡靈亡魂を成佛得脱させる日月晴明天下泰平の祈禱を修す故に内には忍辱慈悲の徳を納め表は降魔の相を顯し惡鬼外道を威伏せり、是佛神の兩部に

して又袈裟を身にまとひ佛徒の形になりながら、額に戴く兜巾は如何に



辨 則ち兜巾篠掛は武士の甲冑に等しく腰には彌陀の利劍を帶し手には釋迦の金剛杖にて大地を突いて踏開き高山絶所を縦横せり

富 寺僧は錫杖を携へるに山伏修験の金剛杖に五體を固むる謂はなんとこともおろかや、金剛杖は天竺檀特山の神人阿羅々仙人の持ち給ひし靈杖にて胎藏金剛の功德を籠り釋尊未だ瞿曇沙彌と申せし時阿羅々仙人に給仕して苦行任給ひ功積り仙人其の信力強勢を感じ瞿曇沙彌を改めて照普比丘と名付たり

富 シテ又、修験に傳はりしは阿羅々仙人より照普に授く金剛杖は斯る靈杖なれば我祖役の行者之を以て山野を經歷し大より世々に之を傳ふ

富 佛門にあり乍ら佩せし太刀は只物をおどさん料なるや、誠に害せん料なるや

辨 是れぞ案山子の弓に等しく、おどしに佩くの料なれど佛法王法の害を爲す惡獸毒蛇に言に及ばず假令人間なればとて世を妨げ佛法王法に敵する惡徒は一殺多生の暇に依つて忽ち切り捨るなる

富 目にさへぎる形ある者は切給ふべきや、若し無形の陰鬼降魔佛法王法に障礙をなさば何を以て切り給ふや

辨 無形の陰鬼陽靈は九字眞言を以て切斷せんに何の難き事やあらん

富 シテ山伏の出立は則ち身を不動明王の尊容にかたどるなり

辨 頭に戴く兜巾は如何に夫ぞ五智の寶冠にて十二因縁のひだを取つて之を戴く

富 かけたる袈裟は九會曼荼羅のかきの篠掛

富 足にまとひしはいきけ何と胎藏黒色のはゞきとしようず

富 扱て又八ツのわらんずは八葉の蓮華を踏の心なり

富 出で入る息は阿吽の二字

富 抑々九字の眞言とは如何なる義にやことついでに問ひ申さん何と何と

辨 九字は大事の深秘にして語り難き事なれども疑念の晴さん其爲に説聞せん、夫九字の眞言といつば、所謂臨兵闔者皆陳列在前の九字なり

正に切らんとする時は正しく立つて齒をたゞく事三十六度左の大指を

持て先四指を盡き後に五指を書き、其時急々如律令と呪する時は、

あらゆる五陰鬼頭惱鬼まつた惡魔外道死靈所に亡ぶ事霜に熱湯を注ぐが如し、實に之品の無明を切るの大利劍、莫耶が劍も何ぞしかん、武門

にとつては呪を切ば敵に勝事疑ひなし、まだ外にも修業の道疑あらば尋ねに應じて答へ申さん、其德廣大無量なるものあれば人に語るな

あなかしこく大日本の神祿御佛菩薩も照覽あれ日拜稽首、おそれみく謹んで申すと云、斯の通り

富 感心して見えにける斯る尊き客僧を暫時も疑ひ申せしは眼あつて無きが如し、我等不念なり某勸進の施主に付かん、それ〱番卒共布施物持てよ

芝居ものがたり

# 平家蟹

しろべいじ

松籟風々。

風蕭々。

緑の海も黒く暮れて。

残月一恨、淡々として、空に地に、憂鬱の光りを投げる時。

此處境の浦の磯馴松に、夜目にも判る上藤が

十二単衣を吹く夕風に弄らせて、波の戯むれる

砂地の一點を、目瞬もせず一心に……。

遠くの波上に水鳥が。

近くの松に夜鳥が、

悲しい聲と羽搏きで、夜の稚寂に凄氣を漂よ

はせます。

「鐘が鳴る、逢魔が時の鐘が鳴る」

十二単衣がハタと動いて、

朱の唇が獨り言。

遙かに見ゆる鐘樓の大鑄鐘が一杵二杵……、夜陰を破つて物凄く――。

「フ、……」

ヒステリカルな高笑が、薄氣味悪い餘音を殘して、鐘の音と並行して聞えます。

と、波の途絶へた砂地から、見ると怖ろしい平家蟹が、

「お、新中納言殿……、今宵も時刻を避へず

にようこそ参られた、これへ……。」

檜扇が左右に揺られて、續いて亦一言、

「余の方々は何とされた、例もよりは遅い事な

う……。」

と また砂地より同じような平家蟹。

「お、能登殿が、今宵は知盛の卿に先を越され

ましたぞ……」

十二単衣の淋しい笑顔。

その笑顔の消えぬ間に、ついで四五匹の平家蟹が、その足下に現はれます。

「お、教盛の卿……有盛、經盛、業盛の方々……皆打ち揃ふて見えましたのう……」

順々として現はれる平家蟹。

その一ツツを迎へる度に、檜扇がサツとはためき、空虚な笑ひと獨言が、十二単衣の口を突いて、

ザアツー ザアツー……

波の音は漸次に激しく、

無心な風が松を打つて、

十二単衣の上藤が、亡霊のやうに凄愴に――

「此の短夜とは云ひながら、明日の朝迄はまだ

長い、何を語つて明かしませうぞ……」

さうした言葉が判るや否や、平家蟹はたゞ無

言に、

「毎夜々々の物語りを、つまる處は平家の怨み

ぢや、この怨みは一年二年、五年十年語りつ

けても、容易につきる事ではあるまい……」

去來の激しい夜の雲が、いつの程にか月を隠

して、その淡光は影を潜め、海も松も、砂地も

山も、たゞ一様に闇黒に……

その闇中に上臈の、呪ふやうな嘲けるやうな怒るやうな悲しむやうな、奇怪な笑ひと獨言が末梢神經の端々へまで染み入るやうに聞えます

此の上臈の名は、玉蟲。

今は昔、壽永の春、

源平數度の合戦に、一敗地にまみれた平家の

殿原が城の峻嶺に據つて、源氏の強兵を擁

せんとしましたが、不幸、越の遊襲に潰滅し

て了つた事は歴史の上にも明らかです。

その時平家の將船に、扇の的を餌へして勝誇

つた源氏方を愚弄した一人の官女がありました

その官女こそ此の玉蟲であつたのです。

白面の若武者那須與市宗隆の強弓一矢に、美

事に的を射抜かれた彼玉蟲は、どんなにか口惜

しがつた事でせう。

まして、さうした些細事が、平家の敗亡を暗

示し、源氏の喜悅となつたのに於いては……。

そして平家は支離滅裂に潰えました。

新中納言知盛始め公達の多くは海の藻くずと

なり、死運れた儘かな人が、源家を呪つて諸國

を流浪せねばならなかつたのです。

玉蟲、彼の女もまたその内の一人でした。

平家蟹……。

平家の一門が西海の藻くずと化してから、壇の浦には奇怪な蟹が現はれました。蟹の甲には人の顔。

しかも凄まじい憤怒の形相。

浦曲の人は此の蟹を平家蟹と呼んだのです。

此の平家蟹こそ、源氏を呪ひ、世を呪ふ、玉

蟲が爲めに唯一の好伴侶でした。

だから彼の女は、

月の隠れた暗い夜、

海のざわめく暴風雨の夜、

たゞ一人海邊に出ては、昔を偲ぶ十二單衣に平家蟹と呪ひの囁きを交すのでした。

「御姉上さま……」

静寂を破る女性の聲に、我に返つた玉蟲が

ふと傍らを見るに彼の女の妹玉琴が美しい顔

で立つて居ました。

玉蟲が爲めには肉身の、たゞ一人の妹玉琴

でも玉蟲は、此の妹を愛する事が出来なかつ

たのです。

何故……。

それは玉琴が、意恨重なる源家の武士、自分

の爲めにも怨みある那須與市宗隆の弟興五郎宗

春と、二世をちぎつた仲だつたから……。

玉蟲は苦しましました。自れの最愛の妹が、源氏の武士と情を結ぶ。それは亡き平家の人々へ對して亦なき不倫と

思つたからです。

何度、此の不倫の妹を殺さうとした事でも

だが、彼の女と女性でした。

妹を愛する好い姉でした。

肉身を獄する狂奴は、流石に容易に振はれな

かつたのでした。

「御姉上さま、如何遊ばしました」

案じるやうな玉琴の聲音。

その時、

玉蟲の胸裡に閃光が……。

「平家の一門ごとく海に没したは過ぎし彌

生の廿四日。昨日今日とは思へども、數ふれば

早二月過ぎて、今日あなたはか御命日……」

玉蟲の面には、凄く淋しい頬笑みが……。

その夜、

玉蟲は偽つて、妹玉琴とその戀人那須與五

郎宗春に、毒酒を盛つて殺害しました。

久しく惱んだ妹の不倫を、一門の命日に皆悟

したのです。

まして與五郎宗春には、兄與市への扇の的の

意恨があつたから、彼の女の爲には上もない復



饗の好敵手だつたのです。

毒酒……。

それこそ彼の女が、源家を呪ふ悪鬼羅刹の祭壇に、平家蟹の甲を裂いて、其肉を酒に浸し、神への饗に捧げたもの——。

念願若しも適ふべくは、此の酒變じて毒酒となれと、世にも怖ろしい妖法の修業になつた酒でした。

可愛い妹玉琴と、憎い怨敵那須與五郎を、無惨に仕した玉蟲は、女を追ふやうに立上りました。

と、見ると一匹の平家蟹。

『お、新中納言殿、迎へに来てたべつたか、玉蟲は、浮世の修羅の一半を晴らしたれば、今こそ御身達の傍に参る、案内してたべ、案内してたべ……』

玉蟲の瞳は空虚に。

足は、いつしか砂地を離れて、墨のやうな海水に、

腰を没し、腰を没し、胸を没して、早や首に

……。

でも玉蟲は無我でした。

たゞ、楽しみを追ふやうに——

風は増々強く猛り。  
波浪の砕けるどよめきが、悪魔のやうに物凄く……。

空には怒りの霰雨が……。

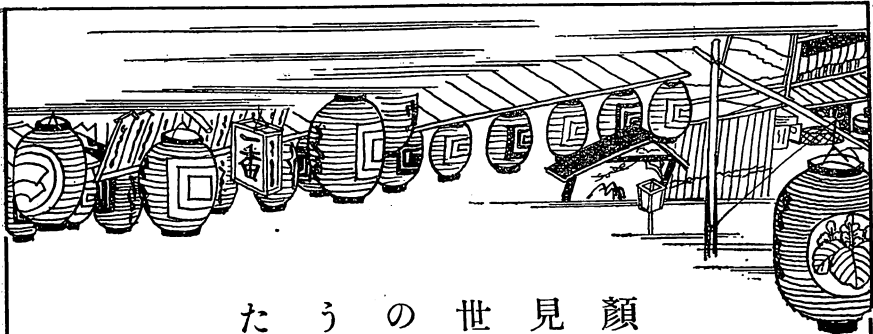
(了)

## 浪花座師走興行

顔見世月の道頓堀浪花座は關西大歌舞珍伎の珍らしい顔合せをなす、十一月は九州巡業に出てゐた延若壽三郎霞仙、橋三郎、大吉、福太郎、八百藏等が歸阪し鷹治郎一座より脱して魁車、成太郎親子が合同しこの變つた顔觸れで何か變つた芝居を打たうといふのが此の度の師走興行狂言本極りは一番目が壽三郎等が活躍する「恭盤忠信」三場で新作劇は嘗て劇文壇の大家眞山青果氏が最近に於ける傑作として雜誌改造に發表以來異常な興味と輿論を喚起した「償金四拾萬弗」三幕を東京に魁して、延若の岡野新助魁車の女房楠緒で新演出する事となり演出監督は田中總一郎氏、この劇は彼の有名な生麥事件の新解釋ともいふべく一種の性格悲劇で原作者の『桃中』『雲右衛門』『富岡先生』『平將門』等よりも一層深刻さを加へたものである。尙二番目は

此度魁車が初役の法界坊に扮し『隅田川續佛』二軒茶屋より道行迄の通しで見せる。斯の如く延若魁車壽三郎と生氣潑たる花形俳優の奮闘劇は近來にない観物である、出し物は右の外、『源氏の礎』三場、『隅田川續佛』二軒茶屋より道行までが出る、その總配役は、

薩摩藩士御納戸役頭取、大久保市藏、妻楠緒  
墮落僧法界坊、菖賣おくみ實は法界坊亡魂  
野野分姫亡靈、法界坊怨靈、(中村魁車)佐藤  
四郎兵衛忠信、島津久光の近侍役、新助の從  
弟、那珂原嘉左衛門、道具屋甚三(坂東壽三  
郎)藝者桃龍、手代要助、實は宿直之助松若  
(中村霞仙)小柴娘小車、仲居おみの、渡し守  
おかん(中村福太郎)下女おしづ、仲居お仲  
尼妙心(尾上卯之助)花岡家息女野分姫(實川  
延太郎)薩摩藩士土師吉兵衛、安達彌九郎(實  
川福藏)女房のため、仲居小よし(中村雀)薩  
摩藩士木崎篤之助、娘おくみ(中村成太郎)藩  
摩藩士菊村利助、道具屋市兵衛(實川若鷹)飛  
脚久助、下男清七(實川延郎)仲居おはつ(淺  
尾關三郎)肝煎佐五兵衛、永樂屋權左衛門(市  
川右田三郎)薩摩藩士下寺源三郎(實川八百  
藏)梶原三郎景久、薩摩藩士甲斐田源次、山  
上小文吉嵐橋三郎)小柴入道淨雲、土州藩士  
吉村、山崎屋勘十郎(淺尾大吉)江間小四郎義  
時、放逐された島津家足輕、岡野新助、番頭  
庄八(實川延若)

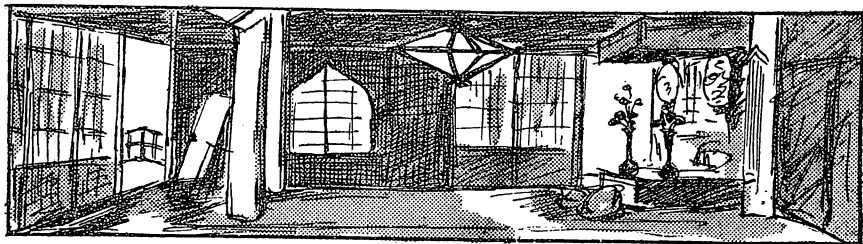


# 顔見世のうた

(五十首)

木村富子

粉雪ふる四條小橋を袂とりて芝居へいそぐ三四人かな  
比叡おろしも河原千鳥と顔見世の幟に吹けば少しなまめく  
顔見世のあかき灯かけを浮かべたる四條河原の水もうつくし  
選り給ふはイ菱の紋か花菱か君がもろ手の丹塗りの小箱  
片しやぎりいま嗚りそめて引幕の明くる待つ間の時めき心  
花道の灯にうきいでし十次郎のその鍛形のまばゆかるかも  
鍛形の兜の色と初菊の髪吹輪といづれめでたき  
物もひをはらふとやうに光秀の大音聲も心地よきかな  
春の日のわが額に照るこちして勸進帳をながめけるかな  
春風はすがくしうもいで立ちし關守人の素襖をぞ吹く  
辨慶が背にさばきたる黒髪重々しうもまもらるるかな  
いざやとて足どりかろう舞ひいでしこの先達に杯まるる  
引窓の綱にからまる恩愛のいとど悲しき幕なりしかな  
しみくと母に啣てば長五郎の大前髪もあはれにし見ゆ  
錦繪を抜け出でて來し鷹治郎と幸四郎とありて惜しき幕閉づ



南座 顔見世 興行 上演

芝居 物語 龍

卷

上の巻會合篇  
下の巻離散篇

南 蘇 坊  
食 滿 南 北 さ し ゑ

上の巻會合篇

長崎愛宕下の普門院といへば、名の如く佛刹には相違ないが當時その寺に寄寓してゐた輩は世の中を喰ひつめた蝸で、何れ劣らぬお手あひ揃ひ：中にも、尾島吉三郎常春といふ繪師は寄食者中のした、か者、先年江戸隅田川に入水した心中者の片割れで、殺した女に残る未練と良心の苦悶に依へかねて江戸長崎を文字通りに流れ／＼て今では禁制のマリアの繪像さへ描いて居る。

……が然し、女の死靈にでもとつ、かれた様に繪像を見ては「歌江！ 歌江！」と熱病患者の様に呼び廻る、然も繪像は、常春の思ひなしばかりでなく、事實古馴染の歌江によく似て居ると、同宿の三策。

「先生、やつぱり似て居るぢやねえか。」

「さアそこだ、いくらやつても同じ事よ。」

「本郷森川町の一件だな。」

「お察し通りよ。」

「許嫁まである仲を、心中までした女の事、思ひ出すのも尤もだが、長崎だつて戀の港、丸山にや遊女の數、濱の眞砂のつきねえ廓、ちつたア、出かけて見なざるが、ぜ……など、。

からかひ半分です、められ乍ら、江戸川べりに育つただけ、なまじいおいらの水心、それが邪魔になつたのだと、今更ながら後悔の繰り言三策もたまりかねて、

「先生、い、かけんにしねえか、古いおのろけは眞平だ。」

冠せかけられる様に云はれても扱そのまゝ諦らめかね。  
 『手前も、深川の冬木町、醫杏庵の次男、蘭法修行に事よせて  
 この長崎に下つたのも、親の手許を離れて云はじお前の道樂ぢやねえか、一つ寺の食客これ位はきいても



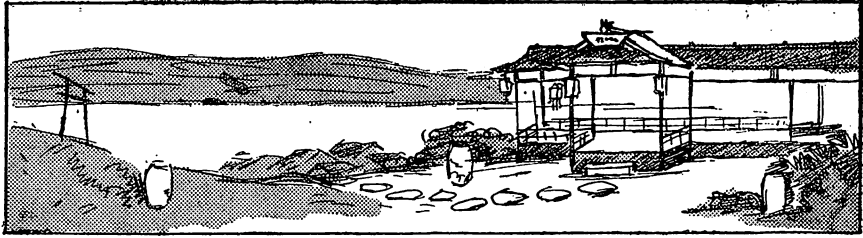
よからう。』  
 斯うなつては互ひに何時もの押問答、なまじこんな事なら、昔の戀の幻でも追つて居る方が無事だが、互ひに言ひ出した上はさうもならず、果てもなく云ひ張る所へ、院主の了念が醫若湯の心いき。  
 『オツ、生ぐさ坊主、醫若湯とはよく氣がついた、こつちへ持て来い。』  
 例に依つて例の如く、酒となれば意地も張りもなく随分思ひ

切つた悪口もきくが、さて心の内はそれ程でなく、  
 『居候の分際で、生ぐさ坊主とは勿體ない、當普門院の大和向様を……と笑ひに紛らせ納まる所は、同じ徒黨の一味乍ら喩加三密の教へを享けた不良振は、又格別。  
 やがて三人は鼎の如くなつて互ひに酒酌み交はして居ると、同じ普門院の食客松下晋之丞が、虚無僧姿を現はす。  
 虚無僧に身をやつした原因はといへば、常春と手に手を取つて逃げ失せた歌江の居所を探るためだといふ。  
 逃げたは逃げたが、その後間もなく別れくで行衛知れずといふ常春の言葉を受つて、隅田川の藻屑と消えた歌江の行先を探し求めるとは、近頃奇特な虚無僧である。  
 取り分け今日は三月十二日で今藏町の地藏堂で一年一度のお祭り騒ぎ、外は何處も彼處も人出の山、この機を逸してはと急ぎ行く晋之藏の後見送つた常春今更乍ら窓に倚つて、圓山邊からの人出の山を眺めて居ると、女好きの三策が折柄墓参の女を見かけ、



例に依つて例の如く、酒となれば意地も張りもなく随分思ひ





「御女中、御本堂ならこちらだぜ、フム、お参りをしなざるかさアこちらへこちらへ。」

まで縁日の商人が客足を呼ぶ如く、空世辭に御無理御無體のご親切を取り混ぜて呼ぶ込む事は呼び込んだが、女の顔を一目見るなり常春は奇聲を發して驚愕する。「フム、歌江だな、歌江だくくウ又迷ふたな……。」

「オツ、吉三さん、お前も、あのお前も、私の無縁の崇供養、それで迷ふて出やしやんしたか南無阿彌陀佛々々々々。」

互に亡者に逢つた氣持ちで、

「けふは三月十二日。」

「一つの蓮を願ひの入水。」

「處も隅田の川上に。」

「噂はのこる都鳥。」

「南無阿彌陀佛。」

二人の様子を見て呆れたのは了念と三策……堪えかねてふき出すと、

「オイ、何を云つてるのだ。尾島の先生、こりや圓山の貞歌太夫だよ。」

「太夫、こつちは普門院の食客、尾島常春といふ晝かきの先生。」

「怪しいものではござらぬぞ。」

交る、二人に説き聞かされて氣が附いた常春と貞歌、扱ては一日も忘れた閑もない男と女何から話して、事やら、

「では歌江、おぬしも命助かつて。」

「ハイ、人買の手で長崎へ賣られて丁度五年の今日。」

「しかも、三月十二日、月日も同じ櫻時。」

「つきせぬ縁であつたなア……。」

と俄かに變る正念場にはさすがの了念も三策も足場を失ひ、

「若い男と若い女、お醫者に坊主はお邪魔らしいで……。」

と座を脱す所は餘程粹の利く坊主。

後には常春と貞歌が久々の差し向ひ、何人の隔

てもない筈だが、扱さうなると、ま、ならぬは浮世の義理。

「戀の諸別けも出入りのみなど、この圓山の貞歌には一人の男は許されぬ……無縁の墓へ參つたのも、今日も忘れぬ十二日、心の底にいとしいと思ふ殿御も亡き人と思へば、こそその吊らひに昔の夢は破られぬ、今は妾も……。」

廓の義理と情の絆に不覺の時を移すとき、貞歌の日那伊藤小左衛門吉直が來合し一代の得意を誇る富の力に嫉妬を混せて、貞歌を連れて歸へらんとする、折も折、其處此處を尋ねめぐんでゐた晋之丞が歸へつて來る。

『たづねる戀人、正しく歌江……』

『お前は。』

とこれで文字通りに戀の龍巻……。

### 下の巻 離散篇

圓山の遊女貞歌大夫を廻ぐつて宛ら龍巻の様に燃えあがつた



る博多から父を諷めに來た悴見三郎の言葉も斥け、小左衛門は貞歌を相手に日夜酒池肉林の奢をつくして居た。

三人の男に身一つの貞歌は、晋之丞の情の籠つた言葉にも情

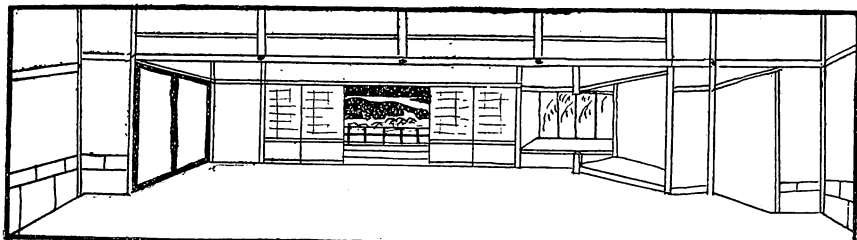
戀のほむらは、益々その勢ひをまして行つた四十男の戀路には家もなく妻も子もなかつた。はるば

なくせずには居られなかつた。同じ様に貞歌の身も心も、一身に引きつける事の出来ない常春は小左衛門がお上の法度を破つて、他國と通商貿易をして居る事を楯に、小左衛門から貞歌を奪はんとした、然しそれすら失戀の痛手に悩む晋之丞の術中に落ちて、國禁を犯してマリヤの像を抽いた事があばかれた。

小左衛門は法度破りの通商で、亦常春は國禁の繪を描いた罪で捕方の手は既に二人の身の上のびた、眼の透りそうした醜い争ひの様を見せつけられた貞歌は、一つには人々への言ひ譯のため、自及した。窮策をつくして漸々貞歌を得た晋之丞は彼の女の死を見ると續いて後を追つた。

吉三郎は初めて善心に歸り二人の冥福を祈つたが、捕り方の手は犇々と彼等の身邊に寄せ來るのだつた。





(間廣清宗屋茶條四)

南座 顔見世 興行 上演 (菊池寛原色)  
大森 痴雪 脚色

# 藤十郎の戀 (鸚鵡石)

一、坂田藤十郎 鷹 治 郎  
一、宗清のお梶 福 助

藤十郎は臺本を持ち打ち沈みたる體にて、上手の廊下より出で頻りに狂言の所作を案ずる科あり、大勢のはやし聲「ヨウ／＼」と聞えると同時に宗清のお梶、廊下より出で後を振り返りながら。

お梶 大事なこちらは私が片附けるによつてそなたは廣間の方へ氣をつきや、お烟の仕かけてあるを忘れまいぞや、○あれ藤様、爰にお居でなされたのでムリまするか、是は／＼いかにお粗相をいたしました、シタが此様な冷える所ですうして御座りやす夜の物をかけて進ぜます、一寸お待ち下さりませ。

藤十郎 オ、是はお内儀、私は女中衆かと思ふてイヤ、是はいかい御雑作をかけます。

梶 ホ、何のまあ、存じませぬ事とて此様に取り散らした所へお置き申して濟まぬ事で御座りやす。

藤 何の／＼、ツイ一座で酒を強ひられて頭が痛むによつて、そつとはづして爰で酔を醒まして居た所、どう

ぞかまわずにおいて下され。

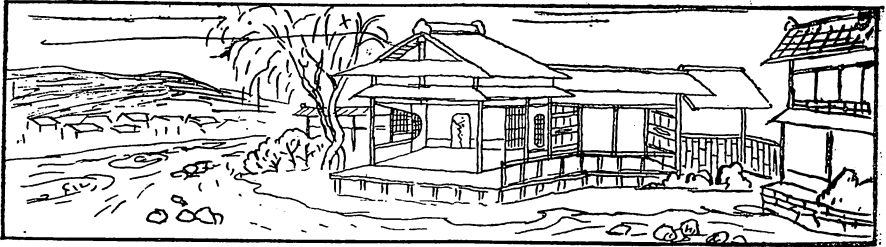
梶 そうでござりましたかいな、シタが頭が痛う痛みはいたしませぬかお薬などお上げ申しませうか。

藤 イヤ／＼それには及ばぬ、暫らくの間斯うして居れば直に治ります。

梶 左様でムリまするか、では御綴りとなされませ、御用が御座りましたら何卒お手をおたのみ申します、しが最前あなたがお送りなされましたあの方が近松門左衛門様でムリまするか。

藤 さうでムリます。

梶 存じませいで御挨拶もいたしませず濟まぬ事でムりました、それはさうと今度の彌生狂言はえらく珍らしい趣向とやらで、今から強い評判でムリやす、私達も半日は商賣の間をかいでも所詮見せて貰はずには居られませんまい、本に油で煮たやうなこちとでさへそうぢやもの、宮川の廊、二條の新地、島原六條の妓様衆



(敷座小清宗屋茶條四)

が現にならしやんすも無理はムリませぬホ……まア御免なされませ、今直ぐにお水なと持たせて参じまする藤お梶どの。

梶 何ぞ御用でムリやすかへ。

藤 チト咄したい事があるゆえ、まア座つて下されけふは改めて是非とも聞いて貰ひたい事が御座りますマア下に居て下され。

梶 そういふ事なら私も改まつて承りませう。

藤 お梶どの、別儀でもムらぬが此の藤十郎はそなたに二十年來隠して居た事が御座る、それを今晚は是非とも聞いて貰ひたいのぢや。

梶 そうして隠して居た事とはへ。  
藤 思ひ出せば古るい事ぢやそなたが十六で私が二十歳の秋でムつた、祇園祭りの折に河原の掛小屋で二人一緒に逢舞を舞ふた事がムつたが、こなたも余もや忘れでは居させられまい。

梶 ホ……そのやうな古い事あなたこそ能う覚えて居てごムんすな、本にあの頃の私は世の中が楽しい面白い最中のござりやした。  
藤 私がこなたと見たはあの時が始めてごムつた、宮川町のお梶殿と云へばいかに美しい若女形でも足もとに及ぶまいとは、かねて人の噂さに聞いて居たがそなたの美しさが余もあれ程であらうとは夢にも思ひ及ばなんだ。

梶 私等のやうな者が何でそのやうなホ……藤様のお口上手な事わいのしたがあ折は皆から羨まれたり妬まれたり後で難儀をしましたわいな。……

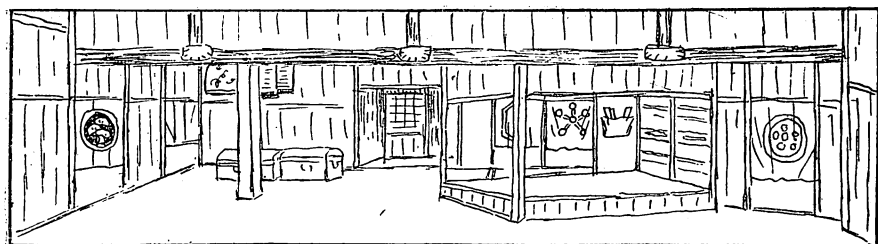
藤 ……お梶殿は仕合せ者ぢやあのやうな美しい藤様と一つ舞臺に手を取り合ふ女の冥加ぢやとホ……今から思へば本に夢のやうでムりますな。

梶 お梶どのそなたを世にも稀な美しい人ぢやと此藤十郎が思ひ染めたはその時からぢや。

へたつる錦木甲斐なく朽ちてそはで年ふる身ぞつらき。

口には云はねど二十年が間深く包んだ藤十郎が切ない戀、そなたを始めて見染めた當座は折があらば云ひ寄らうと思ふては居たなれど其頃は二十歳の身、若衆方は親方の掟がきびしく少しも心にまかせぬ身體、心は燃えた様に思ひ焦れて所詮は折を待つより外はないと諦めて居るうちに、こなたは二十歳の聲を聞くや聞かずに愛の内の立派なお内儀となられ、サア残念それから喉を聞くに附け無念やら口惜しいやら此胸が張り裂けるやうでムりました、なれども二た昔語りをするも深い縁、イエサ私の心で深い縁があると思ふて居ります、藤十郎も義理人情道も法も知つて居ります、こなたに戀を仕かけるは人間のする事でないに心に強う押へても扱て止まらぬは凡夫の思ひぢや、私もこなたに對して非道な事をしてはならぬと明けくれ燃える心を





(屋 樂 の 座 夫 太 萬)

押へて来たのぢや、私は今年は四十五歳、人間の定命  
 モウ近く是程しのんだ戀を此世で一ト言打明けいでい  
 つの世に語らうぞと思ひくらして此儘此世を去る時は  
 こなたの枕邊に立ちます、運が能うて無事に居る時  
 は此胸が亂れ狂ふて仕舞ひます、どうぞ藤十郎を不惑  
 と思召すならたつた一ト言ナア、お梶さん。お梶さん  
 泣いてゐるか、泣かれては困ります、私の云ひ出した  
 事を根んてか、昔馴染の藤十郎斯う云ひ出したからは  
 恥も思はず元より無理な戀とは思ふて居ります、少し  
 ばかりの情けの詞、それさへ云ふて下されずば、思ひ  
 焦れた我身を恨むより外はない、舞臺の上の色事では  
 日本無双の藤十郎もこなたにかゝつては他愛もなく振  
 られましたな。

梶

藤様、今仰しやつた事、皆本心でんんすかへ。

何のいつはり云ひませう、思ひ切つて云ひ寄るか  
 らは、素より命は投出しての戀。

涙ならねばあはれをとほじ深き思ひの袖の色  
 もはや命も絶へねば絶へよ、ア、住めば恨めし  
 同し夜

藤十郎立上る、お梶さぐり寄り男の手をとる藤十郎  
 ぞつと身をふるはす、双方科あつて又離れ藤十郎は  
 すり抜けて廊下へ去る唄の切れより妙見太鼓にて

(幕)

## 『藤十郎の戀』の梗概

元祿十年の春、京都万太夫座の芝居で一  
 代のやつし事の名優坂田藤十郎が、近松門  
 左衛門の脚色した當時の出来事室町の大經  
 師の家の事件を上演する事になつた。江戸  
 役者中村七三郎の一座も同じく開演するこ  
 とになつた。

藤十郎はそれに負けじと新作ものに對す  
 る新しい演出の方法を研究したのであつた  
 思案に困却した藤十郎は、思はず出合つ  
 た昔馴染の茶屋宗清の内儀お梶に戀をし  
 けて見た。研究の外ない藤十郎の言葉を、  
 それとも知らぬお梶は、その熱情ある言葉  
 に餘りの烈しい心の動搖から只泣くのみで  
 あつた。

やがて決心したお梶は側の行燈を吹消し  
 て男の近寄るのを待つた。

けれども藤十郎はそのまゝ、座敷を脱げて  
 仕終つた。

大入續きの芝居の裏は大景氣である、  
 悄然とそこへ来たお梶が間もなく自殺し  
 たと聞いた時、藤十郎は愕然とした。しか  
 し出を知らせた舞台へ力強く進んで行つた

# 大阪趣味と川柳

◇ 大阪趣味と川柳のコーラスを知るには是非川柳誌「番傘」をお読み下さい。

◇ 「番傘」は軽快な川柳家の雑文が面白いので川柳家以外にも喜ばれてゐます。

◇ 「番傘」は一冊三十錢（見本も同断）半年分一圓七十錢。

大阪市此花區野田驛前

番傘川柳社



# お國と團女

島 華 水

今茲も吉例に因つて四條に顔見世を催すと聞く、維新以前のやうに座組の編成に異動あつてこそ例年顔見世の意義もあれ、年々歳々相變らずの反復では雑誌紙面の見榮もせぬ、乃で一つ變つた所を横眺みと出かける。

◎四條河原と聞けば直に歌舞妓の濫觴、水木お國を連想する、『俳優略傳』には開卷第一に載つてゐるだらうが、お國は由來女優では無く寧ろ舞姫であつたのだ、念佛踊といつた男舞の妙手で神社勸進の爲と號して京に上り終に海内に名を馳せたのだ、元より確實の傳記はまだ知れて居無いが何しろ舊來の傳統を脱して思切つた新舞曲を創出した非凡の天才だつたに相違無い、家康公の愛子、結城秀康などの俊傑がお國の至藝に感動して思はず大に號泣したとまで傳へられて居る。

◎英雄能く英雄を知る、東西揆を一にした逸話がある、此秋ニ

ースで不慮の慘死を遂げた舞踊の泰斗イサドラ・ダンカン嬢（以下略して團女とする）其の團女の希臘曲を見て、近代英國女優の隨一エレン・テリー（御存知の通り故アーヴィングの相方である劇道革命家ゴルドン・クレীগの母堂）が突然椅子から飛上つて見物に向ひ『皆さん只今御覽なすつてゐるものがよくお分りですか、世界中で一番優れた美しくいものだとお分りですか』と思はず絶叫したとの事である。

△自分も西遊の客次中、幸に此の名人の舞踊を観る事が出来て、優麗の動作が飽くまでも輕捷自在で沈着の姿勢が神々しい威嚴を具へるのは流石に天下一の絶技と感じた、其以前北米で一見したセント・デニスの舞は之に比すると眞摯を缺き人工を弄した點が大分あるとさへ思つた。歸朝後一寸兩者の比較講話を試みた事もあつたが、其後デニスは縁あつて我國に渡來し日

本舞踊の一ト手を覺えて宿願を成就した之に反して團女の招聘が只だ一時の噂のみに終つて終に實現し無かつたのは、我が藝壇に取つて實に千秋の恨事である。

◎團女は實に世界を樂ましめる爲に生れて來たものでは無く世界を動かす爲に現れたのだ、此の偉大な藝術家は二百年以上歐洲の藝壇に跳梁したバレエ風のあらゆる傳統を一蹴して直接に自らの風姿を學んだのであるが、其の成功の結果は歐米兩大陸の舞踊を豹變せしめ、更に進んでは劇技一般の革命を促したのみか又た社會風俗の上にも驚くべき程大なる影響を與へて居る、然るにお國の舞振は古い屏風繪などから推測すると餘程渾樸古雅の趣があるが、當時に在つては蓋し在來の形式を打破したもので、殊に諛譁をも交へて時好に投じた今様の風流、即ち最新式の舞踊だつたと思はれる、而もお國の成功は女歌舞伎より若衆歌舞伎、それより續狂言と終に二百餘年も連綿たる今日の歌舞伎劇を作り出したのであるから、社會の下層に身を起した織袷な巾幗の身を以て文藝革新の功を學けた點はお國も團女も兩々相似たりと考へねばならぬ。

△然し一方に於ては根本的に異つた點が無いでも無い、團女の舞踊は酔乎として酔なるもので從來の劇場殊に樂劇の舞臺に見た様な華麗な否錚麗な道具は決して一とつも用ゐない、只だくすんだ色合の折れ幕が後面に蔽ひ垂れて居るのみだ、服装も絢爛な色彩を斥け純潔な薄地のローブが希臘式のトীগをば緩

やかに身に纏ふだけである、古人がお國の舞を形容して「羅衣從風長袖橫極其宛轉之狀」とあるは却つて正しく團女の姿である、勿論黄金作りの大刀をもはかねば寶玉の冠をも戴か無い夜光の珠を閃かすでも無ければ珊瑚の念珠をかけもし無い、團女が舞踊の革新を成遂けたのは實の其の赤手空拳であつたのだ此の點に於てはお國は遙に劣れりと云はねばならぬ。

◎舞臺裝置の排除、服裝の簡素、是等は物質文明に爛熟した肉食者流の碧眼を瞠若せしめた、然しそれ以上には反響が無かつた、が、團女が靴を捨て、素足で舞臺に現はる、に至つて觀客は全く度臆を抜かれて仕舞つた、夫より以來非難詰責罵言絶交と云ふ有らゆる迫害を團女に加へたのである。

然し團女の斷乎たる主張はそれが爲に翻へすべくも無かつた人類進化の美は實に素足にあるからだ、藝妓は決して足袋をはかぬと云ふ舊幕時代の習は、今日でも妓名の大部分が明に示す様に當時の奴隸制度を臆ろけに追懷せしむるが、それにしても團女の主張は相當して居るから、藝術美の爲に復活しては如何だらう。夫は兎も角、所作事の中途で履物を後ろに飛ばして勇ましい足拍子を聞かせるのも蓋し舞踊の實質上緊要なものであるからでは無いか、既に東洋では季候の關係上、足袋をはくのは止むを得無いとしても、希臘綠野の舞踊としては素足の方が如何考へても正道である。

◎今一とつ團女の英斷は管絃樂伴奏の全廢である、即ち伴奏と

しては只だ洋琴を用ひ其の一揚一抑神韻の漂よふ儘に舞踊の動作が變幻の旋律を作り影が光に添ふ爲に光を却つて強くなるやうに、之に依つて人生の神秘を啓示せしめた、勿論團女は苦心して古今の名曲を撰擇したので、原作の意義を表現せんが爲には殆んど日夜想を練りベートーヴェンの如きは一曲五年も工夫に耽つたと云ふ。

△此の如くにして始めて音楽を舞踊を補助し又た舞踊が音楽を解釋する事が出来、二つの藝術が渾然融合するに至つて感興も亦極まるのである、這般の消息は當時新しく發見された三絃樂を伴奏に撰んだ女歌舞伎にも同じく窺ふことが出来やうと思ふ假令へお國と三絃との關係は充分明で無いにしてもだ。

◎團女は伴奏のピヤニストを自ら訓練もし又た同時に賞揚もした、其の局往々其の青年樂家との斃聞が漏れたのみか、時には甚しい失戀の極、紫衣の盛裝を凝らして堂々と地中海に分け入り死を求めんとした事もあつた、無論お國にも三十郎との情事が喧傳せられ轉じて名古屋山三の戀人ともなつたりして居るから女性の天才殊に藝壇の立者には此位の事は咎むる方が寧ろ野暮であらう。

△其の外にも華々しいはでな逸話や又それと正反對に如何にも慘ましい物語が四十七年の生涯の間始終團女を繞つて居た、まだ十八九の妙齡の頃、生れ故郷の桑港では警官の制止をも聽かず燃え上る猛火の中を脱り抜け燒落ちんとするホテルの樓

上から見事に少女を幾人も救出した義烈の話、紐育の劇場で端役をあてがはれ數年にして漸く百五十弗を貯へ、家畜運搬の汽船で渡歐した健氣な立志談、露國王立劇場に入つて必死の勉強、遂に自ら新式を案出して莫斯科の藝壇を一變せしめたと云ふ涙ぐましい努力や、錦を飾つて故國に歸ると、只だ素足に響く人計で舞踊の精神を掬んでくれる一人の具眼者も無かつたのを憤慨し、二度と再び此の土を踏まぬとパイロンもどきに東海を踏んで去つた話や、パリでは自動車に乗せた最愛の子供が二人までも車體と共に河中に墜ちて溺死した慘事や、其後に結婚したソビエツト露國の少壯詩家を手を携へて歸來した時、素氣なくも上陸を拒絶せられ、漸くにして許可を得た葛藤や、此の情人とも其後不和となり終に破鏡の嘆、否離婚の訴訟に捷を笑つたが翌年其の詩家はレニングラードで自ら縊れて死を遂げた話や、其他にも色々人の感情をそゝる逸話も夥しいのであるが、就中團女の最期を彩つた一場が他に比類無い宿命的の悲劇であつた。

◎團女は今年の夏からニースの或るホテルに滞在して追懷録の編纂に従事して居た、其の稿料の一部だらう五千弗の金額を受取つた九月某日の夕、注文して廻はさせた自動車の試演をやつた、編纂を手傳つて居る某婦人がホテルの石段から眺めて居ると、團女は例の希臘服に西班牙式のシヨールを被つて運轉手の傍に飛乗つた、不幸にも其シヨールの端が車の軋り出した刹那



車輪しやりんからみ付いた爲ために、團女だんぢよは車外しやがいに刎は飛ばされ、車輪しやりんの下敷したとなつて二十五フツ呎もも引ひずられ見るも無慘むぜんの即死そくじを遂ついけて仕舞しまつた。

△不言實行げんじつこう、純然じゆんぜんたる藝術家げいじゆつかを以て自任じじんした團女だんぢよは無論むろん會見かいけんや宣傳しやうべんを好このま無なかつた、喧けんしかつた婦人ふじんの隘口がいこうも或あるは其そのの邊へから起おつたのかも知しれぬ、處ところが此このの夏米國なつまいこくの雜誌ざしに初めて團女だんぢよの舞踊ぶじゆ藝術論げいじゆつろんが現あられた、追おつて、遺稿いごとなつた追懷録しゆわいらくも發刊はつかんされて波瀾はらんに富あんだ經歷けいれいと共に藝術觀げいじゆつかんの變遷へんせんも窺うかがはれるであらうが、先まづ夫それまでは此このの一篇いつぱんの論文ろんぶんは舞踊ぶじゆ研究家げんきゆうかに取とつて誠まことに金玉きんぎよの至寶しじゆであるのだ。

◎其そのの中の記述きじゆに因よると團女だんぢよは十五才じふごさいの時早ときはやくも學まなぶべき師匠ししやうの世界せかいに無ないことを發見はっけんし、他の凡たての藝術げいじゆつと同じおなく様に舞踊ぶじゆも亦また自然しぜんに就ついて直接じやくせきに學まなばねばならぬと悟さとつたと信まじた、夫それで例たとへば戀愛れんあいの所作しやくさにしても、禽とりや蜂はちの飛び方かたや、虎とらや象ぞうの身振りみぶり、又は草木花くさきものの瓣はなの開ひらく様さまなぞが一番いちばん研究げんきゆうの資料しりょうを與あたへたといふ、勿論もちろんどの國くにの藝術げいじゆつでも、其そのの本源ほんげんに遡さかのぼる時は生物せいぶつの運動うごや自然しぜんの變化へんかを直寫じきしやした民族みんぞくの儀式舞ぎしきぶに達たつするが、此この最古さいこの舞踊ぶじゆが團女だんぢよの私淑ししゆくした所ところと類たがひするとせば、其そのの古式こしきを崩くずさずに尤もとも純粹じゆんじゆな姿すがたで傳たづなへて來た日本舞踊にっぽんぶじゆには他ほかに見みることの出來できぬ優越ゆうえつの所作しやくさが遺存いそんせねばならぬ譯わけだ、『牡丹たんぼんに戯たはぶる獅子ししよの曲うた』に團女だんぢよは舞踊ぶじゆの精髓しんすいを極印ごくいんしてくれたと言いつても殆たいていど差支さしつか無ないのである。

△團女だんぢよ畢世ひせいの努力どりふ空からしからず、其そのの創成きやうせいした希臘ギリヤ式ヤシキの舞踊ぶじゆは終つひに西洋せいやうの藝壇げいだんを占領せんりやうして仕舞しまつた、何故なにがに希臘ギリヤ式ヤシキを團女だんぢよが採とつたか、自然しぜんの力を神かみ化した舞踊ぶじゆには少しも人工じんこうの痕あとが無い云いはゞ『人間の私わたくし』が無ない即ち郷國きやうこくに限かぎられた技藝ぎぎで無なく寧ろ世界せかい共通きゆうこうの最高きやうかう美術びいじゆであるから之これを採とるのだと云いつて居ゐる——然しかし如何いかに希臘ギリヤ式ヤシキの舞踊ぶじゆが歐米各地おうれいあちに漲なつて既に東洋とうやうの端はしまでも波及はくわくして來たにもせよ、夫それ等は團女だんぢよの末節まつせつを模ましたに過ぎすぎないで既に一種いっしゆの型かたに挿さはれて來た、實際じつじやうに舞踊ぶじゆの精靈しんれいは此このの天才てんさいと共に遠とほく仙遊せんじゆして仕舞しまつたのだ。遮莫しやくま、自然しぜんを學まなぶと云いふ舞踊ぶじゆの秘訣ひけつは歌舞伎かぶきの始はじめまる以前いぜんから確たしかにかわ藝壇げいだんに傳たづなはつて居ゐる以上いじやう、斯道しだうの熱烈ねつれつな研鑽けんさんを試こころみ舞踊ぶじゆの一生面しやうめんを開ひらかうとする氣慨きがいある少女せうじよの一人位ひとりぐあいは寶塚たからづか邊へからも出でさうなものだ、士行しこう氏しん以もつて如何いかんとなすと云いはゞ、學究がくきゆうは由來ゆらい事情じやうじやうに暗くらいものと定さだめし笑わらはれる事ことであらう、然しかし團女だんぢよはともかくお國位こくにゐのダンサーダンサーがもう現あらはれても良い時分ときぶんでは無ないか、どうも自分おれには其そのの氣運きうんが已おに萌もして居ゐるやうに思おもはれてならぬ。

### は 窓 引

大正八年度の顔見世に上場以來九年振りである。『引窓』で鷹たかの十次兵衛じゆしじべゑ、梅幸うめさちのお早おはやの顔合せに就つては兩優りやう共に忘わすれ難がたい思おもひ出でがある。それは明治三十九年の東京とうきやうの歌舞伎座かぶきざへ鷹たか治郎ぢらうが上京じやうきやうした際とき、十度九代目團十郎じゆだくぢうだいめだんじゆじらう、五代目菊五郎ごだいめぎくごらうの二大名優ななふを失うつて四年目の寂寥じやくりやうのどん底どんぞこにある東都劇とうとげきに初めて『引窓』を出いし、鷹たかの十次兵衛じゆしじべゑ、梅幸うめさちのお早おはや、羽左衛門はさゑもんの長五郎ちやうごらうの初顔合せはつげんがしが非常ひじょうな好評こうぱうだつたといふ事ことである。



# 歌舞伎競妍

林久男

又ぞろ顔見世の季節になつた。「顔見世や人に霜おく朝朝」とか、「顔見世や霜にさかりの男郎花」と詠んだやうな早朝の颯爽たる気分は今も味はれないにしても、京で一年一度の大歌舞伎が居乍らにして観られるかと思へば、何とも言へない嬉しい氣持が込みあけて来る。

又例の顔ぶれかと顔をしかめる人もあらうが、併し、鷹治郎や幸四郎や梅幸がやがて顔見世に顔を見せない時代が來たら、どんなにか又寂しい想ひ出の語り草になるであらう。けれど、これ等の俳優もまだ未永いことであるから、偶には違つた顔も加へてほしいといふ大方の輿論には賛成しておきたい。敢ていかもの食ひとばし、貶なし給ふな。

『尾形光琳』と『龍巻』では新しい味を見せて貰へるであらうし『茨木』では梅幸のいよくさびて來た至藝によつて溜飲を下けることも出来るであらうが、つい先月中座に出た『太功記』

や、これも近年南座の板にのせられたばかりの『勸進帳』や『藤十郎の戀』といふ出し物は少し智慧が無さすぎる。これも、うんと碎けて、近頃流行の懸賞募集にでも智慧を借りた方が増しだつたらう。

先月中座の『太功記』では、矢張り中車の光秀が光つてゐた夕顔棚の出は少し腰がふらくして見えたが、手貧ひの母や重次郎の落入りまじに至る複雑な氣持は、流石に鮮やかに仕こなしてゐた。福助の操は餘り定石通りで、サバ／＼としてゐて潤みか乏しかつた、が魁車の初菊は、門出の物の具を扱ふあたり悲喜取りませた心持に、滴たるばかりの味を見せてゐた。鷹治郎の重次郎は、可なり凝つたものであるが、油繪と同じく遠く離れて觀賞すべきもの。去年の顔見世には櫻丸、今年も重次郎此次は力彌か何かで、段々若い所で味を出して見せるのは、蓋し藝の力でもあらうか。『廓文章』の伊左衛門は、二冬續けて

出しただけあつて、流石にお手のもの、他の追従を許さない出  
きであつた。

同じ芝居の『樽屋お仙』では、魁車の伊助が破格の出来であ  
つた。おせんに対する情愛も後の嫉妬も、よく出てゐた。福助  
のおせんは、柄にはまつて居たが、捨鉢の氣分で旦那の長左衛  
門に心を移してゆく所が、作に無理も有らうが、どうも不自然  
に陥つてしまつた。併し、絶望の餘り死を覺悟し、男心を怨み  
乍ら而も盡きぬ思ひを残しつゝ、死んでゆく、哀れな氣持は細か  
によく出て居た。

『本藏下屋敷』は、中車の本藏、鷹治郎の若狭之助、雀右衛門  
の三千歳といふ役揃ひで、氣ぐみも好く合ひ、近頃面白い芝居  
であつた。三千歳姫の獨白の場に於ける雀右衛門の藝は、勿體  
ないほど立派なものであつた。番左衛門をはねのける所も鮮や  
かなものだつた。さて、それが、立ち上つて引つ込む段になる  
と、足もとがぐらくとして、見る目も危ない、いたましいも  
のであつたが、彼はそれから二三日して終に不歸の客となつて  
しまつた。散りゆく花が、更に一段と美しく光り輝いたやうな  
ものであつた。その濃艶な人形振りの藝風は、掛け値無しに上  
方の誇りであつた。もうあの美しい小春や、お里や、三千歳姫  
や、さびしいお光や、顔世も永遠に見られないかういふ生粹の  
女形役者は、もう永く又生れて來ないことであらうと思へば、  
たまらなく淋しく感じられる。『魂の無い人形が、淨瑠璃と

調和した立派な藝術の力で、寧ろ人間でも現はし得ない妙味を  
見せて居るのを感じる毎に、少しでも其の長所を取入れて演じ  
て見ようと思つてゐます』と言つた彼の言葉がしみみくと思ひ  
出される。

中車は流石に橙の数は争はず、腰から下には力が無くなつ  
て、八百藏時代の堅實味は薄らいで來たが、その代り枯淡な、  
さびた味はいよゝ増して、彼れ獨特の世界を開きつつあるこ  
とが目立つて來た。本来『下屋敷』なんといふ、さも無い芝居  
も、彼の本藏によつて、千金の重きを見せて來る。丸腰にされ  
て、しよんほりと、而も毅然と、あの土俵の首の座に坐つてゐ  
る間の凜としたせりふ廻しや藝の力は頼もしいものである。去  
年の顔見世の九段目にも増して本藏の人物をよく仕活かしてゐ  
た。

それに釣り込まれたのか、鷹治郎の若狭之助も、力のこもつ  
たい、出来であつた。『ふつつり短慮とどまつたも、そちが蔭  
嬉しいぞよ、過分なぞよ』の述べ懐から、見送りのあたりまで、  
本藏としくつり呼吸が合つてよかつた。

『引窓』は少し鼻につくが、併し鷹治郎には打つて付けの出し  
物である。紀有常とか、南方十次兵衛といふやうな、時代世話  
絢ひませのものこそ、この成駒屋の獨壇場である。そして此の  
優は如何なる役にもどこか新工夫を怠らない。併し、その癡り  
性が時々、妙な破綻を持ち來ることが無いではない。『引窓』

の十次兵衛が、長五郎の顔へ投げつける小判で其の高頼の墨子がとれる筈のを、気がさすと云つてそれを略したり、松王の首實驗の性念場で、神佛を祈る意とかで、伏目になつて了ふやうな一人合點の新解釋は、時々人を閉口させる。藝を細かに丹念にする割合に、どこかうつろのやうな處のあるのを感じさせるのは慚きたらないが、併し此の優ほどに和事風の潤ほひと色氣を天賦的に體にもつた役者は、昔は兎に角、今時は類が無い。藤十郎の如きは、此の優極めつけのもので、往昔の都萬太夫座の坂田藤十郎さへ僂ばれる程である。この優ほどに天性の若き情味を持ち續けてゐる俳優は、泰西にも餘り例を見ないやうである。鴈治郎は、所謂天才肌の俳優ではなく、矢張り永年の若き工夫によつて自ら作りあげた藝術家である、そして、彼をして大成せしめたのは、その生れ乍らの柄と情味とである。従つて彼れの成功した役々には、立派な押出しで持つものと、和事風の情味とで持つものと二方面がある。多くの俳優は、年と共に濃艶から枯淡に向つて殆んど一定の曲線を描いて進んでゆくのに、此の優ばかりは殆ど例外的に、その水々しい若さを持ち續けてゐる。半兵衛や、治兵衛や、半七や、伊左衛門や、藤十郎役としても、まだ容易に衰へまい。併し、もうそろそろ重次郎や致盛などの若姿であつと云はせるよりも、老いて益々味のにじみ出て來る政右衛門や、梶原や、治郎右衛門や、由良之助や、大膳や、源藏や、主税などの方面へ、いよく藝を深め

てゆく心掛をすゝめた。てゆく心掛をすゝめた。  
去年の顔見世には『辰橋』の早百合や、『毛谷村』のお園や『九段目』のお石や、『寺小屋』の千代で、其すつきりとした藝を見せてくれた梅幸は、今年に『尼ヶ崎』の操や、『茨木』の童子などで、益々きりつと冴えた所を見せてくれるであらう女形としての梅幸の體格や、音聲に於ける生來の缺點は、遺憾ながら年をとるにつれて、いよく目だつて來るやうではあるが、併し此の優には、歌舞伎劇傳統の繪畫的乃至彫刻的の品格的美と、作中人物の性根を理解する稀なる聰明さとが具はつてゐる。『九段目』に於て中車の本藏や福助の戸名瀬を向ふに廻しての彼のお石の、あの凛とした應接ぶりの妙味はどうであつたか。近來三千歳や、揚卷や、宮城野や、おかるなどに於て往年の如き其の艶麗さは減じて來たやうに見えるが、その代り、『累』や、『土蜘蛛』や、『辰橋』や、『四谷怪談』などに於ける枯淡な凄愴の妙味はいよく増して來るのが氣付かれる。我邦の所作事を外國へ紹介するには、先づ梅幸と菊五郎とを以つてしたいやうな氣がしてならない。併し濡衣や、お富や、お妻や、豊志賀や、雪女の千代は、まだ他人の追従をゆるさない。今年三月の中座に於ける『千代萩』の政岡は、歌右衛門や福助など行き方を異にした、稀に見る立派なものであつた。烈女としての形と云ひ、氣品と云ひ、歌舞伎傳統の法式に依りつ、忠と愛との間に挟まつた複雑なる内面性をあれ程に精細

に表はし得ることは、いよ／＼以つて彼の頭の牙えを思はせるが、二十年前の彼の政岡には到底此の味は見られなかつた。またきも本式、榮御前の御入りですつかり氣を變へ、八汐とのせり合ひの凜々しさ。我子の死を悲しむ傍ら君の無事を見ての忠義の喜び。連判狀を披いて見て『こりやこれ鬼貫公をはじめとして』と且つは驚き且つは患へ、且つは喜ぶ、その複雑なる感情の表出は、他には容易に見られない鮮やかさを見せてゐた思ふに、梅幸の藝には、まだこれから味を深めてゆくべき世界が残されてゐる。

その相方の羽左衛門の缺けてゐるのは淋しいが、梅幸と、幸四郎と、中車と、それに鷹治郎一座をつき合せ、而も延壽大夫と聞いただけでも、理屈は抜きに、矢張り芝居國の年中行事としての顔見世狂言氣分を湧かし、四條河原に濃き藝術的情調をただよはしてくる。



(助 福)

(部の畫)言狂世見顔座南  
經義官判源「帳進勸」

つらく思へば、梅幸でも、幸四郎でも、中車でも、鷹治郎でも、永年錬えあけた其の藝の丁度圓熟しきつた年輩に立つてゐる彼等こそ、眞の意味に於て、歌舞伎傳統の園に咲いた最後の花であるかも知れない。これから出て来るものには、到底これ程の歌舞伎傳統の純なる美しさを見ることは望めない。試みに花に見たてたら、梅幸は菊、中車は梅、鷹治郎は櫻、幸四郎は木蘭、福助は芍藥、魁車は百合、それに箱登羅の蕪などまでまじつて、百花妍を競ふ有様は、さて賑やかなことである。

唯だ、ほろりとさせるのは、玉椿にも比すべきあの美しい上品な雀右衛門が、ころりと散つていつて此の競妍にもれたことである。あんな淋しい人を、京屋の笑太郎とは、誰が名を附けた。二句を手向けて用ひたい、頓生菩提。

玉椿 姿崩さず散りにけり





# 観劇といふ習慣

山本修 二

—ミネルヴの神よみし給はずして神興湧かす……

こはこれ羅馬の昔ホレイスの吐いた嘆聲である。私のやうな  
雑文家にも、この嘆聲はとき／＼起る。何か書かなければなら  
ぬ、義理がすまぬ、と思へば思ふほど、ミネルヴの神よみし給  
はずして……

一體『道頓堀』といふ雑誌の注文が、いつも少しばかり無理  
である。まだ自分の見てゐない來月の興行を課題にして何か書  
けとの注文である。もとより詩人でない私は、豫言者でもない。  
來月の興行がどんなものか、夢にも知るはずがない。など、い  
ふと、すぐに本誌の記者がかう云ふのである。

—來月の狂言は大低ごらんになつてゐる筈ですから……

—いゝ、えいけません。僕が見てゐる狂言ばかり列べるなんか

—でも少しくらくらる、演出法が變りませうから。

—演出法が變るのなら、僕は何も書けません。

—では、變らないことにして……

—狂言も變らない。演出法も變らない。つまりあなたは、劇  
界の進歩を否定するのですね。

など、僕はいろ／＼無理を云つたのである。無理を云つて  
少し寂しかつた。私の芝居に對する熱情が、少しばかり冷かに  
なつてゐるのを感じたので。

これには松竹當事者の方にも罪がある。劇界沈滞かどうか、  
そんな大問題は抜きにして、今年ほどに、京都劇界の看却され  
た年があるだらうか。年の始めに吉右衛門が來た。それから……  
顔見世である。これは當事者にはせるならば、財界不況を  
見越しての當然の處置だらうが、諸君、諸君は觀劇といふもの  
が、一つの『習慣』だといふことを、忘れてゐるのではありま



# 顔見世所感

成瀬無極

せんか。空腹にまづいものなし。いかにもそれは眞理であるが、  
食慾と観劇は違ふのである。人間は芝居を見なくても、餓死は  
しない。もし餓食する人があれば、今頃はもう死んでゐる。

冗談はさておいて、前にもいふ通り、観劇は習慣だ。いつも  
いゝ芝居がかゝつてゐれば、観衆の足は、自然に無意識に劇場  
に向ふのである。私は一體寄席の趣味は解しないが、それでも  
小さんを聞いてから、しげく寄席に通つたものだ。近頃思ひ

一年の悲喜劇の總締めとして、忙がしい師走の世間をよそに  
劇場の陶酔的な雰圍氣の中で、過ぎし世のさまじくの姿を、と  
りかゝる色彩でゆつくり眺めるのは何よりも嬉しい事ではある  
『人はその借金を忘れ』といふ文句が夏目さんの小説の中にあ  
つたと思ふが、こいつばかりは看劇のさ中にも時々思ひ出すと  
しても、とにかく別世界だ。まさか、あすこまで踏ん込んで

出したやうだ、時々キネマをつまみ食ひするのも、芝居といふ  
歴とした女房が、いつも家を明けてゐるからだ。

愚痴はい、加減に切り上げて、今年の顔見世は、どれもこれ  
も結構です。『勸進帳』『茨木』『引窓』『太十』『藤十郎の戀』  
何れも定評のあるもので、今さら私などの駄辯を要しないもの  
ばかりです。それにどうも今日は、陽氣の加減ですか、ミネル  
ブの神の方が……

來ない。慾を云へば、折角の年中行事ではあり、京の名物と云  
はれるのだから、この興行に就ては、すくなくも半歳前位から  
十分に考慮して最終の美を遺憾なく發揮して貰ひたいものだ。  
出し物、俳優の撰擇は勿論、演出法にしても、毎年舊套を追は  
ずに、いつも新機軸を出すやうにしてほしい。何分、忙がしい  
興行界の事で、役者の都合もあり、早くからプログラムを作る

ことは六つかしいだらうとは思ふが、いくら呑氣な歌舞伎劇でも、そろく演劇目録を作つてもい、時期になつてゐると思ふ狂言本位にして、せめて、顔見世だけでも充實した番組を豫め作つてみたらどうだらう。(或は、さうしてゐるのだらうか) さうすれば演出法に就ても十分研究と準備ができ、歌舞伎劇改善の意味にもならうと思ふ。役者には顔見世に出演することを光榮と考へさせるやうにしたい。

断片を羅列するよりも、何か一つ大きな通し狂言をえらび、それへ所作事でも結びつける方がよくはないか。それから、毎年優秀な、少くとも力の籠つた新作を披露することも一策であらう。そのためには一年位前から知名の作家に依頼するとか、懸賞で廣く募集するとか、こゝは一つ、算盤を離れて、顔見世

のみならず、歌舞伎劇の將來のために奮發すべきだ。創作にしろ、演出にしろ、時間をかけてゆつくりやらなければ到底好い物の出来る筈はない。

即ち、私の希望は、維然と短かい物を並べずに大物を一つ据えること、それには演出の上にも新機軸を出すやうに努力すること。吉例として新作を發表すること。俳優を精選すること、などで、要するに、そんな事は夙からやつてまんね、と云はれさうではあるが、そのやり方を變へてほしいのである。つまり、顔見世を従来よりもずつと重く見て、『時』と『金』とを十分にかけて立派な年中行事にしてほしいのである。顔見世が歌舞伎劇の壽命を延ばし、進んで新しい生命を吹き込むといふやうなことにしたのである。



(幸 梅)

(部の夜) 言狂世見顔座南  
子童木茨は實母叔「木茨」



# 光琳

## 堂 本 印 象

徳川初期に於ける日本的な藝術家が貽した種子が、光琳によつて美しく香高く咲き、茲に純日本の大藝術が完成出現して以來、現代の畫界に迄其響を残して居る此の大藝術を生んだ光琳に就ては、光悦を考へ、更に光琳が本阿彌系であるといふ事も見逃し得ないことであつて、光悦が所謂慈悲深くおとなしきが誠の人間、といふ心の彼れの藝術や、家系の信條たる佛神を敬し心正直、等云ふ事が光琳に如何に強く響いて居るかは其作品を見れば明かである。

光琳が殿中に於て能を演じたり、卅歳の時、弟の乾山との遺産分配に於ける乾山が印月江の墨蹟と、書籍一式を分かれたれて居るのに對し、光琳が能道具を貰つて居る事も思ひあわされる事である。

光琳が遺傳的要素の外に、彼れ自身の生活や、元祿前後の盛んなる文化の京都といふ環境と、後天的修養及び宗達光悦二先

達の感化等から、斯くも日本的な、大和繪の源流に溯り日本人の心を強く深く生かした彼れの藝術は、一面時人の好尚と深き關係のあることは勿論ではあるが、豪華、輕脱、機智、爽快な革新創作的の流轉藝術であつたのである。

四季草花圖、扇面散し圖、杜若圖、鹿と鶴圖等は世に知られたる彼れの傑作であるし、他方蒔繪に於ても、八橋手箱や三輪硯箱、松椿硯箱等の傑出した應用藝術を作つて工藝が如何に高い境地にまで近づけるかを物語つてゐる。

此の大藝術家もその妻へは、家屋敷を賣却した金子で渡世する様にと云つてゐるし、彼れの遺書にもある通り『我等事唯今相定めたる家業も無之に付』後に畫師を家業としたのはあるが、吾が子の爲めには決して末頼母しい家業とは認めなかつた等は考へるほど面白いことである。



# 大正顔見世の總決算

堂 本 寒 星

大正元年から十五年まで、即ち大正期に於ける南座顔見世の總決算を書いて見る。

それは我々の記憶に未だ餘りに新しい事象なのではあるが、昭和第一の顔見世を迎ふるに當り、これを一括して書き残して置くのも、強ら無駄ではなからうと思ふからである。

南座が松竹合名會社の手に入つたのは明治四十年前後のことだから久しく絶えてゐた劇道の最も華やかな企てである顔見世の復興が成つたのは、殆んどその晩年で、大正を迎えると益々盛観に、再び京の年中行事の誇るべき一つとなつた譯である。

最も茲に斷るまでもなく、昔の顔見世と今の顔見世とは、興行を打つ目的が既に異つてゐる。それは關の東西に亘つて全日本俳優の主なるものを、その傘下に集めてゐる「松竹」を有つて現下の劇壇の制度では、昔のやうに來ん春の抱え俳優の顔觸を多くの仕打の手から夫々の所屬劇場に依つて一般に知らせる必

要がもう無くなつて了つてゐるからである。だが此の昔の顔見世に比すべき内容を盛つた一年一度の大興行は、假令時代が變つてゐても總ての好劇家の普く期待する處であるから、假に顔見世の名稱を襲つて今日の所謂顔見世が生れたのであつて、その目的は異つてゐるが、興行の本質から見ても寧ろ昔日の顔見世を遙かに凌駕してゐることを認め得るのである。

で、復興と同時に古風を慕うて例年十二月——昔は十一月であるが、今は新曆に依る——開場前に座表へ竹矢來を組み、招き看板を掲げ、座方一同打揃つて、評判振を行ふことも、顔見世と呼ぶ以上當然の行事で、これは今後顔見世の續く限り繼續さんことを切望する次第である。

さて本題に入つて、先づ大正期に於ける顔見世の出演俳優の顔觸を擧げると、關西方面の主要俳優は中村雁治郎を筆頭とし



即ち嵐巖笑、中村燕雀、中村福助、中村成太郎、市川市藏、林長三郎、坂東長次郎、中村扇雀、實川延二郎、中村福之助、市川右衛治、尾上卯三郎、片岡我童、中村政治郎、中村七賀之助、市川遊女、市川鍛十郎、中村紫香、市川筑登羅及び今は故人の中村梅玉、中村嘉七、中村傳五郎、市川齋入、嵐吉三郎、嵐廣三郎、嵐璃狂、嵐璃寛、尾上多見藏などで、芝雀は中村雀右衛門、成太郎は中村魁車、長次郎は坂東壽三郎、延二郎は實川延若、福之助は市川新升、七賀之助は嵐飛鶴、紫香は中村霞仙と、夫々此の期に改名してゐる。

翻つて東京俳優はと見ると、此の十五年のうち、元年と四年を除く外は例年東西合同劇で、蓋を開けてゐるので、市川猿之助、市川松尾、市川蝙蝠、市川八百藏、中村明石、堀越福三郎、松本幸四郎、尾上梅幸、尾上幸藏、澤村宗十郎、片岡仁左衛門、市村羽左衛門、松本金太郎、片岡千代之助、澤村高丸、澤村由次郎、故人では市川段四郎、市川門之助、尾上築三郎、尾上泰次郎が参加し、松尾は市川八百藏、蝙蝠は市川小太夫、八百藏は市川中車、福三郎は市川三升、高丸は助高屋高助、由次郎は澤村田之助と改名してゐるが、この顔觸は僅かに東京の一部に過ぎず、今後は猶一層廣き範圍に亘つて、著名な俳優の参加を見せ、江戸歌舞伎の移植で勉めて欲しいものである。次に上演脚本であるが、これは顔見世が昔の興行法に據り晝夜二部制を執つただけに、この期間に無慮一百數十種も上場し

てゐる。最も一興行に通し狂言を上演したのは九年の晝興行に「假名手本忠臣藏」天序から七段目までを見せただけで、他は例年の如く、あらゆる階層を網羅した觀衆の興味を狙つて、一興行に必ず四五種の短篇を上演した關係からでもある。

今これを時代、世話、舞踊及び新作に大別して、大正期に於ける演劇界の風潮を知る資料とする。即ち時代物は四十六種、世話物は十九種、舞踊劇二十八種、新作物三十種で、云ふ迄もなく當り狂言はこれを再三繰り返してゐる。この短期間に二回以上上演された狂言を参考までに擧げて見ると、「首公」「鈴ヶ森」「經ヶ島」「襦袢錦」「封印切」「尼ヶ崎」「河庄」「紙屋」「土屋主税」「揚屋」「山科閑居」「櫻のもと」「素襖落」「熊谷陣屋」「菊畑」「戀の湖」「樽屋おせん」「やれ三味線」「大森彦七」「操 三番叟」「辰橋」「保名」「寺小屋」などで、お家狂言として紹介されたものは成騎家の玩辭樓十二曲（大正八年頃から選定したもので未だ十二曲に達してゐない）のうち「引窓」「天網島」「河庄」「紙屋」「土屋主税」「襦袢錦」「大和往來」「井筒屋」「戀の湖」「蒼太平記」「山科」の八種、音羽家の新古演劇十種のうち「辰橋」「茨木」「一つ家」「土蜘蛛」の四種、成田家の歌舞伎十八番の内「勸進帳」「新歌舞伎十八番の内」「大森彦七」「高時」の二種である。

新作は顔見世の最も誇とする處で、例年これを上演して好劇家の批判を仰ひでゐる。初期の新作は殆んど榎本彦彦氏の作物に限られたやうな觀があり、碧瑠璃園の新聞小説や福知櫻痴居



# 顔見世漫筆

— 勸進帳と引窓のこと —

高谷伸

士の舞踊劇もま、あつたが、大森堀雪、大西利夫二氏の入社以來や、新味を加え、大江素天、中原指月、鶴屋南北氏から進んで高安月郊、岡本綺堂、坪内逍遙氏などの大家に及び、やがて菊池寛、九條武子などの新人にまで達した、更に昭和に入つては、猶一段の進境を見せて、新歌舞伎の新旗幟を樹立したいものである。

舞踊劇も亦當期顔見世の異色で、年々競つて名曲を上演する關係上、長唄では芳村孝次郎、杵屋佐吉、富士田音藏、杵屋六左衛門、杵屋寒玉、芳村伊十郎、常磐津では松尾太夫、文字兵衛、竹遊、古式部、文賀太夫、伴助、清元では延壽太夫、榮壽

太夫、喜久太夫、順三郎など當代の名匠が悉く出演してゐる。最後に當期の顔見世に特筆すべきことが二つある。それは大正二年南座新装記念興行に江戸芝居の根元たる猿若家十五世の中村明石を迎え、改修に因んで古曲「猿若」を演ぜしめたこと、十五年最終の顔見世に「羽衣」上演に當つて松竹ガクゲキ部の女生徒總出演で和洋音楽合奏のパレーを演出したことで、この興味ある對照は、又一面大正顔見世十五年間の時代の推移を雄辯に物語つてゐるやうに思はれる。

俳優の舞臺上の技藝に關しては、別に書く機會があらう。

(昭和二、二、一〇)

京の顔見世 —  
それは移り行き變り行く歌舞伎狂言のうちに残された一つの

光明である。金屏のいろにまた、く蠟燭の光のやうに美しくも、ものがなしい色である。

顔見世のたびごとに、若い血を躍らせた江戸の民衆は、歌舞伎風の劇場の滅失と共に亡びてしまひ、歌舞伎そのもの、味さへ變つて行かうとする時、たつた二つ残された純歌舞伎の大劇場の一つである南座の顔見世は、實に歌舞伎の誇りである。日本の誇りである。

四條五條の橋の霜を踏んで行く昔なつかしさはなくとも、初日の前夜には酒や毛布を手にした人の山が木戸の前に築かれる一番大鼓二番鶏の感はなくとも、棧敷には舞妓の花かんざしが怪しげな毛斷嬢を壓倒してゐるではないか。

その誇るべき顔見世ではあるが時勢と共に狂言の立て方、開演の時間などに止むを得ぬ推移を見せてゐる。

勧進帳、引窓、太十などが出るといふ。太十のことは前號に書いた。この前顔見世で出たのは大正十年で藤治郎、幸四郎の外に福助のみさは宗十郎の久吉で、初菊の雀右衛門正清の吉三郎などは今は永久に見られぬものとなつた。

勧進帳がはじめて南座の顔見世に出たのは大正六年ですばらしい評判だつたが、その後十三年の六月に南座で出てゐるので勧進帳をかなり多くやつたといふ九代目團十郎でさへ生涯に十五度それは天覽の際などの特殊の場合も加へての話で本興行は安政六年の七月市村座から明治三十三年四月の歌舞伎座まで前後十回といふのに較べると、あまりに度々であつて幸四郎の

上演数は指を折るに苦しむ程で、口のわるいのが言ふ安宅でなうて、またかの新關、寧ろ同じ十八番なら誰もが認める堂々たる押出しの幸四郎、一度、『暫』でも見せて欲しかつた。

勧進帳のこのやうに何度出しても評判のよいのは、作曲振附俳優と三拍子揃つた點である。作曲は四代目杵屋六三郎、振附は西川扇藏、俳優は七代目團十郎で天保十一年三月の河原崎座が復興の初演であつて三代目並木五瓶の書いた臺本に文法上の誤謬があつても、舞臺の呼吸は水も洩らさず呑みこんだものだけに、確かに纏まつた演出であつたに相違ない。

のみならず歌舞伎を輕蔑し、獨り自負誇大の能樂の末流が、高く構へてゐた城廓の中に斬りこんだ大膽さが、評判を呼んだものである。

貴族と民衆との生活の差別は舞臺藝術の範圍にまで及んでゐたのを、渾然と融和させたのも前述の三拍子揃つた強味からである。

しかし能樂の直譯では面白くないと見て取つて、講釋で聞く山伏問答までうまくとり込んだところ、やはり五瓶にも一半の功はある。

元祖團十郎が堺町の中村座で元祿十五年二月に出した『星合十二段』は『推合十二段』といふ程見物が詰めかけ二月二日から六月二十五日まで百五十日打通したばかりでなく、七月から押かぶせて『新版高館辨慶』といふ後日狂言まで出たといふ程好

評だつたが、その後のものでは四代目團十郎の『御ひいき勸進帳』を安永二年にやつたのみで中絶してゐたのを七代目が復興したのである。

勸進帳の變り種としては、『榮靜胎内拮』から脱化したのが中車や延若のやる安宅關で、延童のやる金剛流勸進帳といふのは前半はすつかり十八番で、士卒ひきつれで富樫が入ると正面の松羽目を引き上げ、海の遠見になるといふだけが違つてゐるのである。

鷹治郎の引窓は大正八年の顔見世以來で、同じものを繰りかへす鷹治郎としては久し振りの出し物であるのみならず、成駒家以外では延若か、でなくば、いつか吉右衛門が演たぐらひで十次兵衛の時代世話の味は吉右衛門より鷹治郎延若の方が數等上のものである。

しかしこの味も味ではあるが、月見の宵、放生會を前に控えた八幡在の郷家の情趣に心をひかれるものである。そして色彩の乏しい狂言ではあるが、引窓から洩れる月の光によつて、明暗兩面の、言はゞ黒と白との單色的効果を強く働かせたところ、この一幕の強味がある。

演技としての住所は第一が縁端へ出て塵を拂ひながら偶然手水鉢に寫る濡髪姿を見てブツと思ひいれして風呂敷を投げつけ手早く太刀をさし左に挿細右に十手を取つて立上る長五郎がトンと障子をしめる、お早と母親が十次兵衛にからむところ、

第二に『河内へ越ゆる拔道は狐川を左へ取り右へ廻つて山越へのせりよの氣味合、第三に暮切の『三尺残して切るが古例』から引窓の綱を切り、長五郎を落してやるところが主なるものである。

本文の銀の手裏剣高頻にびつしやりと、窓から金包をうちつけて黒子を打ち消す件は鷹次郎はいつも省略してゐるやうである。これはあまり重要な効果のない點であるから、本文尊重を高唱する自分も、あまりとがめ立てはしない。しかし古劇として用ひられさうな技巧ではある。

この書が近松の『壽門松』と西澤一風の『昔米萬石通』とを粉本にして出雲の手で纏めあげられた事などは改めて書く機会もあらう。

私は歌舞伎舞臺の廻るとき、ちらりと見える廻り舞臺の奥に覗く空に、引窓の狂言に見るある物がなしさを感ずることがある。

(ともあれ)  
晝夜通しで見える顔見世、今の世のあわたしさにひきかへ、朝から晩まで歌舞伎情調に浸つてゐる顔見世の氣分は何としても楽しく味はひたいものである。

顔見世の晝狂言の終つて夜の部にかわる慌たゞしさのうちに開けられた窓蓋の間からちらりと覗く夕空に、歌舞伎の昔の片影をなつかしむものである。



# 引窓から内の息子を

高 安 吸 江

もう顔見世が来ました。今度は久しぶりで引窓が出るそうです。寺子屋の源藏と共に鷹治郎の傑作中の傑作に属すべきもので、いつ見ても胸がすくやうに思はれます。源藏對戸浪の如く南與兵衛とその女房お早とは既往に戀のローマンスを有つて居るのも面白く、それがまた今の成駒屋によく適るのです。元來ならこゝで一つ大に引窓禮讃をやるべきであります。今私は眞綿に包んで箱入にし、大事に藏つて居つたやうな『内の息子』の京屋中村雀右衛門の死によつて哀愁にとざされ、とても其氣分になれず、且又此の様な役所についての鷹治郎に關して、向後猶度々お話の出来る機会があると信じますから、今回は御免を蒙つて、もう是迄談話や講演や或は筆によつて幾度も試みたその補遺として、やはり京屋のことを少々話さして下さい。

引窓と云へばそれが出た大正八年の顔見世が思ひ出されます

その時の一番目が私の兄月郊作の關ヶ原で、雀右衛門の可愛い淀君が阿彌陀の峯で大活躍をやつたのが、今も眼に残つて居ます。それに比べて同十四年の顔見世に演ぜられた須磨の浦の玉織姫は、凋落哀むべきものがないではなかつたが、その衰へて長刀を杖に弱々と花道をたどり行く様が、丁度手負ながらに愛する敦盛卿を尋ねて居る平家の姫君に似つかはしく、最負でなくとも覺えず暗涙を催さしめられたのであります。是は今年の春道頓堀の中座で同じ役を勤めた宗十郎の、美しいが聊かトウが立ち、且つ可なり勇ましかつたのと面白いコントラストではありませんか。

本年三月南座で野崎村のお光が出ました。是は前月松島の八千代座、それから月始めに名古屋の末廣座でもやり、京の後は神戸へも持て行つた彼の得意藝ですが、幕あけの鏡に向ひ肩を

隠して喜ぶあたりは、水のたる様な艶やかさで、是だけであと  
は見ずとも満足出来る程麗しいものでしたが、京では此お光  
が打ち納めとなりました。

其柄としては無論古典劇——院本ものが適當して居るのです  
が、新作ものも相當にやつて居る。小豆島、柿右衛門（姉娘）、  
暹羅船、京屋の娘、關ヶ原、生田森、六波羅榮華物語、肥後の  
巻、お染牛九郎、おかん長三、二ツの櫓、潮見櫻、近松では小  
春に酒頭童子の横笛、その外数え立てたらくらでもあります  
此中で小春やお染、おかんなどはもとよりであるが、京屋の娘  
は本人が好きであつたらしく、二ツの櫓の娘なども面白かつた  
と思ひます。本人は非常に嫌がつて居たが室津の歌の小太夫は、  
何でもない役ながら唯一寸出るだけで、此淋しい狂言を多少と  
もに明るくしたと私は思ひました。

京屋の讚美は是迄度々やつて、もう繰返す必要もないが、唯  
一つだけ云ひたいことがあります。すべて役者は舞臺でこそ奇  
麗に見えるが、部屋で親しく相對すると幻滅を感じさせられる  
ものです。處が京屋ばかりはそうでなく、近くさし向ひになつ  
ても、お負に鬘を取つた場合でも依然として素敵に色氣があつ  
て、それはほんとうの女性が到底足元へも寄りつけない程に魅  
力をもつて居るのです。しかもそれで居て少しも肉感的でない  
と云ふことを私は高唱したい。一昨年の十一月にやつた明烏で、  
座つて居る福助の時次郎の後に立つて種々と振をするころ、ヒ

ヨイツと頭を下けて左の方から頼ずりをする形が、まるで融け  
そうな艶ツボさでこたへられぬ程美しかつたのですが、少しも  
挑発的に感ぜしめなかつたのも其一例であります。

彼が是迄から演じた型物については、一々詳細な記録を作つ  
て天下茶屋の自宅に保存されて居る筈ですから、此點必しも  
曇ふべきではないが、唯上に述べたその持味なるものは、彼の  
寫眞にさへ現はれて居ないものであります。彼の最後の時、私  
はせめて其死面を作るか、或は最後の役であつた三千歳姫の扮  
装をさし、何等かの方法でそのコッピイでも取つて置きたかつ  
たが、それは無論出来ませんでした。それにした處でやはりそ  
の眞價を永遠に傳へることは不可能であつて、唯彼に接した者  
のみがそれを味ひ得る幸福をもつのを私は深く悲しむので  
あります。

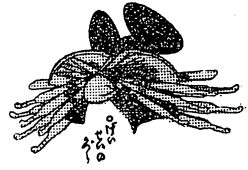
松竹株式會社專傳部主催

# 光琳に關する展覽會

●尾形光琳の代表作遺品の展觀

期日	顔見世開催中
會場	京都四條南座





# 顔見世

大村嘉代子

江戸時代からのしきたり通り、東京では十一月、京都では十二月と今も顔見世と云つて居ります。顔見世といふと、花やかな芝居がなほ一層花やかにきこえますし、又、實際、顔見世だんまりや暫など、顔見世特有の美しさと賑かき、大ききや、重みもあつて、一年中の一番かじやかしい舞臺を見られたれ月であつたのでせう。それが今は、もう全くあとをたつてしまつて、顔見世月といふ名だけが残つて居るだけで、他の月の芝居とちつともかはりません。東京の今年の顔見世月は、歌舞伎座が船艦三笠、千姫最期、三代記、相馬の金さん、靱猿で、帝劇が忠臣蔵の通しです。帝劇が八時間制で、いつもより長時間の興行であるのが、ふだんと違つてゐる丈で、別に他の月とかはる處はございません。京都の顔見世も矢張りふだんの月と、さうかはりはないのでせうけれど、隣の花は美しいのとへにもれず、京都の十二月の方が顔見世らしく思へます十二月の顔見世とい

へば、きまつて東京の重な俳優の誰かと京に行つて、京阪の重な俳優と一座をして、多くの場合、十二月の東西を合せて一番の大顔合せで、一番絢爛な舞臺を見せます。今年梅幸、幸四郎が行つて鷹治郎と一座するとかきまりました。狂言は何であつても、此の東京の重な俳優が行つて大阪の重な俳優と一座するのを待つといふ事が、それが一興行だけにせよ、しばらく見ない俳優を待つ京の人の心持の緊張が、私達に京の顔見世を、より顔見世らしく思はせる一因かもしれません。全く顔見世といふと、何よりも先づ第一に私は京を思ひます。

□松本幸四郎□ 現在の幸四郎は七代目で、屋號は高麗屋、俳名錦升定紋三つ銀杏、本名は藤間金太郎といひ明治三年五月十二日淺草花川戸に生る、幼にして藤間勘右衛門の養子となり九代目團十郎の門に入り金太郎と名乗り十三年四月初舞台を春木座に踏む、十九年市村座で染五郎と改名、同二十七年三月歌舞伎座で名題に昇進し、同時に高麗屋を襲名し同四十四年十一月帝劇の碁盤忠信で七世幸四郎となる。



# 型物賛成

坪内士行

久しく京の顔見世も見物しませんが、近頃は新聞雑誌を通して其の景況を想像するだけです、これは何としても出来るだけ永く保存したい快い年中行事で、かの英國のくりすます興行は勿論の事、ガラ・パーフオーマンスなどにも遙に優る有意義、且、奥ゆかしい興行です。

ところで、今年は幸四郎の光秀、鴈治郎の十次郎で『尼ヶ崎』が出ます由。これは見ものですね。かう云ふ古典物についてはもう度々故人や先輩が論じ盡されてゐるので、今さら何を書く必要もなく、たゞ實際に見物する事その事が残されてあるばかりですが、十一月の中座興行に於いての鴈治郎の十次郎の好評中には祝言の時に兜を着たまゝなどはいけない、と非難した評もありましたが、これは、同僚が出来るだけ顔をかくし、出来るだけ姿の若々しさを見せやうとした苦心を見のがした評と思ひます。又、中車の光秀の好評であつたつひ次ぎなので、

好劇家には一段の興味がある事です。

見ないでもほど想像のつく事は、幸四郎の光秀が、やはり例の通り、時々活歴式の小とり廻しな科白や動作を頻出させるであらう事ですが、併し、見た目から云へば、そしてそれが又かう云ふ舊劇には第一の主な點ですが、中車より幸四郎の方が線が太いだけ立派であらうと思ひます。(わたしも幸四郎の光秀位見てゐるに違ひありませんか、今ちつとも記憶にありません)他の役は誰々か知りませんが、この二人だけでも昔なつかしい錦繪的美感を描き出すに相違ないと思ふと、無精なわたしも一見したくなります。

かう云ふ古典物について感想を述べる度に考へますことは、どうして日本にばかり所謂『型物』が残り、完成され、珍重されるかと云ふ事です。西洋でもオペラなどには折々『型』が研究されたたり、踏習されたりする事があるやうですが、わたしの知つ

てゐる範圍では、他のどの國よりも、日本の劇界は『型』を賞美します。これは何故でせう。日本人として傳統を尊ぶ念に富むのが原因か、前の型を守つて行くのが安全だからこの退衛策からか、滅多に創造的俳優が現れないからか、見物の智識程度が低いので、一通り知つてゐる物を先づ選ぶ傾向が強いからかこの根本の問題は可成り研究に値すると思ひます。

併し、何と云つても『型』を守つて行くのは、確かに、事の一



## 『勸進帳』初演の時

河竹繁俊

○ 『勸進帳』が七代目の市川團十郎である所の、市川海老蔵の演出したもので、九代目團十郎によつて一層大成されたものであることは、今更らしく私達の言ふを俟たない所である。さうして、此の『勸進帳』に就いては、お恥しいが私などはあまり多

つです。殊に、兎角無茶苦茶な一人よがりの新運動基礎のたまつてゐない演技が續出する時に當つては、重味、深味のあの傳統的な『型物』の上演は双手を上げて賛成します。そんな意味から顔見世はいよく永久に續けて欲しい催しです。但し、一方に必らず大膽な新演劇、新演出をも敢て企てる、と云ふ條件つきで。

○ くを知らない。『勸進帳』の見どころ、鑑賞法、型の上の研究等に就いては、別に執筆せられる方もあることでせうから、初演の時のことをといつても、一向耳新しいことでもないのだが、こゝに記して、責を塞ぐことにしたいと思います。

御承知の如く、今日演ぜられる『勸進帳』が初めて上演されたのは、そんなに古いことではない。約九十年前の天保十一年三月、劇場は江戸木挽町の河原崎座に於てであつた。

海老藏といへば、當時第一等の名優とされてゐたものらしい。おそらくは三都をひつくるめて第一等の優人として、自他ともに相許してゐたらしい。『勸進帳』を上演しようとした理由は、今明確には測り知られないが、種々の逸話に傳へられてゐる所によつて略々見當もつく。

先づ、元祖市川團十郎（才牛）百九十年の壽といふことが最大の理由になつてゐる。けれども、これは表面上の、看板として揚げる爲の理由ではなかつたらうか。彼れとしては、もつと精神的な、彼れ自身の内面的要求といふものがあつて生れたものではなからうか。但し、これは推測に過ぎないのであるが一種の故實辭——よく言へば、研究辭が、彼れを刺激したのではなからうか。九代目團十郎は明治期に至つて活歴劇を創始したが、その因をなすものは父親たる海老藏にあると見てよい。海老藏は眞物の鎧を舞臺に使用してお咎めを受けたこともある故實を質さうとするの傾向をば多分に持つてゐた。劇術上の活歴的傾向は、海老藏に於て既に大いに現はれてゐる。本來、書畫骨董にも趣味を持つてをり、而もある見識を備へてゐたことも、種々の逸話によつて明らかであるが、これも彼れの故實辭研究辭と相俟つて助長されたもののやうに思ふ。

彼れは文筆にも長じてゐた。従つて彼れには各方面の眞層もあつたらしい。つと古くに『勸進帳』といふものが存してゐたことも心得てゐて、それを復興しようとの念もあつたに相違ない。文筆上の造詣といふものが、多少なりともあつたとすれば、それによつても誘致されてゐるとも言へる。

それを持込むのに、能樂の『勸進帳』へ持込んだのが、彼れの見識である。能——お能は、西洋なら王室保護の下にあつたともいふべき高尚典雅な藝術である。それを歌舞伎へ持ち込もうとしたのだから、異常なる冒險であつたに相違ない。それが特に、地位聲望ともに申分のない海老藏のやる試みであるのだから、容易ならぬ苦心の費やされたことは言ふまでもあるまい。

さういふわけで、表面は元祖團十郎の供養であつたにしてもアムビシヤスな海老藏としては、活歴劇的新傾向劇を創始しようとする、内面的要求によつて生れたのが『勸進帳』である。今日まで此の曲が世に行はれて、而も歌舞伎十八番中の随一でもあり、實際その藝術的價值から言つても第一等である所以は、まつたく、海老藏の苦心の結果、全精神の傾倒せられたものであるからだと思ふ。

○ 『勸進帳』の作者が三代目並木五瓶であること。作曲者が杵屋

六翁であること。振附師が西川扇藏であること。辨慶は海老藏  
 富樫が市川九藏(六世團藏)、義経は八代目團十郎であつたこ  
 とだの——稽古の時、海老藏がセリフの記憶に苦心してゐる間  
 に、稽古引受人である見習作者時代の黙阿彌が暗記して、初日  
 以來後見の姿で舞臺に出てセリフをつけたことだの、——それ  
 以來黙阿彌も出世することになつただの、——『勸進帳』が大  
 好評裡に打上げた後、作曲者、振附師に賞與を出したことなど  
 ——といふ逸話は、もう多くの方が御承知だらうかと思ふから  
 こゝに詳しくは述べません。  
 たつた一言、『勸進帳』の生れ出た段取に就いて、卑見を申  
 し述べて見ました。

(二、十一、二十日)



(郎 治 鷹)

(部の夜)言狂世見顔座南  
 郎十藤田坂「戀の郎十藤」

(石 鷓 鴒) 帳 進 勸

辨慶「ヤアレ、暫く御待ち候へ、先程も申す如く、是はゆ  
 ゆしき御大事にて候、此關一つ踏破つて越えたりとも  
 行先々の新關にかゝる沙汰のある時は事を求めて破る  
 の道理、たやすくは陸奥へ参り難し、夫にこそ兜巾篋  
 掛けを退けられ、笈を御肩にまゐらせ、君を強力に仕  
 立候、兎に角にも某に御任せあつて御いたましくは候  
 へ共御笠を深々と召され如何にも草臥れたる御體にて  
 我等より後に引下つて御通り候はば、なか／＼人は思  
 もより申すまじ、遂か後よりお出あらふずるにて候。

# いとこのつとむり

— 昭和貳年劇界の追想 —

## 壽三郎と我童

— 一月興行から —

池津勇太郎

壽三郎は私の大好きな役者である。しかし我童はどつちかといへばきらひな役者だ。しかしこの二人が將來關西劇壇を背負つて立たねばならぬ役者であるといふことは、機會あることに私は力説して來たつもりだ。

一年前の昭和二年一月興行にこの二人がかなり活躍してゐることを思出すことは、今日愉快なことである。

壽三郎は一月浪花座で『勝願の最後』の勝願と『小山田庄左衛門』の小山田とを演つた『大文字屋』その他にも出演したが、とにかくこの二つの狂言は壽三郎の出しものであつた。

このうち『勝願の最後』は正宗白鳥氏のもので、作そのものがあまり面白いものでなく壽三郎も活躍の餘地はなかつたやうであつたが、とにかく何らの破綻もなくこの新しいものを演つてのけた。

## 昭和三年

## 劇界未來記

樂屋府

一月

中座

鷹、福等例の一座、鷹治郎の爲め辰歳の新作として水木辰之助、水々しく女形といふふれ出しやがて中止になつて金閣寺の大勝とかはる。

角座

昭和座といふもの出来る、役者は無論新派、誰が誰やら解らず、中に二代目高田實といふのが出来る。

浪花座

猿之助等春秋座をひきいて來る『吾輩は猫である』を演じ猿が猫をやつたと大好評。

辨天座

文樂一座津太夫艶ものを語る玉の如き聲に大向ふビックリす。

二月

中座

左州次、鷹治郎の一座に加はる左團次の丸橋鷹の伊豆守にて大好評。この時齋入の追善劇をもやつて右團治大いに



「小山田庄左衛門」は作そのものが良くできてゐたが、それよりも壽三郎の庄左衛門は、他のどの後者が演るよりも良い庄左衛門であつた。作の性根をしつかりつかみ、そして庄左衛門の酒に描はれて義を失ふ惱みを十二分に出してゐた。今年中の收獲の一として残るに足るべきものであつた。

我童は一月の中座で切の「嬋山姥」を出してゐる。

これが又大變評判の良い出出榮で、あの難役をスラ／＼と演つてのけ、少しの危氣もなく、極り極りの極りも良く、後浪花座で演つた「彦山」の「吉岡邸出立」の場のお園と共に、我童の本領を發輝したのもとして頼もしがられた傑作であつた。

古い狂言や型物などになると、演る科白には、そつがなく、振りも型も一通りではあるが、たゞ教へられた通り、習つた通り、手を運んでやつてゐる、といふだけで、そこに熱と工夫とが認め難い。



小山田庄左衛門の舞臺面

由來我童といふ役者は、演ることに熱がない。無論自身も演ることにすら熱がないのだから人の演る時はそとつききかけを渡さねばならぬやうな時でも、一向平氣な顔をして、何處が風を吹くといふやうにケロンとしてゐる事が度々ある。

角座 活躍す。淡海者をする、新作ものにて好評、また淡海ふしへ戻る。女優はつかりの芝居をやる、東菱子立役になつてあばれる、三好榮子立まはりで怪我をして、いゝ人と休養す。不得き文樂一座古頼の酒屋でもつて行く。

中座 三 月

鷹上京の爲め仁左、羽左、歌右來る、桐二葉といふ狂言を書卸す作者は坪内士行子  
都築、野澤とら／＼道頓堀で俠客忠臣藏をやる、一同樂の日本間の忠臣藏で事をこわす。  
相かはらず文樂靜太夫の金閣寺好評々々々々。

中座 四 月

延若奮闘劇をやる十二役早がはりに見物ビッグクリする。  
鷹は東海道をうつ爲め五郎の一座蝶六中心の一幕出來頗る好評。  
伊井峯峰忠臣藏の連鎖劇をやる頗る珍

角座 活躍す。淡海者をする、新作ものにて好評、また淡海ふしへ戻る。女優はつかりの芝居をやる、東菱子立役になつてあばれる、三好榮子立まはりで怪我をして、いゝ人と休養す。不得き文樂一座古頼の酒屋でもつて行く。

鷹上京の爲め仁左、羽左、歌右來る、桐二葉といふ狂言を書卸す作者は坪内士行子  
都築、野澤とら／＼道頓堀で俠客忠臣藏をやる、一同樂の日本間の忠臣藏で事をこわす。  
相かはらず文樂靜太夫の金閣寺好評々々々々。

これが非常に反感をそよるのである。私が我童をあまり好かないのもそらいつたところからであろうと思ふ。

◇

ところが我童が本當に好い藝を持つてあるといふことは認めないでゐられない。

ものによつては福助魁車よりも彼の藝は上であると私は考へる。

それには習得した藝の力もあるが、彼自身の持つ本質にも負ふ。雀右衛門亡きあとの歌舞伎の女形では、まづ我童であらうと思へるのである。

◇

この正月興行の「山姥」などは十分に現代の立女形としての風格と藝とを見せた。

壽三郎はもとボンクラ役者の一人だつたのである。それが東京に修業して歸つて以來、殊に一昨年猿之助と共に演の「天一坊」の伊賀之亮以來、彼はメキメキと腕をあげて來た。ちよつと左衛門の風格がある。

◇

然るにこの二人は多く不遇である。これは鷹治郎偏重の大坂劇壇としては、彼よりも先輩の人々を出し抜いて、彼ら中心のものを一つでも中座に出すといふ風には行きかねる事情もあるのだから、ともかくも不遇である。

これが我童の熱をさます第一原因であらうと私は考へる。もし我童が自ら中心の狂言を中座などで出すとしたならば、きつと「山姥」以上の傑作を産むであらう。壽三郎も亦然りであらう。

◇

が、ともかくこの二人こそは、長三郎と共に橋三郎、霞仙、成太郎、ひとし、政治郎等の上に立つて、或ひは導き役として現代の大坂劇壇を負はねばならぬ人である。

辨天座

相かはらずく

五月

中座

松竹樂劇部一座にて舊劇を演ず藤間君江のおかき、香椎の平右衛門など評判よろし、飛鳥下ギマギするせりふちつとも聞こえず。

浪花座

梅島昇もまけん氣になつて舊劇を演ず梅島の松王東の千代などおもしろしおもしろし。

角座

新潮劇上、この芝居いよ／＼劍劇に逆戻つて小道具からあんまり刀がこわれると千圓ぼつきをとられる。

浪花座

澤正來る、いつちもとへ戻つて月形半平太評判々々。

中座

吉右衛門、菊五郎の合同劇めつたむしよに見物くる、しまひに七月まで打越す事にきめる狂言のうち、菊五の身替坐禪、二人の四千兩など殊に評判よろし。

角座

岡田嘉子出演ニウセイ派の道成寺を踊るヒョコイガンで鐘がねをつゝあつた爲め戀の手習の時パタンと落ちる。

いかに現在の舞臺が不遇であるろうとも、それに不平を發せず、忠實に熱心に工夫を積み  
そして來るべき自分達の日に備へねばならぬといふ心がけが必要であるろうと思ふ。

徒らに氣をくさらせたり、その日のがれの舞臺を送ることは、大成する所以でない。一  
方仕打の方でもなるべく大ものをやらせて、貫目をつける事に氣をかけてほしい。共に將  
來のための對策である。

私は一日も早く我童が心から好きになる日の來るのを待つものである。そして壽三郎と  
共に立派な舞臺を見せてくれて亡びる／＼といふ大阪劇壇に、一つの曙光を與へて呉れる  
事を切望する。

『正月劇界の回顧』といふ編輯者の注文だこんなことになつたのも、二人に深く期待すれ  
ばこそだ。

## 鷹治郎至上主義

— 二 月 —

富田泰彦

——『私達の歌舞伎』の幻想は、年一年と壞れて行く、じつと眞綿にでも包んで置かう  
か、それともに、しみ／＼とした戀心のやうに抱きしめて遣りたいほどの苛立しさ、日繰  
曆が一枚一枚に剝がれて行く、それだけ私達の心身ともに老ひ朽ちて行く、一體に回顧て  
などは感傷的にならざるを得ない。

——取りわけ二月は、わびしい。實際にうら淋しい。だが『年増女の實意』——まアさ  
う云つた風な感じもする月だ。

白梅紅梅の釣り枝に、春芝居の繪看板が、華やかな色彩で微笑んでゐる。何んとなく明

七 月

中座

打込し。

浪花座

松旭齋天勝といふ娘いよ／＼若返つて  
肩入のあるきもので日本師をやる見物

角座

はけむにまかれる。

角座

喜多村縁郎 鬨劇をやつたが一向奮闘  
らしくなく、ジメ／＼と泣かすので却  
つて大入。

八 月

中座

五郎又候あらはれる、朝日新聞のつゞ  
きもので通し狂言をやつて評判よろし

角座

木下八百子どこからかあらはれ辨天小  
僧をやる。

浪花座

うかれぶし大會尤改めてうかれぶ  
しと名乗る。

松竹座

この月奥の踊をやる長三郎出て男道成  
寺を演ず。

九 月

中座

扇雀の一座お父さんのものばつかりや  
る中でやつぱり紙治がよし。

浪花座

おそまきながら右團治水藝を演ず。

角座

新派鯉つかみといふのをやる。

い情調に溶けあつてゐる。これが二月興行と来ると、芝居國の人々の気分も、妙にテレたやうに落ちて来る。それだけに、いつも二月の芝居には案外大きな收穫がある。

今年どつてその通りだ。先づ道頓堀各座の陣容を擧げて見よう。

中座は、鷹治郎一座に、東京から中車、宗十郎が加入した。一番目は右田寅彦作「紀國文左大盡舞」中幕「檀特山」淨瑠璃「新荷雪間の市川」二番目「時雨の炬燵」淨瑠璃「大津繪」

浪花座は澤田正二郎一座トルストイ原作の「復活」、額田六福作「相馬大作」——それから後は河合、小織一派の新派で、眞山青果作「浅草寺境内」小酒井不木作「紅蜘蛛奇譚」

音羽六藏作「馬賊藝者」

辨天座は前「伽羅先代萩」中「平假名盛衰記」切「檀浦兜軍記」、角座は片岡長太夫、嵐佳笑と云つた時代離れのしたメンバー。

——追憶は人生の花だと云ふが苦しい。バカカーの美學では「吾々は追憶に於て過去の生活の會つて吾々に取つて稀有の感動的意味を持つたところのある事件の上に吾々の注意を振り返らせる。と無難作に片付けてゐるが、その稀有の感動と云ふものは、さうザラにある筈がない。だがこゝでは議論は止そう。

先づ——「私達の歌舞伎」の幻想の扉を開かう、彼の紺青の大海原を背景とした須磨の浦の舞臺に、古い形容だが、全く錦繪の立體化されたやうな鷹治郎氏の敦盛、中車氏の熊谷が頭の中に浮かんで来る。玉織姫は宗十郎氏だつたが、これは誰だつて差支がないほどに稀薄な感動も起らない。しかしこの熊谷と敦盛だけは、凝と此儘にアルコール漬にでもして保存して置きたかつた。

藝術家が私達に與へる處の幻想!! それはいろ／＼な法則や形態があらう、けれども「美の極致」と云つたときに、何れをも制御する基調である。さうしてより強調なものが感激性に富んでゐるなどと野暮したいとは云はずとも、この「城特山」を見落したものは、どの位不幸な人か知れない。

十月

中座

鷹大一座大阪中の役者をあつめ長三郎中村扇右衛門と改名す扇は扇屋の扇といふ事なり。

角座

新派もまげぬ氣になり新派大々合同をやつて不如歸をやる。

辨天座

役名一切をとられて籠寅再び道頓堀にあらはる。

十一月

中座

鷹治郎等は後見として若手ばつかりの芝居が出来る 伎藝座の氣のきいたやうなものなりこの芝居縁者すべて仕出しに出る。

浪花座

花柳、藤村小太夫の一座來るこの芝居に瀬川英一舞臺にあらはれ、大分藝者にもてる。

角座

新派喜劇團といふのが出來、武田正憲毎日舞臺に怒鳴る。

十二月

浪花座

もちづき芝居久方にて手打をやる 延若のおそめ我童の久作、大吉のお光、壽三郎の久松などとしてつもない役割發表

「私達の歌舞伎」は、寧ろ端的に「私達の鷹治郎」と云ひ變る方が手取り早いほどに、私は此の名優と同時代に生まれ合はせた幸福を、常に沁々感じてゐる。従つて「私達の歌舞伎は鷹治郎を失ふては、その生彩も、魅惑も、感激も、全部ケシ飛ばして終ふ。

二月の「壇特山」の價値も、全く鷹治郎氏の敦盛を透しての中車氏の熊谷であればこそと云ふ結論になる。二番目の「時雨の炬燵」だつて、さうだ。鷹治郎氏を忘れて、此狂言の滋味が何處から求められる。

「生命は短し、藝術は長し」——私達の追憶は、今、目前に或感傷的な豫感に襲はれつゝある。既にこの「壇特山」はいつの世に「現伎」の史的資料を豊富になし得るものではない。

私は何んだか脱線したのではないかと、こゝまで書き來つて反省して見た。が、し



一面臺舞(山特櫃)記軍嫩谷一

「私達の歌舞」實のものとして甦生するだらうか、恐らくはこゝ數年間には出来ない。十一月の中座の「太十」だつてさうだ幸ひに顔見世へは持ち出されたが、決して中座の「太十」ではあり得ない。……その優劣を云ふのではない恐らく是れとても此機會に見落しては「私達の歌舞

角座 新派の伎藝座といふもの出來る一向評判よろしくなし。  
中座 曾我の家的一座寺子屋を眞面目にやる五郎の松王首桶をひくりかへす。



### 赤紐の前垂

もとたらう

父親は、代官所へ呼び出されて留守。

「愛に愛もつ、鮎のすし」  
と、語つてゐる。  
こゝは大和の下市村。櫻にはまだ早き如月の

かし頭腦にはもう何も残つてゐない。二月の回顧を求められながら、澤田氏の相馬大作も「復活」のネフリッドフもさう印象づけられてゐない。澤田氏の本領としては、もつと可いものがあつた筈だからだ。

斯うして見ると、私の云はんとする處は即ち「私達の歌舞伎」を愛好する心の現はれとして、結局尾治郎至上主義と云ふ標目を擱まへて、過去の美しい幻想を、もう一度光明に現實の舞臺に示現して貰ふとにある。——だがホヤ／＼の新作物だけは、尾治郎至上主義の項目から撤回さすとも、序いでに附言して置く。(二、十一、二〇)

# 江戸製の竹本劇と 大口寮の清元情調

— 三 月 —

吉 本 寛 汀

往にし彌生の道頓堀へ徐ろに首を回らせといふ注文に「思ひ出せば、おゝそれよ」シヤランと下座を入れて大時代に勿體ぶる程の感想は持合せてゐない。

先づこの月では中座の東西大歌舞伎が中心だつた、何東京歌舞伎だらうツて？ 霞仙が一枚介在してゐるからナア、大體この竹本劇の本場へ東京くんだりから先代萩（これは江戸製だが）を持ち込むなどは些か不躰千萬だ、然し中車の仁木にしろ、梅幸の政岡にしろ關西劇壇の手薄な處を衝いてゐるので、大きな聲で喧嘩も買へぬ。

梅幸の政岡は少々仇つぼかつたが、貫祿もあり仕事も出来る點では首肯せねばならなかつた、羽左の八汐は尖つた顔に隠険なる物を現はしてゐたが、臺辭に憎しみがなくて失敗、勝元も飛んだ遠山の金はんだつた、手強い彈正を糺彈するには餘韻翳々の名調子すぎで、ピシ／＼と盤み込めなかつた。

たそがれ時。

梅の蕾の、ほころび初めた此家のひとり娘がふり袖の上から肩襷をかけて、華美な飛白に縮緬の赤紐をつけた前垂がけの媚めかしい姿の野みち、吐道の若草を踏みわけて、明き箱を集めに行つた戀しい下モ男の歸へりの遅いのを女房氣取りで、ちよいと妬いてみる。

袖無しを着た、水際立つた、優き男と、鄙には稀な、下げ髪の内侍とが。

「須磨や屋島のいくさをあんじ……」  
「假の契りはむすべども……」  
なんて、愚痴やら言ひ譯やら。

屏風の中で聴耳立てゝゐた娘はワツと泣きだした。

「父もきこえぬ母さまも、夢にも知らして下さつたら、假令、焦がれて死すればとて、雲井に近きおん方へ、壽計屋の娘が惚れられうか……」  
行燈のかけから、錦繪のやうな一對の夫婦を

はづかしさうに覗く拍子に、目かくしに掛けた赤紐の前垂がスラ／＼と下り落ちる。

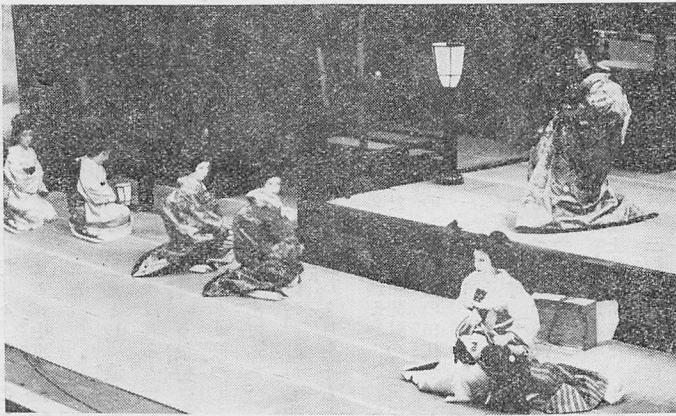
娘は眞ッ赤になつて三尺も飛び退き、大きな振袖で自分の胸と肩を叩き、前垂の端を咥へ手足を慄はしり歎泣き。



結局橋尾の老人の仁木がピリツと来た、ニツキだからピリツと来たのかも知れぬ、床下の花道は濛い行き方で眉間の血も拭はず、後へも寄らない、肩でセ、ラ笑ふだけであつた。た良かつたのは双燈で見得や落入りに堅靱な實悪味を露骨に現はした、オット忘れてゐたが、三升の鐵之助の玄人離れを終りに書添へて置く。

中幕は例の「土蜘蛛」だつた、寺寺の家の藝で今更議論もへつたけれどもない、花道の僧形の出——前がぐみになつた姿勢と天稟の妖味の見へた相貌とで見物の膽を冷して、出鼻に勝負をつけて了つた。悪い印象としては中車の保昌が自粉の相場の狂ふほど塗つたが奇麗にならず、老女の厚面喰つた。

東京の土産には駄阿彌の「直侍」ヤレ待つてました、羽左、梅幸の折紙付、小言を云



先代萩御殿の舞臺面

化粧然として冬の月を見るやうに土蜘蛛より反つて凄かつた、それから運歩に身體が左右に搖れて本行的規矩を破壊した親の光で亡き泰次郎が、猿之助の當てたといふ間狂言をやつた、喜劇斗式の軽い處を御覽に入れたが、越後追分や桂川の按摩の唄のモザイクで

いちらしい姿、美しい顔、舌纏れた色氣のある聲。  
今から八年前の中座の千本櫻の印象。  
その、麗な、中村雀右衛門の姿はモウとこしへに観ることができぬ。

## 讀者文藝欄

### 俳句 煤 蓑 選

(大根)

大根を引きたる窪に風寒し  
石硯もごぼりと堀れて大根引  
大根を積み重ねたる畦ぬくし  
大根を洗ふ野溝は細りつゝ  
母子して故郷の噺や大根焚き  
大根の馳走になるや夜の雪  
大根をつるすや軒の夕日影  
大根をきぎむ夜寒き臺所  
夕闇を一人大根引きにけり  
大根に焚火の灰のふりかゝり  
大根を積みたる車霜白き

汀水  
草蛙  
よね女  
同好  
古好  
同好  
淡午  
同午  
初汐  
同汐

ふのは茶糰に餅の皮だ、スツキリしたデカダンが泥臭い安手に何等のこだわりもなく變化する處、江戸ッ子の遊人を活寫してゐる。

蕎麥屋の勝火——大口の察から捕手に追はれる格好等々、梅幸の三千歳も色つばい、清元のリズムに濡れかゝつて見物に變な謀叛氣を起させる、中車の金子市も堅貨、たゞ賣物の延壽大夫の嬌聲に些か衰へがあつて期待を裏切られた。

いつ迄も中座で途惑ふて日が暮れかゝつた、跡は駈足として浪花座は水谷八重子が中心の新派劇、女ならではである、中村吉藏氏の「獅子に喰はれる女」が甘い狂言で喜ばれた下戸が多いと見へるわい、小谷のジャグラー花子が男を怖れる氣持は本當に處女の無邪氣さから起る嫌思の情で、爛れた女の反撥性でないのがピツタリ欲つてゐた、鞭を投げ捨てゝの號泣は熱演だつた、梅島の團長も藝人のタイプがよく出てゐた。

八重子の「娘道成寺」賣物の材料が澤山あることは偉い、しかも柳咲子のやうに人絹ぢやないから頼母しいが、恨みくゞての中心的表情で鐘から目をそらしてゐたのは悪いと思つた。

『炎の空』ではわれ等の樂屋をサラケ出されたやうな新聞社の編輯局のスケツチが面白かつたのと、モガの壺子が東では箴らなかつたのと、大矢の田伏がいゝ味を見せたことが目に残つてゐる。

角座の淡海では呼物の「濱の兄弟」で、メンタルテストをされる可き兄が、弟にそれを行ふ矛盾さにチヨツと苦笑された、反つて「兄弟ごっこ」に快笑がある、中村綾子は喜劇に於ける女優の存在を認めさせた。

辨天座の文樂では大隅が改名披露で愚作の辨慶上使を語つた、下手な按摩のやうに力ばかりはいつて急所がそれたのを、新女房の道八の三絃に助けて貰ふ、源と叶と二人して勸助住家をメチャ〜にした。

津太夫は先の友次郎と何年振にか逢房りし、文五郎が八重垣姫の亂れで素敵な藝を見せた、お七の半鐘場も忘れ難い、榮三の、成胸屋を勢揃させる治兵衛にも感心した。

(雜吟)

木枯に顔うつぶせて走れる子  
(宇治)木枯に扇の芝も枯れにけり  
枯れ草にころびて遊ぶ里の犬  
植木屋に話しかけたる小春かな  
賑やかな小春日和や小鳥店  
初冬や道頓堀の朝晴るゝ  
菊枯れて門は小春の日ざしなり  
ひとつ來て障子に動く冬の蠅  
千物の風に片よる落葉かな  
冬の日や眼物板を氣づかひつ  
朝霜や下駄の齒につく土を蹴る  
切り張りの障子小暗き冬ひと日  
冬の雲刈田に動く人の影

賞

落葉して櫻梢や十日月

次の題『時雨、年の暮』

情 歌 南北 選

(芝居茶屋)

棧敷裏から目顔で呼んで芝居茶屋まで戻る仲  
兵の助

大體こんな事しか頭惱の小抽斗に残つてゐない、これ以上叩いても埃ぐらゐしか出なからう。

# 仁左衛門の涙

— 四 月 —

## 緒 河 秀 二

十一代目片岡仁左衛門、芝居ツ氣を離れて本當に泣いてゐた。

聲がうるんだ、見物席に向つてひろげた両手の指先がかすかにふるえた、そしてやがてその両手を舞臺についた時、ポロ／＼と熱い涙が途鼻の先の赤毛せんににじんだ。彼は、猫の様にかみしもの香中を丸くさせてふところから手拭を徐かに取出すと、臉をソツとぬぐふのであつた。と、これはまた、心中天網島の紙屋治兵衛のセリフではないが「目から流れる涙が耳からでも……の形よろしく、鼻から涙がアラ下り！

あわてゝこいつを手拭におさめた仁左衛門、またしても臉の裏から湧く涙をこすり取るとてもあわたゞしい一瞬であつた。

ところ浪花座、十代目片岡仁左衛門の追善興行の晴れの口上幕はかうして仁左衛門の涙によつて春のセンチメンタリズムを助成したのである。

×

一座の顔ぶれはその目と鼻から涙を流した仁左衛門千代之助親子に我童始め松島家一門延若、壽三郎、巖笑、市藏、蕙女、卯三郎に死んだ雀右衛門、狂言は一番目「毛谷村」新作「小楠公」中幕「西郷とぶた姫」二番目「都一中」大切「大磯小磯」。

十代目仁左は今の仁左の兄である、我童に取つては父である。

芝居戻りのお茶屋を出れば二人包んだ臘月 同

芝居茶屋出て相合傘にうれしきつむ春の雪 舟 三

芝居茶屋まで喚かけて船へテラ／＼雪が降る 告 天子

芝居かこつけ逢ふ前茶屋で鳴つてくれるな果太 眞の丸

鼓 無理を首尾して呼び出す電話幕の間を芝居茶屋 伴 助

主は二十四五わたしは甘鳴流さしく芝居茶屋 浮 閑

はねの首尾をばたのみの電話そつと耳打つ芝居 逸 朗

茶屋 胸に響いたあの打出しが芝居茶屋にもはづがし 朝 坊

い おぼる横町おぼろの二人芝居茶屋さし春の雨 不 念

人 無理な首尾して来た芝居茶屋憎くや小旗 朝 坊

の窓の前 地 告 天子

の窓の前 地 告 天子

追善狂言は「小楠公」我童の楠正行が吉野山如意輪堂の扉に彼の「かへらじとかねて思へば」の歌を矢じりで彫りつけていよく後醍醐帝の御輪旨を仰いでいよく足利討滅の兵を擧げる史實を一幕に仕組んで、正行の弟正儀が初陣を乞ひにわざ／＼河内から山へのぼつてくるのを、正行が嘗て櫻井の驛で亡父正成に訓戒された如くこれを膝近く引よせて色んな述べ懐ゆるしくあるといふ仕組、この仕組には大いに曰く因縁が附いてゐた様に當時傳へられた。



片岡仁左衛門の口上

その舞臺には仁左衛門が四條中納言隆資に扮して帝の御輪旨を傳へに来る、そのお供の公卿の一人に若くして死んだ片岡愛之助が赤い直衣を着て出てゐた事が目に残つてゐる。あの愛之助は全く惜しい事をした、名女形雀右衛門は三千歳姫

送る前茶屋相合傘にチラと覗いた繪看板  
 酔者

待てば姿もそれかと見える川と隔てた芝  
 居茶屋  
 (世話物)

葉太郎  
 主のつらねはもう聞あいたあとは涙の切の幕  
 逸郎

眞の丸  
 胸にヒシ／＼あの世話物に主の浮氣がそのまん  
 ま

無花  
 主は市村私しは尾上意氣な二重のさしむかひ  
 朝坊

不念  
 近松さんならかうした仲をもつと上手なうらみ  
 ごと

不念  
 宵の御祝もつらねでは響主とうれしい新世帯  
 伴助

人  
 意氣な端うたであいた幕もチヨボの涙でしめ  
 られぬ

逸郎  
 氣どつて二人は世話場をはりま首尾も上

人  
 氣どつて二人は世話場をはりま首尾も上

院長兵衛は水野十郎左衛門邸内の風呂場で殺された、勿論それは「極め附帳隨長兵衛」の舞臺で承知してゐる。何だ おかしな方向に話が外れて来たぞ！ 何を云つてゐるんだらう……、さう／＼死んだ愛之助が……、いや違ふ、十代目仁左衛門の追善興行の話だつたツケ。

さて其の小楠公の舞臺だが、浪花座の玄關大ホールには十代目と子供の我童の櫻井驛の寫眞が掲げてあつた。

一番目の「梅谷村」は延若の六助、我童のお圓、巖笑の京極内匠の役々、その次の「小楠公」との間に十代目の追善口上幕がはさまれたのである。元來口上幕といふものは、非常にお芝居氣分のする場面で、赤毛疵を敷き詰めた上にズラリと柿色もしくは淺黄のかみしも姿で居並び、本來なれば上下に控へた頭取が「トザイ、トザイ」といふ聲に一同のお役者衆が満場に向つてお辭儀をする。それから口を切り出すのがその芝居の座頭格、「不辨舌なる口上な以て此處もと皆々様のお耳を汚します様な次第にござります……」……と丁寧な言葉を使はねばこれに氣分が乗つて来ない。そも／＼口上には色々ある。先づ改名披露、襲名披露、名題披露などがお目出度い方に屬して、これにはこやかに勤め上げる事、さて追善口上となると何となく陰氣で濕つぽい。

十代目のその口上の話だが、仁左衛門と我童が中央に千代之助、ひとし、義直、愛之助、我久之助などが前列に並び、後方には片岡一門がズラリと揃ふ。美觀である。美觀といへば確かこの月は松い座に「春のおどり」があつた。松いカクゲキ部總出演に掛るけんらん目をあざむくばかりのレグユーであつたことを記憶する。美觀の語はそれだけけてその口上場で仁左が泣いた。殊更に彼が泣いてゐたといふことには初日以来の見物の心をいやが上にこそよつた。勿論追善してゐる十代目の遺子である所の我童も泣いてゐたには違ひない。

×

々吉衛門  
地  
正の助  
榎敷に坐つた二人にあてた幕は延壽の戀の唄  
天  
告天子

まくにならないあの世話物にそつと目を  
ふく榎敷裏

次の題「初芝居、盃」

川柳 蹄二選

(太夫、所作事)

且那もう所作事だけは見ぬ氣なり  
所作舞臺素足の音が冴えかへり  
向きかはる太夫ふうわり風を出し  
水溜り太夫は迂回して通り  
道中の太夫に赤が多すぎる  
うちかけを脱げば太夫の細い腰  
立上る太夫にお客蔭になり  
所作事に裾をからけてお茶子待ち  
所作事は一と息入れてあつち向き  
所作事に虚空を切つて草臥れる  
引ずつて歩いて太夫おしんど  
怒らせる度に太夫の名があがり

心 醉  
件 内  
正 夫  
鶏 中 堂  
同  
東 太 郎  
同  
駒 人  
同  
盃 人  
同  
天 京

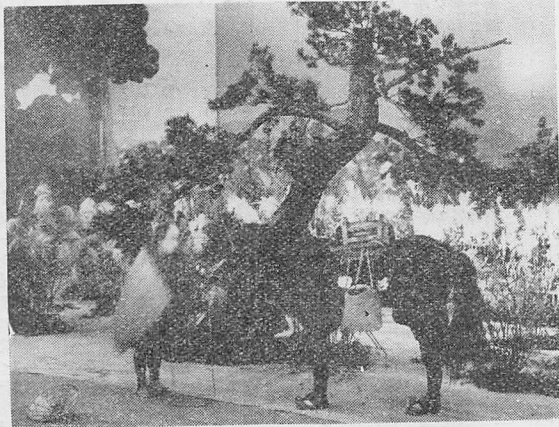




此月中での一番の収穫は松竹座の築地劇場の「休みの日」あの抒情的な気分、春景、汐見のトリュシヤル、丸山のムートケ等、未だに頭に残つてゐます、此月は、松竹が新劇に貢献した月で、浪花座の井上正夫の「将門」等は、可成危険な興行を、上演もしました、「将門」は、井上の熱で見せた芝居であつたが、舞臺に現れた井上の苦衷は、氣の毒な程自分の立場に迷つて、

それがどうやら、ついでに「反逆の大罪」を構成した将門と、どこやらに、共鳴點をみつけたが、井上は、この芝居を終ると同時に、ひどい勞れが出るだらふと思つた事が果して實現されました、氣の毒な井上さんです。

中座は鷹治郎一座に雀右衛門と延若が加つて「藤原経濟鑑」時期がモラ明けだけに、キワ物化したのは残念でした、この劇では、通ふのは可笑しいといふ新解釋でしたが、甚だ遺憾に思いました。切に「十種香」がありました、時間の經濟と、雀右衛門の濡衣の足許の爲めに、御殿が平舞臺になつてゐました、八重垣姫が座つてゐた場所へ、原小文治が、土足で石投げを見せる！これは困りました、



藤原経濟鑑の舞臺面

し狂言が珍らかつたので、延若の小平が、ゆすりの場の引込で齊入以來の型となつてゐる輕子唄を、わざとはぶきました、この唄は、一時流行唄となつた程の唄ですが、延若は單に、輕子全部が表へ出てゐるに尙藏の中で唄

蠟燭が太夫の立つに消えかゝりうちかけの巾へ糸が草臥れる道中の太夫後ろも見たいなり

立上る太夫に二三人動き

地

お前等と言ふ顔で行く八文字

天

所作事のさらば踊つて見よと

軸

町人へ松の位の裾さばき所作事にやけに踊つた役不足

次の題「番付、袖振」

讀者文藝應募規定

- ◎原稿締切（十二月十七日）
- ◎用紙官製はがきに限りませす。
- ◎入選者には粗賞を進呈いたします。
- ◎應募原稿は左記へお送り下さい。

大阪市南區久左衛門町八  
松竹合名社内  
道頓堀編輯部宛

同 伴内  
飛砂三

天 京

盃 人

昌 太

奥庭では、新趣向の電氣の狐火が失敗した様です。私が劇評の中へ、平舞臺の御殿を笑つて書きましたので、雀右衛門が會見を申し込ました、遂ふと、「貴君は平舞臺を使つたのは、河内家の注文の様に書かれましたが、私の足が弱い爲めで、河内家さんに氣の毒です」と、辯明がありました、今から思ふと、日本一の女形であつた、雀右衛門さんと言葉のいゝ納めになつたのです。

言葉のかけまいといふと、愛之助さんが四月の末日、巡業に出る一日前に「今度の旅は、ウンと珍談を製造して、材料を送るよ」と、そのまゝ旅に出たのですが、材料も材料愛之助の死といふ、大きな材料を製造したのです、もしも、あの世との通信が出来るならば、きつと、どうだい、材料だつたらう」と、得意がつてゐたかも知れません。

文樂では、貴鳳さんが、玄人になりました、靜子が大隅になつたのも此月です、津太夫の「寺子屋」の松王が慈愛には、シミ〜と泣かされました。大隅の「道明寺」は、道八に弾きまくられた様です。

角座に淡海がゐました、喜劇といふだけに、何の印象も残らなかつたのです。道頓堀の印象に、京の事を書くのは、異例かも知れませんが、南座に、吉右衛門が來ました「伊賀越の」沼津が出たのですが、九藏の幸兵衛が悪かつた事が残ります。但し吉の政右衛門の「まことに先生や」煙草切りで床のチンを、まつすぐに受けて泣落す件「お谷ヤイ」の沈痛な呼びが無類でした、吉はこの外に「遠眼鏡」と「本望」それに「河内山」特に珍らしかつたのは「青柳碩」の蛙飛び等を出してゐました。

## 六月劇壇の回顧

引つ張り出した………下積みの印象

鎌谷來水

## 顔見世川柳座句會

於・食 滿 邸

主催・雜誌『道頓堀』

川柳座第四回公演は、南北座柿貴落狂言「太功記十段目」讀込みと定り、十一月十五日初日午後五時開演にて賑々しく蓋を明けた。當日集合せる花形役者を着到順に記せば、蹄二、也郎、小太郎、萬よし、伴内、幸延、鴈之助、繁二、雪郎、線天、波郎、紋太、竹人、三巴、舟人、蝶二、三平、塊人、夢路、萍三、水府、編輯部よりは、南蘇、桂三、克三、鐵也、それに座主南北。

序 幕 五 選

姐はんの遅い隙に序幕あき 綠 天  
 序幕見らうちは氣になる家のこと 同  
 二人分占めて序幕は見てしまひ 同  
 序幕だけ割愛をして評に入り 同  
 いま開いた序幕へ女でれくさし 同  
 開きますとながひ序幕のベルが鳴り 同 繁 二

回顧といふのは飾ひ残つた印象を寄せ集めるとの意味だらうが、相憎物覺への悪い自分では飾の底が破れて肝腎のピカ／＼光つてゐる砂金まで逸してゐるか解らない、そこで新開の緩込みを引張り出して一ペン描いた批評を讀み返す、これでは何のことはない二度の勤めをさせるやうなもので折角頼まれた甲斐が無いことになるから、茲に記憶を新らしくして責任を果すとにする、六月の劇壇では浪花座の澤正が眞山青果氏の『桃中軒雲右衛門』でセンセーションを起した、相も變らず精緻なペンで變態的人間描寫、然し見た眼は題名程の興味はなかつたし、前作の『富岡先生』の方が評判いい、それは狷介が生う辛持な皮肉を痛快がられたからだ、今度は祭文上りの雲先生に難かしい哲學的煩悶を抱かせるので飛んだ荷厄介となり、時々露骨に野人的態度を發揮させると其處に妙なホトトンを起した妻の死に對しても『死ぬまで藝の人として唯の女としたくなかつた』と怪つ體な感情を算盤で弾き出すので、雲入道冥途から『わつちや無學だからそんな法律の解釋のやうな難かしい理窟の綾は知りませんや、眞山先生頼みますぜ』と揶揄つたい顔をしたかと思ふと『己れは常軌を逸してゐたとの事だ、そこが文壇の大家の乗る處となつたんだナア』とニンマリ笑ひ、最後に『澤田といふ男は器用な役者だ己れの聲や節をソツクリ眞似てゐる』と眞面目に首を振つた……か仕うか、左に右澤田の個性と藝には陽性が保たれて、井上正夫のやうに『深刻の憂鬱』に陥らないのが何よりのツケ目だ、中井の倉田もよかつた、根岸の松月老人も電話口での表情の旨さが未だハツキリと眼底に残つてゐる、實際を云へば雲劇より『時に山形屋』の方が一般受けしたやうである、そこで澤田も大家連に『物は相敵だが』と精々大衆的脚本を求めのが徳だ、中座へは伊井、河合に帝劇女優といふ判じ物のやうな新派劇、判じ物と云へば小酒井博士の『龍門黨異聞』といふスカレットピンパネートル式の探偵劇を見せる、女を密閉した箱を海中で摘りかへるのがトリツクだが、氣の走つた見物はそれを臭いと呪むのでネタが破れて了ふ、殊に摘かへる時に投込んだ箱がポカンと浮上る筈だと云へば、傍らの客『其處が芝居だ』と悟つた様なことを言ふ『時の氏神』の澤田の演出の時原作者の菊池寛氏をモデルに使つたのと、伊井が『破文社風』と大毎、

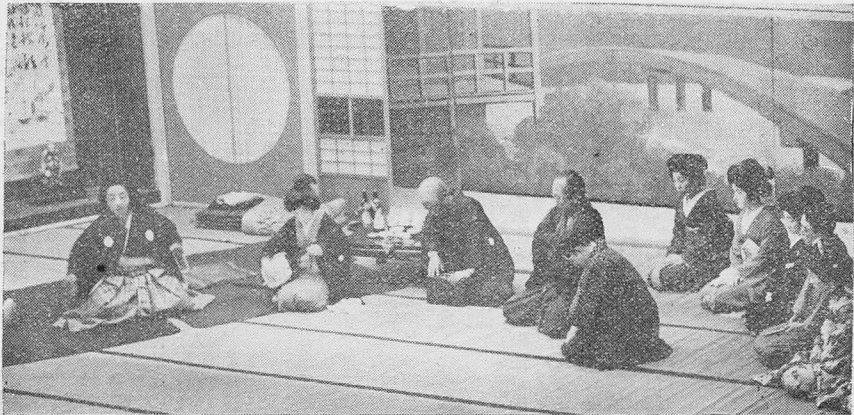
序幕から出ては氣樂に殺される  
序幕見る廣さに火鉢よく起り  
連れ待てばかり序幕は濟んぢまひ  
序幕の終りに柵へ一人ふえ  
番付を序幕にみんな讀んじまい  
役者皆小さうに見えて序幕あき  
二三人話す序幕の眠たさう  
序幕抜いて初日あはてた幕を開け  
開幕にエー番附の聲がやみ  
ふら／＼と序幕へかゝる懷手  
序幕もうなかばの柵へ手をひかれ  
神妙に八千代は序幕から座り  
大向ふ序幕の棧敷叱りつけ  
どの邊の雪か序幕にこぼれて來  
食堂は序幕の開いた模様見せ  
慰安會序幕があくと手を叩き  
序の幕に棧敷手荒く開けられる  
鶴ヶ岡お茶子の聲も聞こへて來  
寫眞班だけが目に立つ序まくなり  
序幕もう感心をするかぶりつき  
序まくだけで歸へすに惜しい女形

同 小太郎  
同 舟人  
同 波郎  
同 内  
同 紋太  
同 蝶二  
同 萬よし  
同 也郎  
同 竹人  
同 竹人  
同 南  
同 北  
同 南  
同 北

十段目  
英雄も三助に成る十段目  
光秀のきさうな音になつてくる  
初菊はツツカリ軽く持ちかける

蹄二選  
雁之助  
南  
北  
竹人

高原クンから穿つた評を頂戴した扮装振に二優の行き方の相違がハッキリ解る、一等旨かつたのは村田嘉久子の芳子で單純な氣持に支配される若い女性になつてゐた『都鳥原』は河合の演物だつたが、例に依つて何もかも一人で引受けたといふ芝居、古い京都情調と河合式の型に嵌つた内容は恰度箱入の八ッ橋を貰つたやうな氣がする總括して面白かつたのは「最後の證據で」伊井の中年紳士が生地で行つて成功した。中座の後半月は五郎劇、僅かに「明け行く空」が新柄で跡は古手計りの陳列「明け行く空」はデヨン、チチエスター



桃中軒雲右衛門の舞臺面

の「サンタクロース」の翻案で、オチだけが變つてゐるが、そのオチが常套の背負投に見物は些が不服、然し五郎の演出が比較的濃厚でなかつたのは、氣持だつた鷹と燕のやうに五郎劇と交代して去つた角座の淡海では、ソコ抜けた舊作の「初恋」のみが喜ばれて、あとは苦作と愚作計り、淡海の後座の新聲劇では洞宮

道具方式、智と同じところからきぬき足の終りに近く見つけられ心臓の強さ、阜月のまだ死ななず掛取へ隔つ一間に亭主ある光秀は理屈に負けぬ聲を出し二三日蛙のなかぬ、尼ヶ崎久吉はいつも着替を持つて逃げ曲がないなど、洒落れる若旦那盃をせぬが互ひのモダン振りかな書きの繪本餘りに殺し過ぎ双六の一の上りは十段目光秀のワラヂ疊へ跡がつき初菊は日本一の弱い腕光秀は障子に穴がほしいなり十段目斬られるために塗つて出る十段目槍をたよりによく喋り竹槍は矢張りほんのボテ疊十段目がさついたのは黒衣なり

人  
久吉に味喰半分でほつとかれ

地  
光秀の刺したあたりが漏れはじめ

天  
初菊と操ばかりに鳴く蛙

波 舟 人  
萬よし  
小太郎  
紋 太  
みじん  
伴 内  
伴 内  
也 郎  
同 平  
同 路  
同 蝶 二  
同 水 府  
同 三 巴  
緑 天  
みじん

十六時開演十時一終演。『小林佐兵衛』を観たと語り、辨天座の文藝では津太夫の陣屋を素的に面白く聴いたが榮三の熊谷の人物が人間過ぎて嫌だつた、二番槍の功名は源太夫の油屋がして取つた、月末には若手の向上會があつた、鏡が『陣屋』を大きく語つて認められたに反して、つばめの酒屋はマクン過ぎて騒々しく豫期を裏切つた、大體こんなことで六月の道頓堀は好劇家の印象の下積になつて了つた、それを今更回顧だと云つて引續返して檢べるのは随分面倒な話だ。

## 喜劇の七月

西田眞三郎

浪花座が猿之助の喬園劇、中座が例に依つて曾我廼家五郎劇、角座が新盛劇、辨天座では梅島、松本、東等の『人情劇』の旗擧げがあり、道頓堀を離れては松島八千代座に延若扇雀、壽三郎等の歌舞伎劇があり、先づ漫畫の浴衣の賣出しを見るやうな陣容、とは言へ猿之助の研辰、五郎劇の『まぼろし』その他延若の『太十』の珍型光秀等、今また茲に私の沈腐な劇評を繰り返すのは本意ではないが、喜劇を中心としても一度振り返つて見る。感銘程度の深さから行けば、猿之助の研辰は七月ばかりではなく、本年度の大坂劇場のいゝ收獲の一つとしてもいゝ。竹葉兼三氏の脚色の價值、猿之助の演出態度及び興行價值そのいづれの上からも一點の非の打ち所もなかつたやうだ。就中敬意を表したいのは、猿之助の眞面目な演出の態度であつた。研師上りの辰次の性格を隙間もなく掴んで、ちりちりと絞り出して行くやうな熱のあるあの一場々々を見て行くと笑へなくなつて了ふ。殊に大詰の仇討の場へ來ると死に面した人間の生の執着が一寸のがれの醜い追従、甘言などの形をとつて表はれて來る。この間のジタバタしてゐる研辰、それは單に見物の頭をはげせば我が事足れりと爲す喜劇役者の到底入り難い秘境であらう。『小栗栖の長兵衛』に成功し

辨慶

小太郎選

辨慶の嘘はあうんの法にあい

辨慶の聲は襖をはね返り

加茂川の流れの辨慶ひまな晩

何事もない辨慶に月が冴え

うる覺えのとこ辨慶は低く讀み

辨慶の置き忘れたる煙草入

辨慶はてれくさい目に逢ひ通し

辨慶は吐息とともに舌を出し

越路まで來ると辨慶洒落を言ひ

鉢巻を取ると辨慶老けてゐる

喫ひがらを辨慶鐘の上へ置き

人 辨慶の肝に靜慣れて來る

地 肌を脱ぐたびに辨慶ひやかされ

天 痛かつたぞと辨慶は褒められる

三 竹人

巴

### 五郎、蝶六の二人舞臺

### 變つた『風の夜』

新作揃ひの呼物

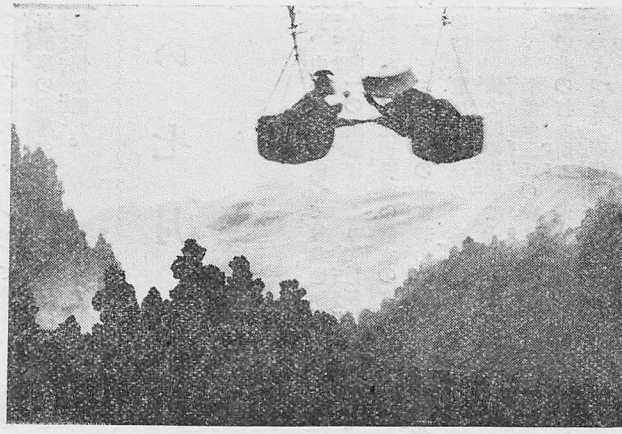
中座師走興行吉例五郎劇の此度の呼物は第二

た猿之助としては何んでもないほどの研辰であつたに違ひないが、素晴らしく面白い芝居であつた。更に猿之助の出し物として「猪八戒」と「治郎吉旅枕」とがあつた。前者は淨瑠璃、長唄、津樂の伴奏で新所作事と銘打たれてゐたやうだが支那劇の模倣とも見られた。後者では猿之助の治郎吉以外源次郎の定十が身の上話のくだりで枯れたいゝ味を出してゐたのが思ひ出される。

中座の五郎劇は「土曜日の夕」『善悪二筋道』『昔氣質』『まぼろし』などで、いづれも舊作揃ひで、狂言に行き詰つた難澁さがまさしく、とうかいはれたが

中でも「ベルス」を十郎在世當時に五郎が書き替へたと云ふ『まぼろし』が初めて見た私には面白かつた。怪奇な容貌を作つた五郎の

が、臺所で破れた乳の鍋が無頼漢に突きつけた寅藏の短銃の音に擬せられたのは悪落ちであつたと今でも思ふ。喜劇のための喜劇を書く作者が好んで落ち入る技巧だやはり「二筋道」などの舊喜劇に五郎の銜はないゆかしい姿がある。



面臺舞のれた討の辰研

寅藏が豆腐屋か何かの喇叭の音を進軍喇叭と幻影に聞いてヨチ／＼歩き廻るくだりが面白く、十五の寅藏の女房が寅藏に「寅はん」とか「インチキの寅」とか呼びかけるのが莊麗な舞臺装置と富豪の家庭と言ふことと對比されて妙味があつた

に据ゑた「風の夜」一場で従來の五郎劇とは變つた趣向の下に執筆されてゐる。同狂言の筋は或る留守宅へ忍び込んだ一人の盗人が何か目星しい品はないかと家の中をうろ／＼してゐると不圖机の上にあつた手紙を見る、その手紙に依つてその家では最近妻を失つて幼児があるといふ事を知る、その盗人も此間妻を失つて一人の子供がある所から遂々出来心でかうした悪い事を初めたのであつた、何だか其の家の物を盗み出す事を躊躇してゐる所へ、電話のベル——、盗人は受諾器を耳に當てると「御主人ですか、只今坊ちゃん急病で危篤です」と報せて来る盗人すつかり吾身につまされてゐると、其の家の主人が歸つて来るので盗人はそれと電話の趣きを告げる、主人は驚いて、一禮を述べ早速幼児の預けてある家へ出掛け様と思つて初めてその盗人に「君は一體誰だ」と聞く、盗人はすつかり何も彼も打明けて謝まるといふ曾我廼家一派の「人の性は善なり」の倫理觀を強調させた社會喜劇、盗人を五郎、主人を蝶六が演じ、たつた二人ツきりの舞臺で充分に萬笑味たつぷりの活躍をしゃうといふのである。



霜月の中座で中車の光秀を見ながら延若の新工風の光秀の粗雑さを思ひ出して居た。在来の型を破つて、そこに問題を提示する延若の心意氣を買ふにやぶさかではないが、何んとなくそれだけでお仕舞になつて了ふ藝らしい。飛んで火に入る藝の虫と言つた感じがあら。せめて一芝居だけでも眞面目な演出を見せて欲しいと思ふことがよく延若に對してある。八千代座だから場所柄だけの芝居を見せやうと云ふことはよく役者の考へてすることだが、この商賣人氣質だけは出来るだけ封じていゝことだ。扇雀の重次郎は「親人の差圖にまかせ」た程度のもので、眞面目でよかつたと思ふ。「血屋敷」のお菊は初役と云ふことに興味を持つたが、壽三郎の鐵山が意外な掘出し物であつた。しかしやはり延若の八郎兵衛が此所での壓巻であつた。霞仙が「太十」の初菊「古八」のお妻と立女形に優待されてゐたことも忘れない。

新派の焦慮を痛ましく見せつけられたやうな氣がしたのは、梅島昇が松本泰輔、高田互東愛子、川上喜代子等と共に「人情劇」を組織して辨天座に旗擧げた事であつた。その時の梅島の挨拶に「私共は新派は滅びるなんて弱音は吐かずに、新派を正道に戻す意氣込みで大いに俗受けもし、また勸善懲惡も見せるといふ興味中心の芝居をするつもりです」と言つて居た。狂言はその昔の眞砂座時代に還つて、髯頭と藝者の世界を描いた「本當の人情はこれだよ」と言ふのと、故高田實の當り藝であつた「胡蝶蘭」とであつたが、後者の生蕃の踊りが噴き出したいほどに滑稽なものであつた。二の替りに行友李風氏の探偵賞話「深川染」と岡本綺堂氏の「權三と助十」とが出たが、それつきり一座は解散となつた。新聲劇は六月から居据つて、二の替りに行友李風氏作「御金藏奇聞戀騒」港邦三氏作中井泰孝氏脚色「藤馬は強い」を出し、三の替りに關口次郎氏作「女優宣傳業」服部秀氏脚色「若き日の東海道」を上演したが、二の替りは都合で見なかつたが「藤馬は強い」と言ふのが非常に受けたと云ふことを中田正造君から聞かされた「女優宣傳業」では小笠原と富士野が活躍して居たが、いはゆる喜劇を喜劇らしく演出したもので、前受けはよかつたやうだ。「若き日の東海道」では黒駒の勝藏が俠客になる前後が面白く、地味な中田の

### 新聲劇の師走狂言

## 赤穂義士の裏面觀

興味深い「不忠臣藏」

角座の新聲劇一派師走興行は既報の如く栗島狭衣氏の快作「不忠臣藏」五幕を上場する、同狂言は元祿時代の大仇討として有名な赤穂義士の裏面觀ともいふべき同じ浪士の岡林奎之輔、小山田庄左衛門、高田那兵衛等不忠者と見られた人物を經とし大石内藏之助等の義士を緯として脚色せる興味深い劇である。辻野の浪士小山田庄左衛門、中田の浪士岡林奎之輔、名越の浪士八代善右衛門、藤本の浪士高田那兵衛、伊川の岡林の若黨庄三郎、旗本内田三郎兵衛、和歌浦の庄三郎の女房お辰、守住の岡林の女房お貞、富士野の八代の娘里江等重なる役々である。

## 劇壇縱横

住田朝郎

新派は行詰つた。  
劍劇は行詰つた。  
等と、世評はいろ／＼なことを言つて居るが、

藝風がよく利いてゐたが、大詰は時節柄本水を使つた大舞臺ながら千篇一律な立ち廻り、一向に感興を惹かるゝほどのものではなかつた。(十一月二十四日記)

## 八月技藝座の公演

— 八 月 —  
山 上 貞 一

夏枯れ季として回顧して見ても寂しい月である。強いて此月の劇壇を報ずるものは、角座へは曾我廼家五九郎が出演してゐたこと、辨天座では下關の實業家籠興行專屬の新舊合同劇で保良鈴風が『義經千本櫻』すしやで、いがみの権太を演じて好評を博してゐたこと、樂天地で都築一派の新派劇が『俠客忠臣蔵』といふ満南北氏にしては出来過ぎた發案物で人氣を呼んでゐたこと、それに論外かも知れぬが松竹座では大毎の新八景に因んで「八景をどり」が評判であつたぐらゐである。

然し此の月の十日に到つて、大阪劇壇としては最も有意義な興行が初日を開けた。それは技藝座の第二回公演であつた。技藝座とは大阪俳優の子弟や門弟達の言はゞ登龍門であつて、昨夏その第一回を公演して外部的にも又内部的にも好成绩を収め得た。即ち新進抜擢の意味に於ても、技藝奨勵の點から言つても、たゞにその開演中だけの好成绩でなく、その前後、興行前の稽古中に於ける熱烈な精進、又興行後次回を期待しての努力、その結果は次回公演の配役の上に適面に現賞されるのであるから、少くとも二十歳前後の普通興行には大役のつかない俳優達が、希望の焦點として此の技藝座公演を期することは實に大阪劇壇の將來のために最も意義ある興行である。又白熱化した新人の奮闘を見ることは劇壇の將來に無關心なる一観客としても愉快なことである。

決して喧ましく流布されるやうにまで行詰つては居ない。

伊井、河合、喜多村の新派三巨頭が、此度、浪波座に於ける失敗は、理の當然であつた。

如何に大阪人が、東京人に比較して、頭の程度が低いからといつて、あのお粗末千萬な「砂繪呪縛」や、貞婦傳てな肩書かつきさうな「お鯉物語」では満足しさうな筈がない。

何よりも一番目立つたことは、伊井にしろ河合にしろ、喜多村にしろ、お芝居そのものよりも、彼等の藝が光りすぎたことだ。

藝が光るといふことは、如何に脚本そのものが愚劣いかといふことを證明する。

凡てが、一つに調和され、統一されてこそ、完全なものと言へるのだ。

その點、流石に「湯島」はすぐれたものだつたと思ふ。

劍劇は行詰つてはゐないが、確に、行惱める状態にある。

余りに深く入りすぎて、途方に暮れた形で

狂言は「曾我」「義経千本櫻」「道行初音の旅路」「鎌倉三代記」「目高川」「拳獅子」などでいづれも若手俳優の——特に歌舞伎俳優の第一歩として師匠や先輩の熱心な指導を受けるには好個の出し物であった。出演俳優は政治郎、ひとし、鷹之助、福萬壽、八百藏、魁童、我久之助、右若、扇の所謂大阪の名優のいづれも秘蔵児達である。さればこの興行に先達つて折柄の炎暑を事ともしないで数日の稽古に立合つた雁治郎始め指導者の眞剣さには實に涙ぐまじき程であつたと言ふ。

「鎌倉三代記」 政治郎の高綱



その結果として私達に與えられたものは、いづれもが新人の力と熱を見せしてくれたことに對するいとしき、即ち他人でなく思はれる愛情であつた。そして中村政治郎といふ掘出物を確實に認め得たことである。この人は元より名門禰助の息であつて光のない玉ではないが、此度の忠信と佐々木高綱の二役によつてその應答さそのおちつき、のんびりとしてあの體格に相應しい演技を見せてくれたことは將來の大成さもしのばれて嬉しかつた。新聞紙上では「白井社長」も大阪によい俳優が出来た」と言つて喜んだと書いてあつたが、第

ある。

此處に、一つ、活目すべき一座がある。

山口、小笠原、三好等の新潮劇である。

だが、時々途徹もない「出し物」を演るので面喰つて呆氣にとられることがある。

「べらぼうの始」を演つたことは何んでもよいことかも知れない、が、結局、あの「べらぼうの始」とは一體何を意味するものか僕等現代人には鳥渡むつかし過ぎて判らない。

小笠原の長崎の商人が、ラストになつて「皆さん、新しいものは……」てな演説を始める所なんか、余りに作意が見えずぎて、うんざりした。

弘法も筆のあやまり、綺堂も筆のあやまりであるべき愚作である。

近頃、はき違へたことが流行する、諷刺とか皮肉とかいふものを悪洒落に解釋して、お芝居に仕込むだものが澤山ある。

勿論、そのくらひに諷刺とか皮肉の持つ味を切り下げて見せなければ、今のお客は満足しないのかも知れない作者は骨の折れること。

とまれ、新潮劇は、惱んでゐる。惱むといふ

一回より僅か一年の精進が斯くまでに判然と現實化されるのも全く技藝座公演のたまものであると言へる。一年間の精進と言へばそれは單に政治郎のみでなく前回に比して驚くほど全部が確實味を帯びつゝあることは我人共に認める點であつて、此一座が未成品ながらも十二分の効果をおさめ得たと推稱してゐた人もある。

次ではひとしの進歩で此の若きをもつて『日高川』の清姫の人物振りといひ『三代記』の時姫のこなしは實によく出来た政治郎と共に大阪劇壇の將來を双肩に荷負ふ人はこの人かとも思はれて見る眼が愉快であつたことが思ひ出される。

此の機會に言添へる希望は、此一座が扇雀、珪藏達の第二の青年歌舞伎となつて失敗しないやうに心掛けてほしいことであつて、師匠なり先輩の指導が熱心になればなるほど小器用な模倣に墮することは實に恐るべきことだと思ふ。歌舞伎劇は滅亡しないといふ論者の私はどうか完成されたる型物の踏襲を希望して止まないが、そこにあやまつた仕勝手とか癖とかまじつて後世に傳統とされることは甚だ困つたことだと思ふ。その邪道へ最も墮落しやすい立場におかれた青年である技藝座の人々を思ふ時、此度の成功につけて今後を一層に寒心するものである。

出し物は第一回より第二回の方が賞成である。名女形中村雀右衛門の過去を聞いて愛惜おくあたはざる今日、歌舞伎劇に於ける型物の傳統を先輩が教へ惜しみをしないで、斯うした機會にどしどしと習得させておいて貰ふことは一俳優の利益に止まらないで歌舞伎劇の將來にも最も必要なことと思ふ。

私は來年度の第三回公演を今から期待すると共に、指導の地位にある名優や先輩に單なる小器用な模倣をしりぞけて、あくまでも根本的に演劇道の眞隨に徹底した指導を、後進のため吝かでないことを切望する次第である。(十一月十六日)

こと苦しむといふことは至極眞面目なことだ。例へ、時々失敗があつても、惱みそのものに對する好意と敬意は拂つてもいい。

## 双蝶々曲輪日記の初演

双蝶々曲輪日記、『壽の門松』と『昔米萬石通』を併せて趣向を立てたのが寛延二年七月大阪竹本座上演の操淨瑠璃『双蝶々曲輪日記』で、作者は竹田出雲、三好松落、並木千柳の合作である。歌舞伎に上演されたのは同年八月京都の布袋座で中山新九郎の濡髮長五郎が大當りで、ついで寛曆十二年十一月大阪の角座で中山文七の濡髮が大評判であつた。江戸の舞臺にかゝつたのは、安永三年九月中村座の『双蝶々曲輪日記』南與兵衛と放駒長吉『廣次』濡髮長五郎と橋本治郎右衛門『仲藏』山崎興次兵衛『門之介』けいせい都、おせき『里好』等であつた。

## 讀者俱樂部

### 本郷座霜月興行感想

小泉 阿南

吉右衛門が大南北の清玄を上演して、大入祝

# 道頓堀九月の感想

京 極 利 行

第一の收穫は中座の扇雀君一座の芝居に於ける扇雀君と、月末に開演した曾我廻家五郎劇だ。

失望したのは浪花座の延若、壽三郎其他諸君の芝居。相當問題も起り、期待も持つて居たのに、さて舞臺を見るに及び、失望、感激、このどつちも残らなかつたのは辨天座の新潮座と角座の昭生座と云ふこの月組織を新しくして旗擧げした新派と新劇の二團體である。そして道頓堀とは問題は別なのだが、社會的にも階級意識的にも、ひいて社會問題となるまでに大きい渦を實際問題として起したのは十日夜朝日會館に公演して、中止を開演後間もなく命ぜられた前衛座の大阪公演だ。又一つの記録として残しておきたいのは林長三郎君が松竹座で同君新作舞踊の本年度發表品として『保名』を上演したことである。

中座の扇雀君の芝居が何故第一の收穫か、それは最近の同君のノビがどの程度にまで行つて居るか、その點を明瞭に語るに足る舞臺を見せて、そのノビが同君の將來を失望させるものであるよりも、より以上に有望がらせるものであつたからだ。同君も往時の青年歌舞伎時代につくつたカラを『これが同君の爲めにどれだけ禍して居たかも知れない』鷹治郎中心の大一座に加入して修業した結果か近來では大分に脱いで來て居り、脱ぎ方がはつきりすればするほど、それに正比例して、將來自己の進むべき藝壇をよりはつきりと自覺し、もし又見せつゝもあつたやうに思つたのだが、この中座の九月興行は同君の知所、長所、それ等のすべてを赤裸々にさらけ出して、さて將來はどの方面に豫約すべきを、かなり有望な氣持を抱けるまでに明示して呉れたものと云へるやうだ。扇雀君同様な意味で記

ひをやつた後を受けて、猿之助、八百藏兄弟を始め、松蔭、友右衛門等の若手幹部が澆瀾たる元氣で夏目漱石先生の『坊つちやん』を呼び物に其他『播州皿屋敷』『鼠小僧心願』『高野物狂』『つんぼ座頭』等盛澤山、最低料金で蓋を開けたが、一座の奮闘効を奏し、連日滿員の盛況を呈して居る。

一番目『播州皿屋敷』二幕 友右衛門の淺山鐵山は柄も良く、貫祿もあり、憎みも十分利いて色敵としては申し分なく、二役舟瀬三平も上出來なり。『番町皿屋敷』のお菊が十八番である松蔭のお菊は勿論悪からう管がないが二役後室松月の方がより適役である。新十郎の岩淵は本役で憎々しく、芝鶴の三平妹お峰は懸命の努力を買ふ。

『鼠小僧心願』一幕四場 自分を親切な男だと思つて居る人々に本當は盗人であると知れて、がつかりさせるに忍びないから罪の暴露しない中に自殺しようとした鼠小僧が偶然自殺せんとする母子を救ひ、其の爲めに盜賊鼠小僧を取逃がした詫に切腹した辻番甚五兵衛の伴の繩に掛かるのがせめてもの罪亡しだと心願する鼠小僧の人間味を描いた小品で、極め付けの新訥子の次郎吉はサラ／＼演つて居る様で矢張り上手い。芝鶴の篠原妻おつちや、新十郎の甚五兵

録したいのは成太郎君と卯之助君、有望らしくも思はれたのは東京から来た一鶴君、一考して愨しく思つたのは蕨藏君（この人に望む、ユメユメ敷でこなす達者役者になるなけれど）

×

次に五郎君の芝居が何故に大きい收穫か、それは決して同君、朝鮮から南滿をかけ

謎帯一寸徳兵衛



て、ついでに北滿の戸口までのぞひて、おりからの排日騒ぎに身體悉なく戻つて来た爲めに言ふのではない。斯んな事はこの劇團が持つ現在の社會に觸れての存在價値とは何等の關係もないことなだから。然しこの劇團が現在の社會に觸れての上存在價値を、より大きく持てば持つだけ、この一座の舞臺上の仕事は、まず、諸劇團の演出メヤスのモノカシとされるのは當然のことだし、又その爲めに起る競争者、模倣、の簇出によつてこの一座の仕事もまず、多端となり同時に安逸を許さなくなつて来るのも當然のことなのだ

衛は無難。

中幕「高野物狂」 木村富子夫人が猿之助の爲めに書下される所作事で、猿之助の高師四郎が華美な小桂を肩に花道で踊る狂亂は「保名」の振りと似て居る。新田方の大將平松左近の家臣である四郎は保名に比べて線が硬く、膨みに乏しいが猿之助一流の思ひ切り體を殺して藝を生かして居る。

二番目「坊つちゃん」 漱石先生の傑作。猿之助の坊つちゃんと言つても、良い位性格が一致して居る猿之助はたくましく其人になり切つて居る。然しなるべく生地を出さぬ様に努力して居る所が良い。何時も氣になる身長の低い事も今度原作にピッタリ合つて居る。禍福は糾ふ繩の如し、荒次郎の狸は他の追従を許さない。不斷の努力が報はれ近來益々重用されて来たのが嬉しい。友右衛門の山嵐も中心からの善良さが十分出て居る生一本だが坊つちゃんより熟慮ある人に受取れる。

八百藏の赤シャツは別人かと思はれる位巧妙な扮装には敬服。陰險な軟派の不良らしい。瓶右衛門の野だいこは傑作である。嫌みにならぬ程度で思ふ存分腕を振つて居る訥子のうらなりも柔弱な男に成つて居る。九藏の車夫、源十郎の小使、福之丞、小傳次の藝者、團子以下の學



其處でこの劇團中心人物である五郎君は大ひにもがきもし、迷ひもしして居ると思ふのだが、そうした惱みからくる體驗の結果から「斯うした物も五郎劇が歩んで行つてよい道ではないでせうか」と同君の持つ觀察階級に對して提出した二つの問題、しかも成功した問題がこの興行の第二狂言「色花絡」と第四狂言「陸日向」だと思ふのだ。前者は従来からの五郎劇ファンを答案者の主としたものであり、後者は、比較的新しい、同時に幾分人間としてリアインされた五郎劇ファンを答案者の主としたものでもある。そして僕がこの月の五郎劇を收獲第一の一つに加へたのも、斯うした問題ともなる傑作狂言を二つも見せて五郎君が持つ自個中心の劇團に對する眞劍さの程を明示して呉れた點にのみ理由があるのだ。

浪花座に失望したのは延若君は同君として最も努力しつゝある同君中心での折角の道頓堀出演なのに怪談「乳房祝」と云ふ早替り以外には何んのとりにない芝居だけで御免かうむつて居るし、僕の好きである俳優三郎君は同君としては成功した例の多い新作物を主演しながら、共演者霞仙、蝦十郎兩君の不適なものと、演出上の脚本理解の錯誤とで、惜しくも失敗して居るからである、上演脚本は林知氏作「三右衛門の賣出し」一幕二場。

昭生座、新潮座に對してはさしたる感激の持てなかつたのは最初に書いたとほり、最後に藝の點だけでの佳作をビツクアツプしてみれば(辨天座)行友李風氏作「怪談雨の古酒」に於ける三好君と満喜君、伊原青々園氏原作、川村花菱氏脚色「寶を釣る男」の三好君、

角座川村花菱氏作「醫者の家」に於ける小織君、木村錦花氏脚色、圓朝物の「發端眞景果ヶ淵」の米津君等、尙ほ角座では二の替りに新作を揃へて上演したがこれは見ないから感想が書けない。

(二、一一、二四日記)

生も懸命に努力して居る唯、新十郎のお清婆さん丈はいさゝか困る。大切に訥子、八百藏、芝鶴、福之丞等で「つんぼ座頭」を踊つて居る。閉場で外へ出た時に愉快で／＼でたまらなかつた。誰の顔を見ても愉快そうであつた。一晩中踊り廻りたい位陽氣な氣分で歸宅した。

(二、十一、十三)

### 悼京屋中村雀右衛門

利の字

名優雀右衛門の計が傳へられた。惜しい優である。歌舞伎の女形の最期の人であつた。ほんとのものが見られず、せめてものもので慰められてゐる今雀右衛門だけはほんとのものであつたそれも西にしては實に唯一にして無二の優であつた。東に松助、源之助の尙嬰傑たるに、齡五十三、卒として逝く。惜しい優である。最期の舞臺になつた本藏下屋敷の三千歳姫を七日目に見得られたのは、せめてもの嬉びである。たゞ顔を出すに過ぎなかつたが、雀右衛門の存在ははつきりしてゐた不自由な、全く一人で立つてゐることのすでに危げな三千歳姫ではあつたが、見物みんなが、この名優の却病に

# 大膽なる新作揃ひの試み

— 白井氏の大英斷振り —

— 十 月 —

野村治郎三郎

『久し振りの鷹治郎一座の道頓堀出演、無論人氣は大丈夫とは思ふが、扱て出し物の選定には、いつもながら惱まされる。例の好劇家の狂言投票、それも餘りにやり古してゐる。今月から來月へかけて、ふた月越しの成劇家に、奈何なものを上演すれば受けるか——』と慥ら思つて、白井さんは首を捻つたに相違ない。

そこで考慮に考慮を重ねた揚句が『この月には思ひ切つて書き物ばかりを並べて見やう。鷹治郎に新作をそろへて演らせる——聊か冒險なやうではあるが、また好劇家の好奇心をそゝらぬこともあるまい、そして十一月には、それと反對に、古い狂言——成駒家の十八番ばかりを選んで出す——名案、名案、然し成駒家が書き物ばかりで納まるかどうか——といふことになつて、白井さんの一大英斷は、いかに鷹治郎を説き伏せたが、中座の出し物が、一番目に大西利夫氏の『曲物語』、中幕に大森痴雪氏の『明暗縁染附』、二番目は近松翁の原作を、大森氏が脚色した『心中二枚繪草紙』、大喜利が坪内士行氏の原作を、鶴屋南北氏が改訂した『女郎蜘蛛』となつたわけである——とにかく想像する。蓋しこの想像は正に適中したものであらう。

書き物とは云ひ條、作者はいづれも松竹のお抱へであつて、鷹治郎一座のこつをよよく存

深い同情と温い慰撫を寄せてゐるかの如く、寂として音なく、大向ふの京屋アの聲のみ芽える時、私は喜ばしかつた。しかしこれ以上の働きが望めないのを思ふと、又淋しかつた。惜しい優である。

近い頃見た廿四孝で、ほんとの女形の、そして人形ぶりの滅んで行かうとするのを如實に見せられた。福助の八重垣姫、雀右衛門の濡衣、その時、何と雀右衛門の病を憎んだことか。雀右衛門の前に八重垣姫を演つた福助の辛苦をも慮みず、一筋に雀右衛門起てざるを憾んだしかも狐火の電光燦々たるに及んではたぐため息を吐くのみであつた。同じ舞臺に見たためであらう。雀右衛門起てざるを痛く心残りに思つた。

雀右衛門を見て涙ぐましくなつた思ひ出。網代舟(？)の一幕目、花魁某に扮して、景章に手を引かれて出て來た時、わけのない涙がにじんだ。たど／＼しい足取、うねつた躰つき、云ひづらきなう口名優雀右衛門の痛ましい姿であつた。もつと自分を大事にして慾しいものと望んだ。今日の俳優でなく、昨日の役者京屋はあえて新作には沈黙して慾しかつた。それでいゝ管である。

思ひ出されるも一つ。

おと／＼の秋、南の演舞場の前で、ふと私の

み込んでゐるから、さて斯うして並べても、一向に新作を見るといふ気分がしない。「曲物語」は大いに興味をひいた、作者の筆の巧者なのに、據らうが、延若の獄門首の勘次、扇雀の前髪源次、福助の狩野晴信、魁車の井筒屋おすがの役々が、まさにそれを演活したものと云へる。「明暗縁染附」は、尾張の陶工加藤民吉の事蹟を、演出俳優が藤治郎とあつて、名工の苦心を描くよりも、情的關係の機微をとらへて観客の涙をそゝる、「佐々

心中二枚繪草紙の舞臺面



の悪魔、瀬戸の靈神」の角書も聊か變に思はれもした。「心中二枚繪草紙」はさらりとしたうちにも、實があつた、味があつた、殊に舞臺裝置に意を用ひてゐた。「女郎蜘蛛」に至つては、松竹座ならばまだしも、決して中座の、然も成駒家の芝居では見たくなかつた、これが爲に折角の觀劇の感興を、最後に至つて、夥しく殺がれた。

目の前をかすめた雀右衛門、黒が、つた縞の着物に對の羽織、中折帽子に澁い首巻をして俥にチンと乗つた雀右衛門。あはたゞしい往來の東の間のことではあつたが、何でもないのでその樂屋入の雀右衛門がなつかしい。

明烏の浦里、野崎村のお光、古くは鎌倉三代記の時姫、紙治の小春、矢口のお舟。

もうそれも見られない惜しい優である。

舞臺に起ち得ることの無理な體を押し出ること久しく、遂に舞臺を引込むとともに倒れ、厚化粧のまゝ逝く。役者らしい死にざまではないか。昭和大正の息を吸つたにもせよ、明治の名女形といひたい。雀右衛門として如何に相應しきことよ。

上方が持つ誇るべき一つ。女形雀右衛門は銀杏の葉の音なく落ちる秋、靜に逝く。

おやまはこれでおしまひである

惜しい優である。惜しみてもなほ餘りある優である。十五日よる記す。

三階席のたわ言

與 志 晴

新派劇は古典劇に近い様な、或はその域から脱し得ないものばかりをやつて來てゐた。新劇

そして厲治郎一座の新作揃ひは、興行成績の奈何は知らず、舞臺上の効果は、確に擧げ得たものと思惟する。

浪花座に於ける澤田正二郎の率ゆる新國劇の、十周年記念興行も印象に残るものである。中村吉藏氏の『星亨』も、新國劇にして初めて舞臺効果を示したもので、自由黨の北陸大會、過激なる演説に對して、中止、解散、拘引などの騒ぎ、第五議會の議場の亂闘など、この劇團にして観るを得べく、金子洋文氏の『塚』も、武士の意氣地から、敵方も髮を切り、果ては女の髮までも切るめづらしい變態性態を扱つてゐた。小林宗吉氏が躰案したエドモン・ロスタン原作の『劍客商賣』は感心する程度のものでなかつた。それでも新國劇十周年記念の、意義ある興行なることを首肯せしめた。

角座の小織、梅島、加藤などの昭生座の佐藤紅線氏作『姉と妹』や、川村花菱氏の『赤城の月』早瀬撫人氏の『三人の大佐』は、脚本に於て失敗し、替り狂言の花菱氏の『金色夜叉』は一見の價値があつた、それにしても小栗風葉氏の脚色にかゝる『金色夜叉』はやはり上乘のものであつた。

辨天座の人形淨瑠璃は、土佐太夫の『吉原揚屋』古靱太夫の『堀川猿廻し』津太夫の『盛綱首貨檢』朝太夫の『鳴戸』と、いづれも得意の語り物で好評を博したのは、近頃の成功と謂へる。

斯くして十月の道頓堀は、意外の收穫を得たものである。

は反對に大衆から進み過ぎてゐた。たまには程よいのがあつてもその表現が餘りにもつたい振つてゐる？せいか彼等大衆にはそしやくされな

い恨みがあつたのは事實である。  
新派劇も新劇も大衆の一步前にあつて、その表現に徹底を期するならば、必ずや彼等に受入れらるべきであると惟ふ。かの映畫東への道が未だに上映歡迎されてゐる事は新派劇更生に何かを教示してはゐまいか。

兎に角、一現客を當て込んだ浮世商賣などは考へない事だ。新派劇には立派な老舗がついてゐる老舗へ来る客はかたい。そして新しい客を曳寄せるのも老舗が持つ徳である事を忘れてはならない。たゞどんな老舗でもそこにフレッツシユが無くなれば客脚は遠ざかつて行くものである。

### 一眼、二調子、三顔

扇 三 呂

歌舞伎を一般の劇と比較して歌舞伎俳優の素質や、歌舞伎美の改正を需め、或は、徒らに理論を推して、一軌道上以外を歩まぬ、舞臺論にはめやうとする劇評家がある。

亦、型を尊重するにしても、其俳優の體格等

# 十一月の收穫

高原慶三

第一が文樂、辨天座の土佐太夫の「封印切り」と、いふより、むしろ近松の「冥途の飛脚」が光つたのである。近松の光背が土佐を有難

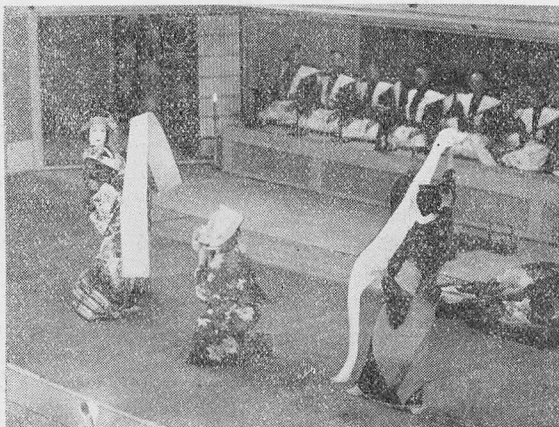
くしたのである。

文樂衰微、文樂墮落

といふが、詮ずるところは語り物の選擇、語り物本位でありさへすれば、太夫がいくら拙くても……と文樂の百罪を償ふに餘りあるのである。

この點、僕は極端な復古派である、

地唄の「傾城に誠ある文」を序曲に、燦銀の色調をたゞよはするに艶から寂びにうつろひつゝある土佐にはうぬでもないが、一旦の男の意地からむで封印を切る……その心理描寫に近松は天衣無縫



面臺舞の章文廊

つてつけの語り物である。八右衛門が舊劇常套の敵役でなく、市井にあるおせつかいな小俠客屋の風貌を巧みに現はしてゐる。そのおせつかいが禍ひして忠兵衛の破滅を招く。しかもその忠兵衛が後の禍ひを知ら

ぬ、に調和せぬ、型を強ひるのも不可だ。型といふものは、其の演技を表す上に置いて、最も良い方法を言ふのではあるが、其の俳優の性格が、その型にそぐはねば、其の型は駄目である。「一眼、二調子、三額」は演技法の主眼である。如以に型がよくても、之等三ツが、悪くては其藝は死んで仕舞ふ。凡ての誰にも感動させ得ない此春の先代萩の男之助をした三升も型こそ立派であれ、イキのまねけた演技で、残念乍ら最良とは申し兼ねた。

亦、先頃鷹治郎が、盛綱を三杯道具で演じたのを非難する人があるが、何事も人間一生の研究である、あの三杯道具今少し工夫して使へば何の悪からう。研究の餘地を見ずして、其時悪く感じたからとて、矢張り型通りにといふのは良い評ではない。元來、線人形に仕組んだ戯曲俳優が演ずるに、寫實に近づくのは無理もない殊に斯した趣味を味ふ人の減る今日、俳優なり、當事者が、新味を加へやうとするのは無理からぬ話、當事者の身にもなつて劇評もすべきである。

應募原稿は出来るだけ奇麗に可憐に判り易く書いて頂きたい、折角の美文も讀みにくいために採用出来なくなりますから。

のゆえを見せ、土佐亦寫實の妙を發揮する。  
最後にクドキに大風一過青樓のうらさみしさを寫し、次いで落人の焦慮と些の滯滞なく芝居を運ばせる。

第二が中座鷹治郎の「原文章」の伊左衛門……これは定評がある。が、暫くぶりなものとす。圓熟を見せたのを特筆する。

「冬編笠」の出がら格子さき、奥座敷とよい處は無齋藏である。  
が、特によいところを拾ふと「昔は槍が迎ひに出る」を仕方話にしない「瓶子ざわり」の細緻、鼻緒を切らずに大盡見得となる「何の泣かうぞ」の微妙さ「わかりの月」の情趣……非の打ち處がないうまい芝居である。

第三は中車の「十段目」の光秀、これもむろん定評物。活歴にならず、寫實にならず、それで心と形との釣合を失はず、この英雄的性情悲劇を描くに雄渾、しかも冴えた中にどこやら中車その人の外貌の陰鬱さ、後世に範を垂れるものである。

第四に中車、鷹治郎、雀右衛門の「本藏下屋敷」も捨て、はならぬ。

「引窓」饅頭娘」と、鷹治郎が五行本から擲出した一幕物、内容は淺くとも、いはゆるオシバイとしての纏り、色彩の豊かさ、筋も通つてゐる、歌舞伎の存する限りは残つてゆく脚本だ。

からした中座、殊に關西大歌舞伎の正月以來の大成功は歌舞伎本位の狂言の並べ方がよかつたがため、これに引きかへ浪孔雀座の新派三巨頭劇、角座の新聲劇など依然として劇壇の傍流であるに見ても、歌舞伎の前途、さして悲觀すべからずである。

この點、僕は樂天主義復古派である。  
ところが、復古派にとつての打撃は「本藏下屋敷」の芝居半ばに雀右衛門は三千歳姫のまゝ死んでいつた。

院本物の女形で、人形振りの名人で、あれ程濃彩な情味をたゝふる名優は、ある意味で

## 應募短歌

今月はあまり佳作が集らなかつたので休みます。尙次號よりは選者を山上貞一氏におたのみいたしました。

### 次號課題「歌舞伎、顔見世」

山上貞一選

締切は十二月十七日のこと

## 讀者俱樂部募集

讀者俱樂部は、松竹經營各座の老名優と言はず、新名題と言はず、あるひは劍劇、新劇、新派のあらゆる俳優演劇を各自勝手に選んで、公開状になり、批評になり御自由に投稿して頂きたいのです。

他誌並に口上で言へば紙面提供、さては新進劇評家の引立て策といふところですが私共はそんな面倒なことは言ひませぬ、ただ諸彦と共に歡談一夕、そのお積りでお平らにお平らに……



純粹歌舞伎の女形のラストマンだったのである。

この點に復古派の儀、憂鬱にならざるを得ぬのである。

# 文樂座の一年

八木柳緑

御靈境内の據城を焼いて道頓堀の竹田芝居に由緒ある庵を掲げた文樂座は昭和二年の一月が其初興行であつた、過去一年間の文樂座——振返つて見ると、數々の思ひ出がある。

初興行の一月興行には東京から二十五年振りに竹本朝太夫、豊澤松太郎が歸つて此一座に加はつた、初見得はお夏清十郎の港町、同じく一月には文五郎門下の吉田義助が斯道の谷人桐竹紋十郎を嗣いで三代目を襲名し、吉田屋の夕霧を遣つて華々しく披露目をした、

三月には竹本靜太夫が竹本大隅太夫を襲ぎ、五月には素人天狗の重鎮貴風が津太夫の一門に加へらる、名も竹本貴風太夫と改めて此一座に投じた、一方三味線では三月興行を以て合三味の異動が行はれ、紋下津太夫の合三味鶴澤道八は新進大隅太夫を叩き、前年來病氣休養中の鶴澤友次郎は久々で出勤して津太夫と蓬戻の外松竹のお覺え日出度き豊竹つばめ太夫に先輩野澤勝市を見立て、其女房役に娶合はすなど、可なりの變動があつた。

一月からの狂言を列擧すると、正月は前「太功記」次「吉田屋」中「台邦」切「淡町」二月は前「先代萩」中「盛衰記」笹引より逆櫓まで切「阿古屋翠貴」三月は前「廿四孝」

## 規定

狂言見たま、

劇評所感

俳優への公開状

原稿締切

◎應募原稿は

大阪市南區久左衛門町八番地

松作合名社内

## 道頓堀編輯部宛

大阪か御観劇の方はお京阪電車往復券を

進呈す。 (但し一等入場者)

御観劇三日日前迄に申込みの一方は番

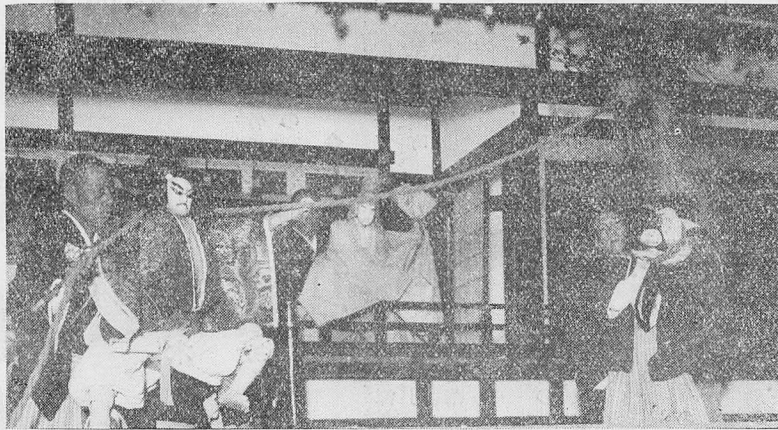
入指の定券發賣をてし。 (入指)

(一等に限る) 御用の方は大阪市南區左久

衛門町八 (電話一南二〇四番)

松竹合名社務所へ御申込み下さい。

中「河庄と炬燵」次「御所櫻」切「八百屋お七」四月は四圍の事情から松竹迷ひ、松竹經營となつて初めて試み、晝夜二部興行を開演した、即ち晝の部「忠臣蔵」大序より茶屋場まで夜の部「千本櫻」渡海屋より鮮屋まで切「壘阪」併し結果は悪かつた。従つて次ぎの五月には又元の一回興行に選された、狂言は前「菅原」中「酒屋」次「重の井」切「淡路町」六月は前「朝顔話」中「一の谷」組打と阿屋切「油屋」で暑中休暇毎年吉例の向上會は前「一の谷」中「酒屋」切「野崎村」で相變らず好人氣、和泉太夫の野崎村と鏡太夫の熊谷陣屋が認められた、十月の盆替りは除く外全部時代物を語つてゐる、重厚な語り口と、必死の熱演に人氣のある



源平布引の瀧の舞臺面

でも興行法に正月来十月振りて古軼太夫が出勤して次狂言に「堀川」を語つた、其他の狂言は前「白石噺」中「近江源氏盛綱館」切「鳴戸」十一月は前「布引瀧」中「冥途の飛脚」切「本藏下屋敷」など

浪花座師走興行魁車、壽三郎延若三花形喬岡劇は各狂言共新役揃ひを呼物としてゐる、二番目「隅田川織佛」二軒茶屋より道行迄は魁車初役の法海坊が當地では珍しい出し物である。同優は多年の念願であつたといふからさぞかし新境地を開いた演出を見せるであらうと一般に期待されてゐる。延若は番頭庄八の役に廻つて大いに活躍し壽三郎は定評ある道具屋甚三、成太郎は娘おくみ、大吉は山崎屋勘十郎、橋三郎は山上文次、延太郎は野分姫、霞仙は宿位之助といふ珍しい役揃ひである。最近では昨年三月辨天座、大正十三年九月浪花座に同狂言が上演されてゐるがいづれも右圍次の法界坊で亡父齋人譲りで見せてゐるが、此度魁車の新演出は關西劇壇に珍しい試みとして迎へられてゐる。場割は二軒茶屋、庵室、隅田川道行の三幕で、道行は常磐津文賀太夫の話し、連中は常磐津文賀太夫、歌男太夫、綱太夫、文枝太夫、三弦、常磐津文左衛門、上調子常磐津三都造。

## 魁車初役の法界坊

の價值からいへば更に何等の進歩も認められぬ、其點からいへば、吉田屋、先代裁御殿、炬燵、勘平切腹、酒屋、宿屋、白石揚屋、封印切の中、揚屋と封印切は傑作とまで推賞された。

病後の古靱の堀川は今一息の出来だつたが、實盛物語は蓋し近頃會心の作として天狗仲間の評判を取つた、遠來の珍容朝太夫も松太郎と別れてからは(五月興行限り)孤影悄悄、廢残した太夫の末路寧ろ憐むべきものがある、新大隅太夫は道八といふ良師を得て一段藝道に出精したが、また海のものとも山のものとも容易に豫測を許さない、玄人になつた貴風太夫は鶏口となるとも牛後となる勿れの古句が痛切に感ぜられる。

◇在りし日の雀右衛門



平家蟹 (石ム一オ)

玉蟲 云ふ迄も御座らぬ、先づ當の仇の義經を亡ぼして、次は範頼……次は頼朝……おし、まだある、頼朝には頼家と云ふ小伴があるやら……これも助けて置かれぬ奴、勿論呪ひ殺します、其の弟も……又其の子も……其の孫も……二代三代四代の末迄も執念くたつて、假にも源氏の血を引く徒は男も女も根絶やして見ませうぞ

茨木

(新鵜鴉石)

眞柴(實は茨木童子) 梅 幸  
波邊 綱 幸四郎

眞 コハ心得ぬ事なるかな、當時都は名の高き頼光朝臣のお内にて四天王の隨一と、云はるゝ綱に似氣なき詞、人の盛りは神ですら、崇りのなきと申すのに、何故和殿は恐るゝぞ、是ぞ陰陽の博士たる、安部の晴明が教へにより身を慎しみての齊なり、たとへ血筋の叔母御前たりとも今宵は對面なり難く、知邊の方へ宿り給いて七日過ぎて來り玉はじ、聊か憚る事もなし、打解けて語り申さん。

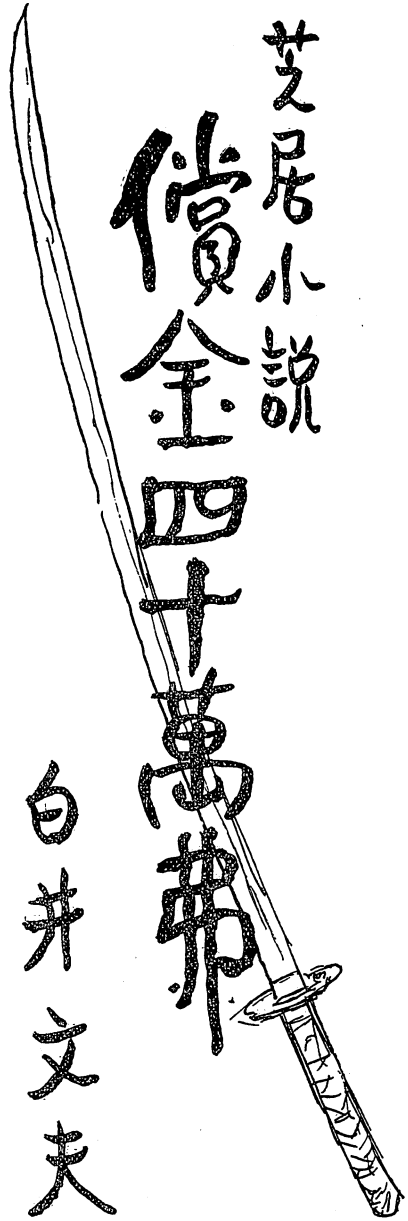
眞 扱は何の様に頼むとも甥の殿には許さぬと  
か、  
綱 是非なき事と諦め候へ、

言葉すげなく云ひ放ち元の座にこそ直りける。

(長唄囃子連中)

艾居小説

償金四十萬弗



白井文夫

— 東海道程ヶ谷驛島津三郎本陣。

本陣旅舎の桔梗屋は夜に這入つても依然、出入り繁く混雑をしてゐた。

と言うのは島津家の近侍役の一人である若き那珂原喜左衛門が、生麥村で英吉利兵隊を数名殺害したことに端を發してゐるのである。

勿論、那珂原は幕府奉行所の取調べに對して、島津家一藩の意氣地を示す、當の下手人として堂々立ち現はれる覺悟は固いが、周囲の朋輩がそれを未然に防がうとして如何ばかり焦慮し

て居ることであらう。一方、那珂原は血氣にはやる若人であるその爲に今宵の桔梗屋は騒然と不安な氣に掻き亂されてゐる『智惠者の大久保だ。決して幕府役人に踵をさらはれるやうな氣づかひはない。今に必らず事を仕上げて歸つてくるに相違ない。分つたか?』朋輩の木崎篤之助などは可なり心配して那珂原の昂奮を制するのだつた。

とも角も、藩主のお駕間近く狼藉を働いた毛唐人を叩き斬つたのが何故悪い。その下手人は糺されるまでもないこの那珂原『おれ一人を幕府方に引渡せばいいのだ。おれは死ぬ——早く

死にたい。

流石に血は若い。逆上させてゐないと自分で言ひ張つても、何處やらに悲愴な面もちが仄めいてゐるのであつた。

朋輩仲間の意嚮各説、愈々、座敷中には意氣、不安、の感情が交々に織交ぜた空氣をかもして蒸せかへる計だ。

實際、誰も彼もこの時ばかりは舉げて那珂原喜左衛門の身體を案じ過ぎすばかりに疲れきつてゐたのである。

『今こそ上下必死の場合だぞ。お主たちの血氣を満足させる爲に空騒ぎする時でないぞ。』

昂る那珂原を叩りつけて這入つて来るのは大久保市藏、藩士の中の御納戸役頭取。

『もう大丈夫だ。俺は幕府役人の望みどほり、立派に下主人の姓名を書つてけ相當の手續きを踏んで来た。』

泰然と構へて破顔一笑である。却つて那珂原が愕つと顔色を變じた位であつた。

大久保の企圖は怙うだつた。その舊友に岡野新助がある。

岡野は現在島津家を追放されて藩に何等の關係はない。ないけれども、是を下主人と屈けて来たし、又、何處までも横車で

言ひ張る。さすれば幕府の下主人引渡し強請の挨拶には？——追放者ゆえに知らぬ存ぜぬ、の、突ツ放しである。

なら偽の下主人岡野は、と言ふと是が那珂原の從兄に當る。

大久保の企圖には一分のムダもない計ひと言はねばならぬ。

その岡野が大久保に面會に来た

『舊友なればこそ、この身に落ちた新助に死後の功名を立てさせて下さるのだと身に沁みて考へました。どうか私を生麥の下主人として奉行所へ渡して下さい。』

大久保は愕然とした。

幕府奉行所へは岡野の姓名を書つてこそすれ、本人には告げてゐない工みである。言はば權兵衛、八兵衛、只の人でも差支へない計書に猶更岡野新助の名を用ひたと言ふのは、大久保には大久保として多少の考慮が含まれてゐる。

『いづれ分ることだから、まあ、當分は忘れてゐてくれ。』

しかし……然し、今日は新助にとつて、一世一代の大事の日にごさいます。大久保氏、何卒お執成しを』岡野も眞實、その名によつて惜しからぬ命を華と散らしたかつたのであるが、泣き絶るのを何おもつてか大久保は強か突きとばして去つたのであるが……。

### —— 祇園社内二軒茶屋。

『諸藩有志の輩、發起となつて幕政改革のために全國勤王黨の大同團結を計り、先づ以つて薩長融和の會合をひらく趣意に於ては同感だ……しかし、その集合にこの岡野新助を疎外する。』

その邊が俺には合點が行かぬ。』

「相變らず浪人姿の岡野は、恁んな工合に酒に酔ひしれては、諸藩士集合所の表に大聲で喚いてゐるのである。」

そして彼の二言目に口を衝いて出るものは『生麥村事件』の勇者たることである。

諸藩士は皆顔を合せて眉を擡めた。

そればかりで酒代を強要するのが、昨日今日、彼のしだらな生活であつたから……。

生麥事變の爲に英吉利と幕府の外交談判は焦眉の間に切迫してゐる。償金か？ 合戦か？ である。

そして償金は四十萬弗の高價を強ひて來てゐるのである。甲斐田は眼に餘る岡野の暴行に黙過することが態きない。

『かの時生麥でお主の名を屈書に認めたのは大久保一生の失錯だ。剛腹な男ゆゑ弱味は見せぬが貴様が暴れて諸方から被害損害のさしがくるたび、見ても氣の毒なほど情氣かへつてゐるぞ家中朋輩からは責められる——大久保にしても退瀨あるまいと思ふのだ。』

『なるほど最初京都入りの頃は、大久保を困らせやうの氣があつた。が、今は、そんなことは思はぬ。この方が商賣だ。結局、渡世になる……は、は、は、は、あの時朋輩友人にまで見限られたのをおれは有難く思つてゐる。尤で結構だ。結構だ。は、は、は、は、』

岡野の醉態は斯うして話らうとも手の着けべき處がなかつた

のである。

『新助。大久保に會つて見ないか。』

『なんだ？ 妥協か。』

『いや、妥協でない。大久保も君の言葉を正直に聞いたら、必ず考へるだらう。大久保のためにも君のためにも好いことだとおもふ……。』

『さあ、後が強請りにく、はならないか。』

『大久保は御前體を濟ましておつ、け參會する筈になつてゐる君も大久保の膝を抱いて思ふ存分に言ふが、い、』

漸く恁んな會話を交した後で、酒の力に荒れくるふ岡野を宥めて甲斐田は參會所へ伴ふて行つたのである。

入れちがひに——

那珂原が憤慨して飛び出した。岡野が來たから歸ると言ふのである。

『彼奴はおれの顔を見ると嵩に懸つてくる。満座の中で業曝しはしたくない。』

『しかし、今日だけは我慢しろ、待て、待てよ。』

友人達が氣づかつて背後から抱き留めたが那珂原は昂奮してゐた。

それにも無理はないことである。

折柄の騒ぎに大久保が遅刻氣味で現はれたのである。

新助の來たことを聞いて流石の彼も眉を擡めた。



『また、来たか？』

『上座にづつ坐つて、ノサばかりかへつてゐます。』

一度は苦虫を噛み潰したが、何か確と目算のある如く態度を取戻して大久保は悠然と參會所へ這入つて行く。

——高瀬川三條生州の茶屋。

京洛の花街は擧げて國侍の遊び場所になつてゐる。

それほど薩藩の勢力は昇天の概があつたのである。

桃龍は一時あれほど薩摩武士を毛虫ほどに嫌つて置きながら今日の那珂原の世間と呼ばれる名を聞くと妙な意地が手傳つて岡惚れに惚れてかゝる戀の達引きがあつた。

折から酒席から朋輩に弄ばれ飲めぬ酒に痛められた那珂原が遁けた來た。

時もよし桃——。

桃龍はそれを捉へて離さぬ。

『あんた、その臆病で……』

女の手前におつ／＼と尻込む那珂原の初心らしい姿に見惚れて、初心らしいを面白さうに笑ふ。

『よく、異人が斬れましたなあ。』

桃龍も世間の評判と共に生麥の事實を知つてゐたのである。

『男さんの手柄は、やつぱり機みですか、そこへ行くと女子の方が強いやうに思ひます。』

『おれは言はんぞ、おれの口から、それ言つた覚えはないぞ、明かに、それ、斷つてをくぞ。』

那珂原はキツとなる。

女を睨みつけた。

口籠つて吃る。

『誰とて知つてゐますがな、臆病なお人！』

『臆病ぢやない。臆病でさう言ふんぢやない。只……只……おれの口からは言はれないのだ。言はんく、決して、俺から言つたのぢやないぞ、は、は、』

それでも自らこみあける嬉しさに、譯もなく大聲を立て、那珂原は笑ひ出した。

すると——。

隣室の障子に映る影法師も、又、大聲で笑ひ出したのである。那珂原はその影に怯えながら、女に促されるまゝ、生麥事變當日を語る。

と、障子が開いた。

岡野新助である。

獨酌で悠然と嘲りながら當日の下手人を自分とばかり言ひ張るのである。

桃龍は女の身空だ。

いづれが是非と、眼を睜る。

強ひられるまゝに酌もしはじめる。

岡野は何處までも那珂原を馬鹿にしてかゝつた。

『しかし大事件になつたなあ、那珂原、おりや異人に斬付けける時は、これほど國家の騒動にならうとは思はなかつたよ。』

それから岡野の偽りの手柄話は後から後へと出鱈目に衝いて出る。

那珂原は腕組に思案してしまふ。

『市藏奴。えらそんな顔をする。おれもな、とは言ふが先には大久保が恐ろしかつた、彼奴の前に出ると聲まで頭へた、處がこの頃、償金四十萬弗の附物が乗移つてからは、大久保などは屁の河童だ、はゝゝゝ、いつでも連れて來い。こゝへ出せ、おりや言ひたい放題……そこは四十萬弗の位取りで頭ごなしにこなしてつけて見せる。あはゝゝゝ、はゝゝゝ。』

那珂原は岡野の傍若無人に耐え兼ねて力任せに投げ飛ばした膳部の上に倒れても、岡野は依然――。

笑ひを止めない。

那珂原に襟首を掴まれ乍ら、相變らず生麥村の毛唐人殺しの物語を、得意になつて語りつゞけるのであつた。

### ― 河原を見る繩手道。

深み行く夜を歩いてくる二人連の男。

一人は強か酒に酔ひしれてゐる。

それは那珂原と岡野だつた。

『那珂原、お主、何を考へてゐる。』

岡野は狡猾さうに首を縮めて相手の氣息を窺つた。

太刀が爛!

岡野は仰天した。

柳の木を楯に小さくなる。

『抜くなよ。那珂原、抜くなよ。切つてしまへばそれまでだ。藝のないことだ。抜くなよ。おれを殺しては損だ、幕府の懸合ひが面倒になれば、ば厭でも届書の名義人岡野新助を出して引渡さなければならぬ時がくるかも知れない。その時、正味の岡野新助が無ければ島津三郎どのは嘘つき大名、騙り大名になるぞ、抜くな。抜くなよ。斬つてしまへばそれまでだ。』

『蛆虫奴!』

睨みつけたが理をかく正されて見れば那珂原は斬るにも斬れない。

呆れはて、鞆口に力を納めた。

### ― 智恩院門前町に近き或る裏家。

見る影もない借家。

これは庶野薪助の住居である。

いつになく白面でフラリと佗住居に立戻つた岡野は、思ひなしか妻の楠緒の眼に異様な光がキラついてゐるのを見遁さなかつた。

だから思はず首を縮めたのである。  
御飯の菜も自分から甲斐々々しく臺所に佇んで、醜い男手で立働く。

楠緒は立ちほだかる岡野を見上げて、口惜しさうに疊を叩いた。

『何してござる。お坐りなされ。』

烈しく力を籠めて叩くので、一寸、坐るにしても坐りかねる氣配である。

酒が運ばれる。

楠緒の語氣には何處やらに固い決心が見える。

それが言ひがひもない不安に岡野を誘ふ。

『おりや、酒は……飲むまい、飲むまい。』

『坐りなされ。わたしとて飲まば飲まれます。』

『おりや飲まん、飲まん。』

段々氣勢に押されて尻込みをしに居られない。

『わしには悪い癖がある。飲めば必ずそのまゝには濟まさない。酒はこのごろ……慎んだ……慎しむやうにしてゐる。悪事

災難、おれには皆酒だ。』

が、楠緒は無言。

黙々として酒を注ぐでないか。

岡野は妻の視線に合ふとおどおどして據なく盃を取つた。

『あ、死ぬべき場所は、幾らでもあつたのだ。それにおれは……』

死なれなかつた。臆病とも卑怯とも人には言はれる筈だ。知つてゐる、知つてゐる。』

飲みもやらす注がれた茶碗を睨んで重々しげに岡野の述懐が始まる。

『人を賤しめられるのは我慢もする。貧を賤しめられる時……』

悪い癖だ。おれは腹が立つてならないのだ——あゝ。』

黙々と彼は酒を啜り始めた。

貧は人に……媚びる、悲しいことだがおれにはその根性が

ある。おれはその、その爲……自分自身が可哀さうになつた。』

少しづつ、ほんの少しづつ、酔が廻つてくるにつけて、何時

ものいたづら心が頭を擡けてくる容子である。

『言ふまい、言ふまい、言つて見て誰がおれの話をも眞事と聞く

ものだ、はゝゝ。』

妻は佻しい言葉に、やがて、又、少しづつ、感動し始めるのである。

それを見ると岡野は調子づいて饒舌り出した。

『丁度、あの時は八ツ下りの西日が、眞赤に射しつけて秋蟬が

ジーンと並木路に鳴いてゐた……』

恰も軍記讀などのやうに、岡野は又しても生麥村の異人を殺

し——それを恰も自分自身が當の下手人であるやうに如實に語

るのであつた。

——(了)——

浪花座師走興行上演

芝居物語 隅田川續篋

江戸主水

— 主要人物 —

手代要助	野分姫
永樂屋お民	權左衛門
娘おくみ	山崎屋 勘十郎
道具屋甚三	番頭 正八
法界坊	

法界坊は塗方もない墮落坊主である。慾があつて色氣があつて、その上に邪氣があつて……、然し根つからの悪僧でもない。法界坊は、するくて、悪智恵があつて、鼻もちならぬ坊主だけれど、すること爲すこと頓間ばかり、ちつとも統一がとれないので、頗る愛嬌があつて、どこかしら心のよさそうな處がある。

法界坊は、坊主だけれど心から佛さまにお縋り申すなど、いふしほらば、それどころか坊主としては當然な信心といふ心

は微塵もない。

法界坊は、無宗教者である。だから法界坊は、現實主義者であつて、丁度現代人にもつて來いといふやうな性格の持主である。

法界坊は、よく言へば徹底し、悪く言へば墮落してゐる。

悪事をたくらんでもすぐ、化の皮が現はれる法界坊も、どうしたはずみか、講中の男女を説きつけて、

「江戸は淺草龍泉寺へ納め奉る釣鐘の建立、お志はムりませぬかいなア」なんて大聲に呼ば、り乍ら、世の善男善女の懷中を絞つて歩くのだつた。

ところが、法界坊、前にも紹介したやうに、煮ても焼いても喰らへぬ坊主で、講中から得た金は一體何處に消へてゆくのか三四年此方布施を仰いで廻つてゐるのだが、ちつとも溜らない「每晚、一斗からの米と、錢一貫餘り上るのにとどなされたのぢや」とか「釣鐘は何時龍泉寺へ上げるのぢやぞいのう」となぢられても、彼は、空つとほけて問題にしない。其處で法界坊の言草が益々人を喰つてゐる。「流石は凡夫の迷ふたり、よく物を思ふて見さつしやれ、今の一は銀に直して八方へ七ト米が一斗で六百二十四文ばかりかせぬ、なれ共愚僧が行法師勇行のたつしたる印には、見やつしやれ、釣鐘も大方出來たれども、金はの、ほうふへ埋める借金と、鼻の下のおとがひさんわんつく寺へもまかなはねばならず、あいさには、たこの足も

喰はねばならん、こなさん達の思ふように出来てたまるものではござんせぬわいのう」なんて、素とほける。てんで話にならぬ。

何しろ、サニンと、ドン・キホーテと、スメルヂヤコフとをつき雜せて摺鉢でこね廻したやうな男だ。

大體、この『隅田川續佛』といふお芝居からして間が抜けてゐる。此處で間がぬけてゐるといふのは、とても調子外れで面白いと解釋してほしい。

出て来る人物の一人々々が變つてゐる。

一點の隙もないといふ男は、道具屋の甚三だけだ。鯉魚の一軸がほしさに、娘のおくみを山崎屋の勘十郎に嫁入りさせやうと、交換條件を持出した永樂屋の權左衛門も、風變り。

同じく鯉魚の一軸が慾しさに、手代にまで下つた、要助は宿位之助の松若丸も、少々變挺古である、まして、百両の大金を番頭の正八から借りた時、調べないで受取るなんて先づもつて餘りに大暢に出来すぎてゐる。

處が、この要助、とび切りの色男と出来て居るから羨望の次第だ。

權左衛門の娘おくみは、手代の要助に惚れてゐるので、といふよりも、すでに親の目をしので二世も三世も言交してゐるので、勘十郎にお嫁入りするなんて考へは毛頭ない、處で、こ

の娘は、誰れにも惚れられるといふ、天恵を附與されてゐる。先づ、要助が第一、番頭の正八それに法界坊と来てゐる。御當人は、迷惑至極なんだが、惚れるのは相手の自由だから仕方がないといふもの。

要助をたづねる野分姫は、少々意久地がなさすぎる、すでに要助に、おくみといふ可愛い、女が出来てゐるのだから、諦めて仕終つて、外にすいたらしい相手を探せば、まさか、お化けになつて出て来る必要もないのだが、まあ其處が野分姫の癖らしい執心で仕方がないとしても、法界坊から殺されたのだから法界坊にとりつのが當りまで、何も、要助おくみにとりつくなんて、見當はづれだ。

見當はづれといへば、法界坊だつて然うだ。たとへ、彼のした事が、見當はづれで、片つぱしから成就しなかつたとは言へ人の嫌がることをしつくしたんだから、彼だつて幽霊なんぞになる必要はないのだ。

更に、一層幽霊になつたのなら、念じ佛の功力なんかには化けの皮を現される、といふやうなへまな幽霊にはならぬがい。

法界坊は、人間通りの慾念と、執念をもつてゐるが、死んでも矢張り、頓間なお化けになつた。勿論、地獄へゆくのが嫌で、幽霊になつても此世の人と交渉をもつてゐたいと思つたのかも知れない。

兎に角『法界坊』は古今無類の面白いお芝居である。

堀河御所に  
碁盤の白黒

# 源氏の礎

(鶺鴒石)

一、江間小四郎義時

延 若

一、佐藤四郎兵衛忠信

壽 三郎

月をよすがに松ヶ枝より、何んなく庭におり立ちて

忠信 冠門の隅に備へある君の甲冑取出し、今端の晴着に借用せん。

勝手知つたる中の間へと勇み進んで入りにける。

此の内ツカ／＼と二重へ上り正面奥へ入る鳴物になり下手より、投矢十分あつて奥より忠信詔らへの甲冑、弓弦のきれしを持出る、と下手より兵士出て過ふ是を追込み、是にて二重の真中へ件の鎧、兜を置き、上手へ住ひ手をつかへ

慎しんで禮拜なし。

吉野を落させたまひし此方勿體なくも御身代りに立ちし某、再び御具足、

御弓矢を借用なし清き最後を遂げん所存、偏へにお許し給はれかし。

在すが如く戦ひて

文句のとまりメリヤスになり、是へ薄人遠寄せを冠せ、件の鎧を着る事よろしくあつてと弓を持ち立上る、どんぢやん、ばん／＼に成り中門の外より以前の兵士一時に入來り打つてかゝる、立廻りきつとなる。

此の時中門の外にて

江間 何れも控えい。

兵皆々

と、控へる。

忠信下手を見やり、きつと成り拵らへ、兵士松明を持ち、其外警固の兵士附添へ出て來り、下手にて床几にかゝる。

忠信 士卒を止めし其件は。

江間 六波羅よりの御下知にて江間にやらし義時が召捕りに向ふなり、神妙に繩される。

忠信 扱てはお身は江間殿かや、只一人の忠信を多勢も以つて取圍み不意を打たんとは卑怯なり、何故前に使者を差し越し、尋常に戦はせられざるや、和田畠山の人とならば斯る不法はせられまじ、御主君初め我々も犯せる科のあらざれば繩目を受ける覺えなし。

江間 覺えなしとは申されまじ、鎌倉殿の勘氣をうけて都の内に潜み居るは天下の法に戻るなり、なぜ御不審晴る、時節を待ち罪を訴へ出でざるや。

忠信 イヤたとへ時節を待つ進も證者の詞を用ひたまふ、鎌倉殿の御疑ひ晴る、時節のあるべきや、只我望みは此のお館なる君の御座所へ斬入つて最期を遂ぐるが身の本懐、それを妨げ召されんとあれば江間殿として用捨なし、一世の手並お目にかけん。



江間 堀川御所に斬入つて最期の場所に

なさんとは忠臣にて忠臣ならず、後日のお祟りある事を御身は心附かざるか  
忠信 なんと。

江間 オ、知らずんば申して聞さん、抑も今般の御不審は使節たる土佐坊を討取られしが第一ヶ條、然のみならず都を騒がし多人數討つて相果てなば判官殿のお身にかゝり、臣下の身として不忠ならずや、其所を思はゞ詞に服し尋常に切腹いたされよ、義時はにて見聞なさん。

忠信 ハツ忝けなきお諭し理非明白なる意見につき、清き最期を仕れば何卒御猶豫下さるべし。

江間 遺がは忠臣、會得せり然らば義時は場にて介錯仕らん。

忠信 北條殿の御子息に介錯うけるは、身の本懐、御禮のしるしは主君より、先頃給はる此一刀貴殿へお譲り申したし。

江間 扱てはそれなる一刀は判官殿より

賜はれしとな。

忠信 弓矢の家に生れたる其甲斐ありて殿の弓に表はせし星の數、今年積つて二十八歳。

江間 其裏笥と元笥の日月いまだ地に落ちねば骸は爰に終るとも名は薫ばしき佐藤忠信。

忠信 勇あり、義ある武士の情け。  
江間 勇士の切腹立派にせよ。  
忠信 誠の勇士の最期を見置き、後代の語り草にせられよ。

勇士の最後ぞ。

忠信腹へ刀を突立てるを「木のかしら」江間は平舞臺より見上げ、是の引ばりよろしく。

幕

壽三郎初演の「忠信」

顔見世月の浪花座は魁車、壽三郎、延若三花形の奮闘劇でいづれも當地には珍らしい狂言揃ひである。一番目堀河御所

に碁盤の白黒「源氏の礎」三場は俗にいふ「碁盤忠信」で壽三郎當地初役の佐藤

忠信 大吉の木柴入道橋三郎の梶原景久福太郎の娘小車延若の江間小四郎といふ役々で、同狂言は先代左團次が當地で上演以來絶えて久しく道頓堀に出なかつたもの。書卸しは明治十八年二月東京千

歳座「千歳會我源氏礎」五幕十場河竹默阿彌作のもの明治四十四年にこの史劇の筋に基づいて市川流の荒事に書改められ

て「碁盤忠信」が獨立した。頼朝の不興を蒙つて堀川御所を追はれた義経は忠信等を従へて奥州へ下向の途中、雪の吉野山を通つて大勢の徇兵に圍まれる、忠信よく奮戦して義経を落し、京都へ歸つて

妻小車の父小柴入道の館へかまわれたが入道の詭人に依て捕手に圍まれ碁盤を盾に奮闘してこれを追ひ散らし、後切腹して果てるといふ筋で猛優壽三郎を活躍

せしめる好箇のものである。



世話  
在吉  
せう風

# 「償金四十萬弗」演出憶書

田 中 總 一 郎

×

分載されて發表されたこの戯曲は、正直に言ふと、その最初は、別に深い感銘をうけなかつた。

然し、最後の五幕以下を讀了した時、私は、非常な壓迫感をうけた。

それは、單なる作劇法による迫真性からではなく、そこに描かれてゐる一個の「人間」の魂に直面したに外ならない。

一人の性格破産者とも言へる主人公岡野新助は、私の腦裏に生きて躍つた。

×

この一つの性格を、或人は、いつもの眞山式人物であると評し去る人があるかも知れない。

その人は、自らの偏狹を恥づべきである。

×

『平將門』に見る如き『桃中軒雲右衛門』に見る如き、『富岡先生』に見る如き、何處か一味相通じてゐる性格のエレメントは、この岡野新助の中にも發見することは出来る。

然し、それだからと言つて、眞山式性格のカテゴリにすぎないと斷じ去るは、早計である。

ここに描かれてゐる、幾分のセンチメンタリズムと幾分のニヒリズムの盛合された性格は、いつの世にも絶えない一つの『人間』の魂の姿である。

×

私は、この長編戯曲を、一つの性格悲劇として取扱ふつもりである。

×

この演劇を觀て泣く人もあるだらう。  
この演劇を觀て笑ふ人もあるだらう。  
然し、私は、尙その上に、そこに描き出される『人間』の魂の姿を見て貰ひたいと思ふ。

作家眞山青果氏は、練達の士である。

### 南座顔見世興行總配役

〔雲の部〕一 番目 『尾影光琳』二幕、中幕  
『双蝶々曲輪日記』八幡の里、淨瑠璃 『保名』  
清元連中 『勸進帳』大喜利 『平家蟹』一幕  
〔夜の部〕一 番目 『菟卷』二場、中幕 『繪本  
大功記』尼ヶ崎の段、新古演劇十種の内 『茨  
木』長唄囃子連中、二番目 玩辭樓十二曲の内  
『藤十郎の戀』三場、大吉利上の卷 『小鍛冶』  
長唄連中下の卷 『三社祭』清元連中 × 南興  
兵衛後に南方十次兵衛、富樫左衛門、武智重  
次郎、坂田藤十郎 (中村鷹治郎) 尾形光琳、  
源判官義經、嫁初菊、宗清のお尻 (中村福  
助) 保名、松下晋之丞、三條小鍛冶宗近、善  
玉 (林長三郎) 渡邊始興、伊勢三郎、伊藤甚  
十郎 藤十郎の金剛 (中村政治郎) 伏見屋妻あ  
づま、龜井六郎、神南屋おつま、以春に扮す  
る俳優 (片岡當之助) 神善四郎の妻おかね、

俳優延若、魁車、壽三郎の諸氏の技倆は、既に、諸卿の熟知せる所である。  
その間に處して、私は演出家としての自らの非力を悲しむの念にかられてゐる。

ともあれ、私は、私の最善をつくしてゐる。  
私の一切のアイデアは、舞臺を觀て貰ふより外にはない。

助右衛門に扮する俳優 (中村成笑) 講中五介、  
順妻に扮する俳優 (中村成三郎) 花見の武士、  
源吾助作に扮する俳優 (中村扇) 大黒作左衛門  
妻お梅、太刀持、藤十郎の弟子 (中村鷹之助)  
神善四郎の娘おのり、遊女、片岡我久之助) 娘  
お花 (林敏夫) 睡家二條綱平公、平岡丹平、常  
陸坊海尊、丹波屋の主人 (市川颯十郎) 手代善  
吉、高松三策、狂言方 (市川延藏) 湯淺作兵衛  
妻おとき、遊女、中村福萬壽、新六道具方吉松  
 (市川市昇) 花見の町人、道順に扮する俳優 (市川右左治) 手代市松、軍卒藤内、八幡屋の  
手代 (市川蓮平) 番頭重助 講中畑作、頭取 (市  
川齋五郎) 三原傳藏、番卒兵内、普門院了念  
辯間久吉 (市川菊登羅) 難波屋の妻およし、母  
お幸、後宗臯月、遊女 (市川蓮女) 中村内藏之  
助、伊藤小左衛門 (市川市藏) 中村内藏介の妻  
お石、那須與五郎宗春 尾島吉三郎 常春、眞柴  
筑前守久吉、切浪千壽 (片岡我童) 觀世左近、  
引舟おまつ (片岡ひとし) 尾形乾山、官女玉翠

、貞歌太夫實は娘歌江、加藤正清、お玉に扮  
する俳優 (中村扇雀) 瀧髮長五郎 武藏坊辨慶、  
旅僧雨月實は彌平兵衛宗清、武智光秀、渡邊  
綱、靈狐、惡玉 (松本幸四郎) 士卒軍藤 (松本  
金太郎) 太刀持音若 (松本純藏) 能太夫喜多七  
太夫 (松本豊) 石川六兵衛妻お初、濱の女房お  
しほ (尾上梅三郎) 官女吳羽の局 (尾上菊造) 官  
女綾の局 (尾上梅三郎) 手代信七 (尾上彌四郎)  
左中將中山篤親、片岡八郎、士卒運藤 (市  
川升藏) 語太夫中川權太夫、番卒源内、松本錦  
四郎) 手代八右衛門 (尾上梅助) 油小路實隆卿  
 (尾上梅十郎) 手代三右衛門、後見 (松本大七)  
後藤庄右衛門妻お直 (松本三四郎) 番卒軍内、  
官來彌藤二、宇源太、梅柳に扮する俳優 (尾  
上幸藏) 女房お早、官女玉虫、妻みさほ、叔  
母眞柴實は茨木童子都萬太夫座の若太夫 (尾  
上梅幸)

# 喫煙室

## 高橋蓼雨

ムと片唾。

中座の太功記十段目。

那治郎の重次郎が戦のにはから立かへり、又にもまる血汐を嘗めつゝ味方の敗戦をもの語り、二世とちぎりし魁車の初菊の手をとつて果敢なく息が絶える。

急に愛人をつた初菊、暮がしまつて薬屋の風呂へつかり。  
「けふから二十二遍、若後家にならる」

長三郎の長左衛門と、福助のおせんが藏から出る。

鬢のもつれから薙女のおさがと三角關係の空氣漲る。

神經過敏なのが腕掛いて「フリー

喜多村縁郎のもとへは相かはらず、字餘りや、足りないのや、皆目意味のわからない、珍無類の俳句を送つてくる。

俳人縁樹、浪花座まく間の徒然に、書生へ口授しに、縮入りの句へ朱を入れさして還送せしむ。

書生つぶやき。

「師に従はむと慾すれば舞臺研究のひまなく、研究せむと慾すれば師に反むく」なんて、せつせと代筆。

平の重ちやん泉下で苦笑。

辨天座、文樂の源平布引漣。

三段目は古鞍、四段目は津太夫。

九郎助住家へは、質盛、瀬尾、九郎助、小まんの人形。

鳥羽の離宮へは、多田藏人、難波の六郎、小櫻姫が出る。

片言雙語も聞き渡らさじと耳に手をあて臉もうたないで、ぢつと凝視てゐた森なか、といふ八十歳のお婆さん。

「この發題、つゞきでないらしい？」

この人へは、千本櫻の、すし屋と御殿を同時に觀せられぬ。

右團次、壽三郎、延若等の一行が、宇野から高松への連絡船にのりこむ。

雛僧の腰衣やうのものをはいた毛斷と、蝙蝠形のマントに包まれた長髪の人とが、甲板の上から限れる如き瀬戸内海の嶋々を物思はし氣にながめてゐる。

孰つちが男か女か、しばらく問題となつたが、腕時計の紐の色にてやうやく男女の別がわかつた。

セキセイインコの雌雄のわからぬのも無理でない。

丸龜の戎座へ出勤せし中村福太郎が金刀比羅宮へおまゐりして。

「金の馬、其塵もんあらしまへんでした……」

よく訊くと、前の社へ参拜したが、肝腎の本社がその上にあるのを知らずに歸へつたのであつた。

福太郎の悲歎やる方なく、錦色まばゆき象頭山を遙拜しつゝ齒切かむ。

いゝ智慧を授ける。

「生憎、陰曆の神無月、神さまは御不在ゆへ本社へは失禮しました」と、いひなさい。

住よしの、文化住宅から西長堀

住よしの、文化住宅から西長堀

南道貳丁目へ轉居した鶴屋南北の宅から、極もあらはに宇和嶋ぼしを往還する藝妓舞妓の艶な姿が眼のあたりに見える。

川柳の大家馬場謙二有卦に入り『あれが新町、これが堀江、うまいぞ〜』

和歌山中學と高松商業との天下分け目の晴れの合戦をみぬのは恥と寢室川へ出かけた浪花座の武田この夏、北中と神港を屠りし高松への吊合戦とも思はれて郷土愛から絶対の和中びるゝ。戦火をふき、殺氣みなぎり、戦いよ〜白熱化する。

その一勝一敗毎に彼れの心臓の鼓動はげしく稍や上氣かげん。これではならぬと唇かみしめ、肩胛怒らしてみても、和中方にさざる者ありと陣中に響きし小川の健闘も味方に利なく、第七回う

らの土井の力走も、童顔水原、堀のために無惨の最期をとげたので又の幸福をいのりつゝ歸へつた。加之、ファンに採まれて電車の中へ轎子を落し。

『嗚呼、けふは如何なる悪日ぞや〜』

浪速區、霞町の車庫まへに、このほど。『観劇初日會事務所』と、勘亭流の看板を物々しく掲げた家がある。

これこそは、初日の大向ふにかくれもなき、奇聲黨の旗頭、青山なにがしの城廓。このひと、歌舞伎芝居の初日には七十餘騎の同志を率ゐ、朝まだきから旗號堂々と自ら駒を陣頭に進めて命くらべ根競らべに叫ぶさま物凄なものがある。

長嶋黍夢よろこびて。

『店開きに、道修町で高聲薬を十貫匁ほど買うて贈りませうか』馬の抹茶と間違うてゐる。

歌劇脚本も書き、嘗て、ペンダイン鳥が棲むて、絶海の南洋へ飛びたいと、聞て鬼門の門屋敷、瓦屋橋の西づめにて油屋のひとり娘と浮名を流した鶴屋宗三郎。

このごろは玉屋町の自宅へ閉ぢ籠つて、素木宗一、吉岡宗三郎とな匿名で、道頓堀、演藝叢報へ『芝居見たま〜』の一手販賣。

それが近來職業化して。鶴屋宗三郎改、見たま〜屋宗三郎、てな名刺をこしらへて『喫茶店見たま〜、ダンスホール見たま〜、でもかきます、原稿料、そこはソレ讀みと歌で……』

君がライオンへ行つて、十銭のソーダ水で椅子を三時間占領するやつめッ』

見たま〜を書くがい。松竹事務所の食堂の十姉妹をチユウヤんが失敬する。鼠捕り、猫いらずの手にはモウのらなくなつたので金網へ錠を下ろしたが堅すぎて開ける拍子に一羽飛び出した。

棹と、風呂敷で、アレヨ〜と蛋取眼。

鳥は、食堂子へは一瞥もくれず屋上からスガ〜しき中秋の空に向つて飛ばたき、ねつから塙へかへつて來ぬ。

ものゝ半响もかゝつてやつと捉らへ、今度は大きな迷子札を足へ縛りつけ、假令飛んでもモウ大丈大。

ところが運動不足で御不例と御座い。

『エイ、ジュー——シマツにおへぬやつめッ』

雀右衛門の三千歳姫◇



# 三代目雀右衛門の死

鳥江 鍊 也

◇ 初代市村羽左衛門は或年の或月、江戸の或芝居に『一谷嫩軍記』熊谷陣屋を出しました。そしてその興行は非常な大入で千秋樂日まで無事に打つゞけて行きました。羽左衛門の役は勿論熊谷次郎

直實、實にあつばれな熊谷だつたさうです、丁度、その千秋樂日の舞臺、彼はその日の熊谷を幕内の人の目にも立つ程日頃とは打つて變つて冴え返る程念入りに勤め上げた。首實験もすんだ彼は墨染の法衣に杖と笠、身を僧形にやつして幕切

れの舞臺に現はれた、そしていつもの如く花道にかゝつてからそこで靜かにセリフを云ひました。

『十六年はひと昔、あ、夢だ、夢だ……』  
「ちばな家ッ！満場の見物は嬉んだことに違ひありません、だがこれを袖や戸屋口からのぞいてゐた幕内の者は思はず惹きつけられる様な気がしたかも知れません。といふのはその『十六年はひと昔……』の初代羽左衛門のその日の引込みこそ一生一代のものだつたのです。だから大騒ぎが初まりました。羽左衛門の熊谷が戸屋口に入つた姿は認めたがそれから彼の樂屋へ戻るべき筈の姿が既にその騒ぎの起る時分には芝居小屋から消えてゐたからであります。間もなく、ある所の寺院の庫裡に現はれた一人の美しいが逞しさうな旅僧がありました。そしてその旅僧はその寺院の和尚に逢つて遂にそこに足をどめてしまひました。その旅僧こそ初代羽左衛門の熊谷直實の舞臺姿

でありました。彼は若き頃の或戀愛事件に無常を感じて出家を志し、舞臺妾のまゝ小屋を脱けて遂に本當に頭を丸めてしまつたさうです。とんだ蓮生坊になつた譯。

◇ また、五代目尾上菊五郎はその晩年中風を患つて手足の自由を失つたさうです。その中風にかかつた病勢の初期の頃、彼は「四ツ谷怪談」でお馴染の隠亡堀のほとりの自宅から醫者の家へ通つてゐました。或日、それは至つて元氣に醫者の家へ通ふ途中、バツタリと倒れたのであります。附添つてゐた男衆は驚きました、病氣が病氣だけに早速近所の料亭に連れ込んで安靜させ、醫者を呼迎へるやら家人にも知らせるやら大騒ぎを演じました。丁度その時から五代目の手と足は不自由に陥入つたのださうです。だが、口は相變らず達者で、家人達がその料亭から自宅へタンカで彼の身體を運ぶ様な

相談をしてゐるのをチャリと耳にしました。そこで五代目は威勢よく周圍の人に云ひかけた。

『おい／＼タンカで俺らの身體を運ぶな。んざア無粋で氣が利がねえ、戸板に乗つけて運んでくれ、そして着附もこのまぢや俺らしくねえから小平かお岩の衣裳を着せてくれ』

なる程、これは五代目考へたセリフである。行先は隠亡堀のほとりどこまでもお家藝で行くつもりがうれいではありませぬか。しかし突嗟の場合でもあつたし、その五代目の考へは實現に至らなかつたさうですが、その役も舞臺へ出て餘り動かない役、と云つても動く役でも貫録と藝の老舗で見せ得る役を出来る範圍で死ぬ氣で勤めたと云ふことであります

◇ 三代目雀右衛門の死に當面した私は食満南北先生から當て聞かされたこのあのこの二つの話を思ひ出しました。

それは、もう午前三時を廻つてゐる頃でせう。中座の頭取部屋に隣接した役者の溜り場に大火鉢を圍んで椅子にもたれ乍らのことです。

昭和二年十一月十四日の午後六時半といへば、この中座の舞臺では丁度『増補忠臣藏』本藏下屋敷の幕があいて間もない頃です。

この興行は十月からの鴈治郎大一座の打越しに東京表から中車を招いて一番目に『繪本太功記』中幕にその本下、大切に『廓文章』といづれも珍しい顔合せの名狂言がズラリと並べられた大芝居でした。

鴈治郎は重次郎、若狭之助、伊左衛門、中車は光秀、本藏、喜左衛門といふ折紙附の名役、雀右衛門は近頃元氣になつたといふのでその『本下』の三千歳姫に出ました。近頃の大役で久しぶりに名女形としての彼の本格の舞臺を初日から見せてくれました。



それが、突然、バツタリと、かねく幕内の人々は彼の身體に就ては充分の注意を拂つてゐたのですが、全く不意に倒れたのであります。

◇

それぎり駄目になりました。

美しい八百屋お七が吉様戀しさに火の見櫓にあがつて行きます。廿四孝の八重垣姫が勝頼を慕ふて橋掛りに立つてゐます。紀の國局小春がわびしけに行燈の前に坐つて淋しく影像を描いてゐます、その時、私の頭の中には雀右衛門の舞臺姿が次から次へと馳けめぐる走馬燈の様に映じて來ました。

誰もが不安に閉ざされてゐる夜明けが近づきました。その物しづかな空氣の中にかすかな寢息、それは頭取部屋に寝かせてある三千歳姫の粧ひそのまゝの雀右衛門のそれだつたのです。

妻女芝歌さんは涙に暮れ乍ら語りました。

『役者が舞臺に倒れたら本望だと云つて家を出て行きましたが、その言葉が今にして考へると何だか當人は虫が知らして云つたのではないかと思はれます』

長女淺子、次女政子の二人のお娘さん——と云つても既にお二人共三十近いお年です——がこれも無言のまゝ、二人の看護婦と一所に枕許に坐つてゐます。章景さんは高砂家の家に泊つてゐます。

◇

十五日の午前九時、高安博士が二度の來診、それから數時間の後、遂に零時八分コックリと息を引取つてしまつたのであります。

中座の表にはもうその日の見物が詰めてかけてゐました。一時近くになると裏木戸には雀右衛門の容態を心配する一座の人々がいつもよりは早く出勤して來ました。福助の顔が眞ッ先に見えるところ——次にはその日から三千歳姫の代役をする扇雀、魁車、市藏といふ順に續々繰り込んで來ました。喪は天下茶屋の自宅に歸つてから發表することになりすぐ大吊臺が運ばれて、哀れ！美しい三千歳姫の亡體にもまがふ雀右衛門はそれに移されました。そして人夫の手にその吊臺がかつぎあけられる時、中座では丁度時間が來てドロンと着到の片シヤギリが花やかに入つたのであります。

◇

雀右衛門はかうして役者としては最も幸福な死を遂げた一人として、大阪の梨園史を飾る名女形でありました。享年五十三歳。初代は新堀の雀右衛門として有名な俳優、二代目もまた舞臺で倒れたといふ話を持つてゐる雀右衛門、三代目がこの東西の名女形として鳴つた中島笑太郎氏であつたのです。(をばり)



# 新 年 號 豫 告

執筆者は

劇文學一流の大家、新進數十名

新 計 畫

若手歌舞伎俳優のコント  
十數篇を蒐む！

附 錄

## 關 西 俳 優 名 鑑

現在關西にて活躍  
せる百數十名以上  
の俳優を網羅した  
る素顔寫真入りの  
一大名鑑！

◇上演脚本 ◇芝居小説 ◇芝居物語 ◇芝居スケッチ

□表紙は本誌獨特の美麗錦繪

□口繪アート刷寫真十數葉

十二月二十五日發賣!!!



# 光秀の型

川尻清譚

中車の光秀、それは現代に於ける唯一の参考品として既に定評がある、即ち其堅實なる演技、格に倣つた型、苟も一舉手一投足を疎にせず、古名優の長所を我が薬籠中に調合した模範藝である、以下その手順の大略を記述するに當り、更に中車が取残した團十郎、團藏等の型をも書添へ、好劇家の觀劇の葉とする。

『繪本太功記』十段目、尼ヶ崎の場の眼目とされてある、『入るや月洩る片庇、爰に苜取る眞柴垣、夕顔棚のこなたより、現はれ出でたる武智光秀の』義太夫で、本釣鐘を一つ打込み、蛙の聲をあしらつて、下手の竹籤の奥から、此時光秀が始めて出る、——團十郎は此初めての出の鐘の打方がやかましく、一つコーンと打たせ、一寸間を置いて又一つコーンと打たせて、其響きの消えないうちに出た——中車の拵へは黒の大鏡に太刀を佩

き、鑽通しの小刀を差し、簀を着け、竹の子笠で顔を隠した儘草鞋履きで山木下の門口へ窺ひ寄り、内の様子に耳を傾ける形ちで束に立ち、床の絃を『ズ、、、、、ン』と弾かせて、それと共に右手に持つた笠を下へ下して顔を見せる、鬢は漆を掛けた菱皮で、青黛を塗つた眉間には絃月形の疵痕が大きく附いて居る。——團藏のは内の様子を窺ふ時に稍左足を折屈めて耳を傾け、笠を下へ引くのと同時に顔が段々と出乍ら、背を伸して束に立つて眼を見開くので、一人派手で立派に見える行き方である——扱中車は、爰で床の絃を強く弾かせて、横歩きに下手へ五六歩退き、改めて右の手の笠を高く振上げて大見得を切り臺詞で『必定久吉此内に、忍び居るこそ究竟』と云ひ、笠を後ろへ捨て、簀を脱ぐ——團十郎は此臺詞を『最究竟』と云つた、又團藏は爰の義太夫を活用して『只一討と』で笠を投げ捨

て『氣は張弓』で簀を脱いで刀へ手を掛けて氣込む手順がよく附いて居た——中車は『心は矢竹鉾垣の』で首を大きく廻して、下手の竹鉾を見返り、一つ背いて竹鉾の前へ歩みを選び、手頃な竹を見分けてから、鑑通しの小刀を抜いて、それを打切らうとして、ハツと氣が付いて密と根元を切り、左の小脇にかい込んで表向きに少し舞臺端まで出て、竹の小枝を二三本切拂ひ、更に竹の裏表を謂べて見當をつけ、フンと息を入れて穂先きを斜に切落すのが『ひつそぎ鎧』の文句になつて、左手の竹鉾をトンと突立て、右手の鑑通しの小刀を、左手の折屈みの所へ當て、床の絃に合せて體と共に動かして拭ふ仕科をして、小刀を鞘へ納め、再び竹鉾を右の小脇に抱へ、木戸を明けて忍び足に内へ入るのだ、『小田の蚌の鳴く音をば、止めて敵に覺られじ』との文句一杯に股を割つて拯る所へ、本釣鐘を打込ませる詠へである、——團藏は竹の裏表を改めない事、又團十郎は、『止めて敵に覺られじ』とで片足を木戸の中へ踏込み、その足を一度抜いて、改めて忍び足で内へ入り『差足拔足窺ひ寄り』で三段から縁側へ足を踏掛けて拯つた——中車は棧から上へ上り、正面下手寄りになる行燈の下の油壺の蓋を竹鉾の先、で落し、壺の中へ鎧の先を突込み、これを居爐裏へ入れるのでパツと煙りが立つ、其鎧の穂先、を左右の鬘で擦つて磨く仕科があるだけ、そこに本行以外の三味線の手が入れられてある——團藏や芝翫は、竹鉾で行燈の蓋を明けて、鎧先きを油皿へ突込

んで油をつけ、それから居爐裏へ突込むのは同じであるが、鬘で竹を研く代科が片鬘だけで簡單に片付けて居た——中車は其處で鎧を三度シゴいて、上手の障子屋體の傍まで行き内の様子に耳を傾け、背いて障子越しに竹鉾を突差し、すぐに鑑通しの小刀を抜いて鎧の柄だけを切り、是を下手寄りの平舞臺へ投捨て、障子を明けて老母を引出して屋體の真ん中まで連れて来る老母は墨染の衣を頭から冠つて、右の横腹に血綿の付いた竹鉾の先が突差さつて居る、爰までが、聞ゆる物音心得たりと、突込む手練の鎧先きに、わつと魂ぎる女の泣聲、合點行かすと引出す手負ひ、眞柴にあらぬ眞實の、母の皐月が七轉八倒の文句一杯になるのである、——昔は老母が衣を冠らずに出る方が多かつた——光秀はそれを的切久吉と思つて顔を見ると、母の皐月であるのに驚き、『こは母人かしたたり』と言つて、尙も久吉を探す心に、右の手に小刀を持つ體で、上手の障子屋體を明放つて中を尋ね、更に正面の暖簾口へ首を差入れて右左を覗き、猶も外を探さうとして、皐月の苦しむ姿が目にとまき、小刀を口に咬へてその布を取り、皐月の後ろに廻つて布で腹を巻いて堅く締め、口に咬へた小刀を右の手に持ち替へ、下手へ来て母の深手に驚いてダチ／＼と跡へよるけるのが『さすかの武智も仰天』で、改めて右足を一つ大きく踏出して母を眺め、其右足を浮かして引き乍ら控と尻餅を突き、兩手を後ろ

へ支えて肩で大きく息を切つて、「只茫然たる計りなり」と、驚きの極度に達した仕料をする——皐月の腹を巻締めるのに、納戸の暖簾を切取る型もある、又小刀を口に咬へる事は、此頃それが本身で重い爲に、小刀を下へ置てから砧の白晒を取りに行く事もある——「聲聞つけて駆出る操、初菊諸共走り出で」で奥口から文句の通り操と初菊が出て母の介抱をする——團藏は此間に又久吉を探す目配りをした——夫から皐月の迹懐があつて、操が下へ下りて「これ見玉へ光秀殿」になる、操が下りると光秀は小刀を鞘に納めて、後見の出す高合引へ腰を掛けて両手を前で組合せて仰向いて居て、操のサワリが濟むと、義太夫の「光秀は聲あら、け」になり、「ヤア猪小才な謙言立、無益の舌の根動かすな」云々の臺詞がある、此文句の中原作では「北條義時は帝を流し奉る」とあるのを、「帝」と云ふのを遠慮して、「北條義時の試しもある」と直して云ふ事に成つて居るが「昔筏を流し奉る」と云つた大笑ひがあつたと云ふ、其臺詞の終りの「女童の知る事でない」を、中車は「女」と操に掛け「童の」と初菊に掛けて云ふ——團十郎は、此場に居合す人々へは掛けず、只廣い意味の「女童」の心持で云つた——そこで義太夫の「一心變せぬ勇氣の顔色」で、光秀は鐵扇を右の膝に立て、其上へ片手を掛けた形ちで上から操を睨み下ろすのだ、取付く島も無かりけり」で操が倒れる「折しも聞ゆる陣太鼓」でド、ンヂヤン〜になるので、光秀は突立上つて、鴨居

へ手を掛けて向ふを見やる、十次郎が手負に成つて出て来て倒れる、初菊が下へ下りて、操と共に十次郎の介抱をする、光秀此體を打見やり、ヤア不覺なり十次郎、仔細は何と、様子は如何に「疵は淺いぞ」コリヤ悴」などの捨臺詞を言ひ乍ら、段々と縁鼻へ出て来て、思はず足を踏滑らして縁へ腰を落し兩手を後ろに支えてとまる、これは其昔、目の悪い市藏？ が、本當に足を踏外した時、三味線彈きの機轉で「ズ、、、」絃を弾いたのが大層によかつたので、それ以來光秀をする程の人は必ずこれを型に取入れて勤める事になつたものである、爰で光秀は平舞臺へ下りて、十次郎の上手の傍へ寄り、鎧の引合せから藥包を取出し、後ろへ廻つて十次郎を抱へるやうにして、右の手に持つた鐵扇の柄の方で口を割り、右の手に持つた藥を口の中へ入れ、其藥紙を操に渡し、改めて鐵扇の柄を十次郎の鎧の間より右の胸に差入れ、一イニウ三イと呼吸を計つて活を入れるので、十次郎が息を吹返し「父上々々」と取絶ると、光秀が「父ぢや〜て、〜ぢや」と耳の傍で云つて聞かせる、十次郎が又グタリとなるのを、今度は鐵扇で力強く背中を打つ、十次郎が跳起るのと同時に、光秀は上手寄りに身を飛びひさり、股を割つて鐵扇を控へた見衛で相方一緒に極る所がドンヂヤンの鳴物で、義太夫の「はつと心を取直し」一杯になる、爰で光秀は後見の出す高合引へ腰を掛け、鐵扇を右の膝に突立て、物語を聞いて居る——團十郎は爰で高合引を用ひずに

上手に在る竹の床几へ腰を掛けた事もあつた、それは幕明きには母の臍月が腰を掛ける件があつたのを活用したものであるが、團藏は後ぢりに三段へ登つて、後見に小さい合引を入れさせて、真ん中の縁へ腰を掛けて物語を聞いた、但し團十郎も團藏も鐵扇を右の膝に突立て、居る事は同じである——中車は、十次郎に一度『逆賊』と云はせて、ナ、ナーニ』と大きく問返すので、十次郎が『逆賊武智が小童ども』云々の臺詞を云ふ事に成つて居る、物語の始終を聞終つてから、光秀は『ヤア言甲斐なき味方の奴輩、シテ〜四王大但馬は〜』と急き込んで聞く、——昔無學の或俳優が、此臺詞を覚えるのに、書抜きには句讀が無い爲に、すつくり間違つた覚え方をして仕舞つて、初日の舞臺へ出てから一際聲を張上げ、『言ひ甲斐なき味の奴、ばらして四王大、但し馬は如何に〜』と云つたと云ふ大笑ひがある——それから臍月の臺詞があつて落入り、續いて十次郎の斷末魔となつて、『父上々々』と呼ぶので、光秀は目を閉ぢた儘右膝に突立て、居た鐵扇を持ち、要の方で鐵の垂れを三四度叩いて、父は爰に居るぞよと云ふ事を、その音で聞かせる仕料がある、——團十郎は鐵扇の上部を握つて居る手を、其儘柄の方へ落し、つまり鐵扇の柄を持つた形ちにして、鐵の垂れを叩いた、此方が強く見える譯になるのである——爰で十次郎が落入つて仕舞ふと、義大夫の『追勇氣の光秀も、親の慈悲心子故の闇』になつて、母の死骸と十次郎の死骸とを見て泣落しになる

段取である——此時光秀が真ん中に腰を掛けて居ると、上手の母、下手の十次郎を見るのに都合がよく、且つ人形の並び方と上の中と下の三つに別れて見た目のいい所から、團藏はそうして居た——中車は此泣落しに最も力を入れて、所謂豪傑の手離し泣きと云ふ、空難な藝を立派に仕てなして居る、其順序は始め目ど泣き、次ぎに首を振つて泣き、次ぎに肩を動うして泣き一耐え兼てはらく〜』で、右の膝に突立て、居る鐵扇を持つた手の力が一寸外れ掛けるのを、更に力を籠めて立直して『雨が涙の汐境』で全身が動くやうに泣き、浪立騒ぐ』で遂に手に持つて居る鐵扇が膝を外れて落ちるので、兩手を大きく自身の體を抱くやうに腕組みをして、殆んど腹から全身を揺り上げて仰向いて泣き上げるのが『如くなり』一杯になるのである——團十郎も團藏も、此泣落しの件は、最後に鐵扇を抜き、要の所を兩手で握るやうに持ち、それを武骨を段々と顔の所まで持つて行き、顔を隠して泣き上げる型であつた——『又も聞ゆる人馬の物音光秀聞くより突立上り』で光秀は高合引を離れて立上り、二重の上に居る操と、平舞臺に居る初菊とに、死骸を片付けよと云ふ事を顎で指圖をする——本文では是から舞臺を廻して物見の松の件になるので、中車もそれを演じた事もあつたが、は簡單に下手寄りに松の太木を置いて、其處へ登るのもあつたが此頃では大概此件を省いて舞臺を廻さず、すぐに先きへ飛んで陣鐘大鼓を打立てると、疑ひもなき眞柴久吉、風を喰つて光秀

を、討取る術と覺えたり、草履摺みの猿面冠者、いで一擽ぎにいたして呉れん」と略した臺詞を云ひ、爰で刀をすたりと抜いて花道へ掛ると、屋體の中から久吉、花道の揚幕から正清が、「對面せん」と聲を掛けるので、光秀はいつもの所へ立留つて「何がなんと」と云つて一寸刀を構へる、正清が花道から出て来て光秀に鎧を突つける、光秀は片手の刀を鎧の方へ向けて抗勢を取り、正清と共に本舞臺へ返る、此間に久吉は上手の屋體から座敷の方へ来て居る、光秀はこれを見て「ブツ」と驚き、「ヤア珍らしや眞柴久吉、武智十兵衛光秀が、此世の引導渡して呉れん」と、爰へ義太夫が「太刀振りかざし」の入れ文句を語り、股を割つてデリく」と詰寄り、後ろ向きの形ちで三段の一番下へ右足を掛け、更に二段目へ前向きで左足を掛け、刀を右下へ流した構へで極る、久吉が「俱に天を戴かぬ亡君の弔戦」云々と云ふのを聞き、光秀は「道の久吉能く言ふたり」と平舞臺へ下りて立身の儘、右手に刀を下けて持ち「吾も惟任將軍と、勅許を更けし身の本懐、一先づ都に立歸り、京洛中の者共へ、地子——此臺詞がとかくに「慈悲」と響くので、團藏は特に「地子と聞かせるやうに工夫を附けて言つた——を許すも母への追善」と最後の言葉の聲を曇らせ、すぐに氣を替へて、右手に持った刀を左側を立て、持ち、左の手を開ひて、親指と示指との股で、刀の峯を段々に上の方へ擦り上げて見得をする、——團藏は「母への追善」の臺詞を、目の前に落ちて居る

竹鎧に目をつけて、母の死を悲しむ心になつて云ひ、すぐに氣を替へて刀を立てた形に左の手に持替へ、其腕を横一杯に伸し右の手先きを開いて頭より上へ振上げた形ちの見得——中車は「互ひの運は天王山、洞ヶ峠に陣所を構へ」云々を乗りで云ひ「首を洗つてお待ちやれ久吉」で、左の手で首筋を叩く、——團藏は刀を左へ持った儘、右の振上げた手を「首を洗つて」で首筋を叩く手順が付けてある、——夫から久吉と正清とへ臺詞が渡つて、久吉は「先づそれまでは武智十兵衛光秀」、光秀が「眞柴久吉」互ひに「さらばく」で、正清が光秀へ鎧を付けると、光秀がそれを刀で拂ふ、久吉が二重から下りて来る、光秀はこれに會釋して、入替りに二重へ上り、しばらく後ろ向きで居て、久吉が平舞臺の上手の位置に納ると前を向き、縁鼻まで出て来て義太夫の「寫す繪本の太功記」とで互ひに顔を見合ひ、「末の世までも」一杯に両手左右へサツと開くのが木の頭、床の三重で刀を帶の邊で横一文字にして、烏帽子先きの少し手前へ左手を掛け、一寸しやがんだ形ちを、刀を段々に上げるのと共に、體を伸して束に立ち、刀を横一文字の儘兩手で頭上に高く差上げた形ち、三人引張りの見得で幕と云ふのが一ト通りの手順である、——此刀を一度差上げて、更に肩へ擔ぐ人もあるが、それは法に無い事で、つまり持切れない譯になるのである。





期待あれ!!新春早々の封切!!

京都撮影所超特作品・衣笠映畫聯盟製作

# 海國記

林 長二郎主演・田中 絹代 新井 淳

特別助演

京都撮影所オールスターキャスト

原作 大森 痴 雪  
脚色 三村伸太郎  
監督 衣笠貞之助  
撮影 杉山 公平

山田長政が燃ゆる如き野望をもつて國禁を犯し遠くシヤムに渡つたことは吾海國史上光彩陸離たるエピソードであるが、これは又先驅長政の壯舉に後るること數年即ち寛永末期に於て廢れゆく漁村と悲運の吾家との爲めに雄々しくも立ち、秘かに荒海を征服しシヤムに渡つた美少年の物語

松竹キネマ株式會社

角力まゝく



# 玩辭樓漫筆

中村 鴈 治 郎

なつかしい顔見世月になりました。私にとつては、第二の故郷とも思つて居ります。京都のこと、云へば、さなきだに思ひ出の多いことで、毎とし此頃になると、いつも同じ思ひ出の種類ではありながら、新しい氣持がしられます。

さうした古い思出のことは、このごろ大阪毎日の紙上で、自傳のうちへこまかく述べさせて頂いて居りますので、もうお話しはありませんが、私が生れて始めて、こんな恐い思ひをしたことがない、といふ、ちよつとしたお笑ひ話を申上げます。顔見世月であつたか他の興行の時であつたか、何分にも四十年も以前の話ですから、それは御容赦をねがひます。而し寒い冬の頃のことであつたのは覚えて居ります。京都では市中の人氣商賣の人々が、毎月の己の日の宵から深夜にかけて伏見の稻荷さんへ『お山』をすることになつて居ります。お山といふのは稻

荷の末社が裏山に何百箇所とお祀りをしてあります、それへ巡拜をすることなのであります。大阪からも無論信心の商人さんたちが詣ります。

勿論神信心であるのはいふまでもないことですが、これが春とか秋とか時候のいゝ時であると、それはく賑かで、何しろ人氣商賣の若い衆たちが男女幾組となく、提灯をさけて、各々の連れを呼びながら、まつ暗なお山を巡る。なかくの騒ぎです。ところが私の參詣した此話の時は冬の最中でありましたので、さしものお山も、ひつそりとして、宵のうちだけで大方の人は歸つてしまひました。私は芝居を打出してからお詣りをしたのですから、お山は漆を塗つたやうな暗さです。一社々とお詣りをして、うねくとしたお山を廻つて居ります。その石高道のある處までまゐりますと、その邊へ、ちよつこりと一

人の小女が現はれました。見ると細帯で見すほらしい姿、どうも歩きやうが普通の人のやうではない、私はあちらへ避け、こちらへ避け、急いで歩き出しましたが、女もまたその通りに歩いてまゐります。私はふと何かの幻影でも見てゐるのではないかと思つて見たりしましたが、どうも夢でもないやうです。相變らず影のやうに女は私に添つて歩いて居ります。十五六の年恰好に見えますが、それより老けてゐるやうでもあり、或ひは魔性のものではないかと思ふと、私はぞつと寒氣がして來て一時に恐怖が加はつて來ました。私は咄嗟に傍へ歩いて來た女を突き飛ばしたのです。女はキヤツと悲鳴を上げて仆れましたので、その聲から想像してみると豫想に反して魔性の者でもないやうなのです。で恐るゝ傍へ寄つてみると、どうも女は本物のやうなので、とりあへず介抱をして、女を連れて一旦下山をすることに、門前の玉屋といふ茶店で、女を憩ませて、仔細を聞いて見ると、女も實ははじめてのお山が聞いたよりは奥深くて淋しかつたので、怖れを抱きながら歩いてゐたのです。結局怒いゝといふ思ひの者が二人集つたわけでした。而かも顔を見ると少しは見覚えのある先斗町の竹勇といふ藝妓であつたので、私はとうとう十圓の見舞金を奮發して、一座の連中とともに、その笑ひ話をもち出して、その藝妓を聘らして大散財をやつたのです。

勿論電燈といふもの、無い時代のお話です。



私にも趣味と道樂はすこしぐらい持ち合はして居ります。茶は一座に市川齋五郎といふ宗匠がありますからそれに習ひ、畫は竹内栖鳳先生にその呼吸を學ぶことがいつもあります。一筆を下すまでに、ちつと畫絹を睨んで數分間想ひを凝らさねば容易に筆を走らさない栖鳳先生の畫の描きぶりを見てゐますと、どうも如何なる藝術もその境に望む覺悟の容易でないことが悟られます。私はその他芝居の休み中で暇を得ますれば、他處の芝居や映畫、または臨時の舞踊會や音楽會へまゐることを一種の趣味にして居ります。かういふ時は私の商賣である俳優をつかり忘れてしまつて、その場々に臨んでその時の氣持をもつて見物することにしてゐます。たとへば新聲劇なら新聲劇、五郎劇なら五郎劇、その自體がもつてゐる特色やいゝものがよく解ります。如何なるものでも向ふの心持に入つて見ることにすると、一層、おもしろ味があるやうに思ひます。

映畫も好んで見る方ですが、西洋のものでも、またそれぐの俳優の技を見まして、それがいゝ點になりますと、やはり日本の趣味と人情とに變りはなく、結局藝術には國の隔てがないといふ氣がしまして、なんとも云へず愉快で、思はず惹き込まれて見物いたします。

# 編輯後記

朝 郎 生

『道頓堀』が皆さんの御手許に届くと同時に、顔見世の南座は本年掉尾の活氣を呈してゐることと思はれます。

『道頓堀』も歩一步堅實な歩調を辿つて参りました。編輯同人一同大奮闘をいたしました。御覽の通りの『顔見世號』を造りました。

表紙は南木氏秘藏の綿繪勸進帳口繪は、本誌でなくては見られぬ寫眞を揃へましたし、本文では各一流大家の『顔見世』の考證、研究を始めとして、松居松翁氏の上演脚本尾形光琳を頂くことが出来ました。

ことしのどろとんぼりは一月を池津勇太郎氏、二月を富田泰彦氏三月を吉本寛河氏、四月を尾河秀二氏、五月を新谷誠水氏、六月を鎌谷來水氏、七月を西田眞三郎氏八月を山上貞一氏、九月を京極利

行氏、十月を野村治郎三郎氏十一月を高原慶三氏、それから文樂座の一年を八木柳絲氏に御執筆願ひました。昭和二年度道頓堀各劇界の情勢を知るべくやがては貴重な文獻となるものだと思つて確信いたしました。

川尻清潭氏の『光秀の型』は先月號に頂いたのですが、締切日の都合上今月號に掲載いたしましたことを執筆者並びに讀者諸賢にお詫びいたします。幸ひ、南座の顔見世には『繪本太功記』の尼ヶ崎が出ますので、幸四郎の光秀と中車のそれとを參酌してごらんになれば、大變面白い研究になるだらうと思はれます。

毎號御愛讀を願つて居ります處の『玩辭樓漫筆』は、名優雁治郎の及及び生活をうかがふことの出来る興味ある隨筆で御座います。今後共更に續けて頂くやうにお頼みいたしてあります。

『價金四十萬弗』憶書を頂くため

に、田中總一郎氏には大變御迷惑をかけました。田中氏は浪花座と南座の新作物演出のために來阪してゐられたのですが、宿が丁度編輯部の前だつたものですから、私共にとつては誠に好都合で随分五月蠅く御執筆をおたのみに上りました。此處に深くその罪をお詫びいたします。

『顔見世號』の編輯が終ると同時に、正月號の仕度にとりかゝらなければなりません。一體、執筆者にはどんな顔振れが揃ふか、それから、どんな珍らしい讀物が集るが、それは次號のおたのしみ、ところで、正月號の附録は『關西俳優名鑑』を出さうといふ計畫が御座います。現在關西劇壇に活躍してゐる百名以上の俳優の素顔寫眞と、趣味、經歷、日常生活を知るには、是非これを座右に備へて置かねばならぬといふ、素晴らしい大附録です。

先づは今年のお名残りまで。

昭和二年十二月一日發行  
月刊『道頓堀』第二年  
雜誌 第十五輯

誌代は前金でお拂ひを願ひます。

郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。

御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

定價 金參拾錢 (郵券五厘)

昭和二年十一月廿八日印刷  
昭和二年十二月一日發行

大阪府南區久左衛門町八番地

編輯者 松竹合名社

發行者 鳥江 鏡也

印刷者 松本 米藏

大阪府東區西橋本天王寺町五七八五

印刷所 桃谷印刷株式會社

電話南(三三三)番

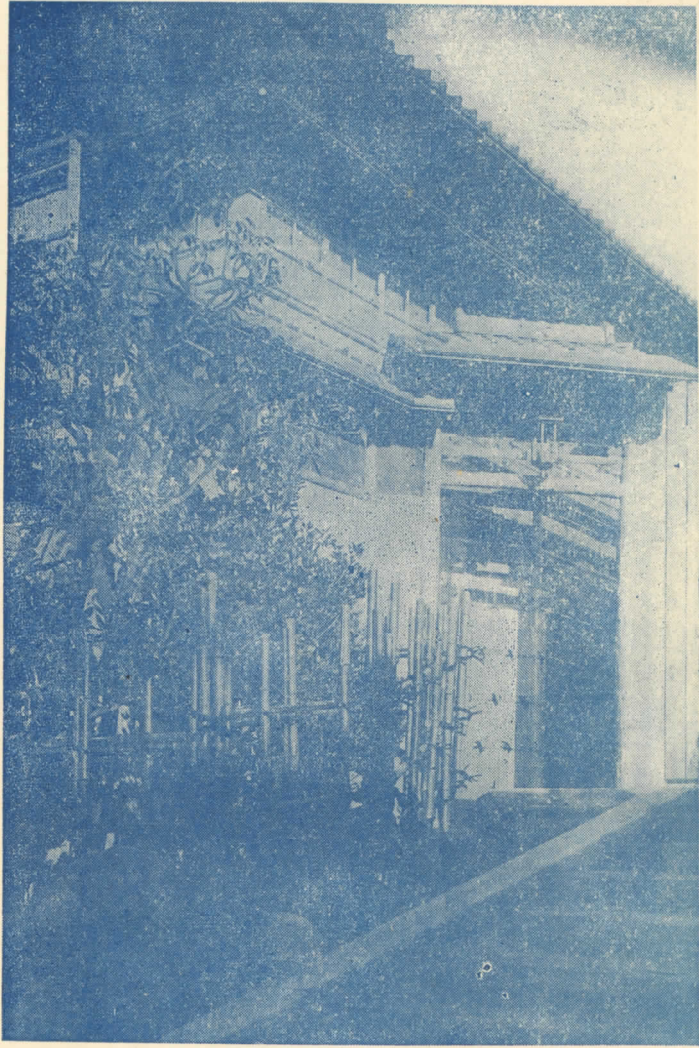
電話南(三三三)番

大阪府南區久左衛門町八番地

松竹合名社内

發行所 道頓堀編輯部

電話南(二四〇)番  
電話南(六六六)番



津 高  
屋 腐 豆 湯

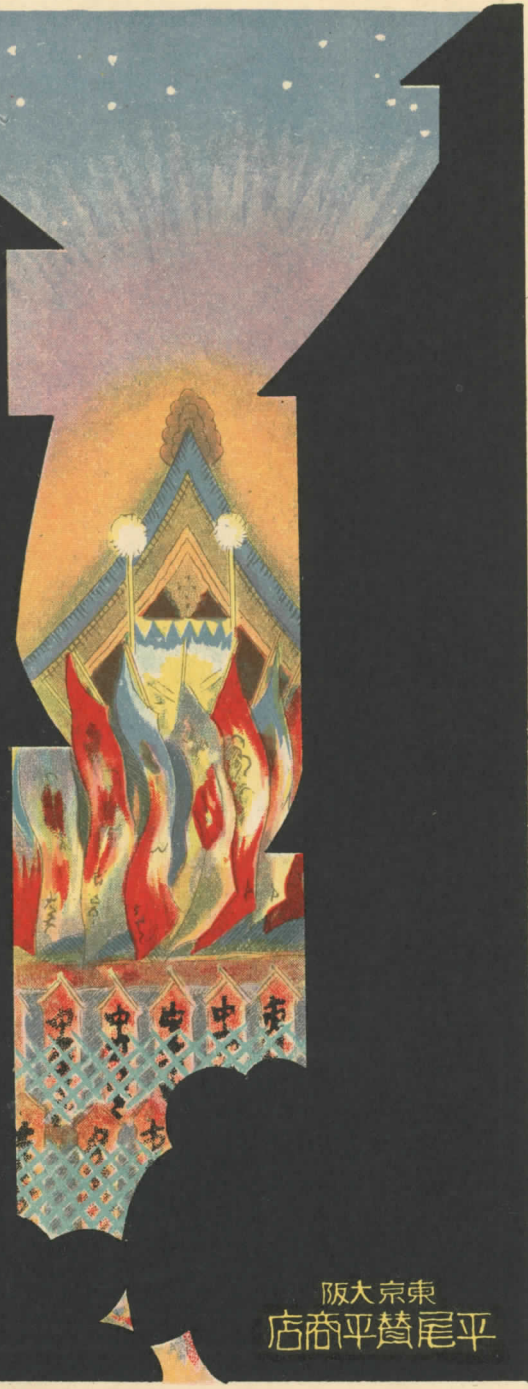
番 八 一 三 南 話 電 長  
番 九 六 〇 六



(昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可)  
昭和二年十月二十八日印刷  
昭和二年十一月一日發行

若く明るいの顔になる

# シート白粉



阪大京東  
店商平替尾平

金參拾錢 (四郵 錢稅)